

横浜ユーラシア文化館紀要

**Bulletin of
the Yokohama Museum of
EurAsian Cultures**

No. 11, 2023



横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures

横浜ユーラシア文化館紀要 第 11 号
Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 11

目次
Contents

〈論文〉

炭化種実組成からみたオホーツク文化の食用植物利用	1
	榊田朋広

Use of edible plants of the Okhotsk Culture from the point of view of charred nuts and seeds	Tomohiro Sakakida
---	-------------------

李徳成文書に見る戦時下の横浜華僑の暮らし	21
	伊藤泉美

The Difficult Life of Wartime Chinese Living in Yokohama: Based on the Li family's Documents	Izumi Ito
---	-----------

〈研究ノート〉

オホーツク文化の動物意匠遺物集成 (2)	35
	高橋 健

Zoomorphic objects of Okhotsk Culture (2)	Ken Takahashi
---	---------------

〈資料報告〉

八王子市郷土資料館井上コレクションの千島出土骨角器	55
	高橋 健

Bone and antler artifacts from Kuril Islands: Inoue Collection, Hachioji City History Museum	Ken Takahashi
---	---------------

炭化種実組成からみたオホーツク文化の 食用植物利用

榊田 朋広*

本稿の目的

北海道のオホーツク文化は、5世紀から9世紀後半頃の宗谷海峡周辺からオホーツク海沿岸部・南千島にかけて展開した考古学的文化である。同時期の続縄文・擦文文化とは系譜が異なり、大陸と接点をもちつつ、北海道以外にもサハリンから千島列島北部までの広大な地域にひろがった海獣狩猟・漁撈を主たる生業にする文化として知られている。遺跡からは貝塚や魚骨層が発見され、銚頭や釣針等の骨角器とともに海棲哺乳類や魚類・貝類等の海洋生物の遺存体が多量に出土する。そのため、動物遺存体、狩猟・漁撈具、土器付着物の安定同位体等資料の多角的な検討にもとづくオホーツク文化の狩猟・漁撈研究がはやくからすすめられてきた（大井編 1982, 西秋・宇田川編 2002, 前田 2002, 天野 2003, 横浜ユーラシア文化館他編 2021 等）。

一方、オホーツク文化遺跡の調査では1980年代からフローテーション法が導入され、炭化種実からみた食用植物利用の研究もすすめられている。オホーツク文化の食用植物のうち、栽培植物については山田悟郎による研究の蓄積があり（山田 1995b・2018 等）、現在までにオオムギ・アワ・キビ・モロコシ・アサの5種類が確認されている。また、堅果類や果実類等の野生植物についても食用されたとみられるものがリストアップされ（山田・今井 2012）、それらの一部についても利用法が推定されている（山田 1996b）。

筆者は、一昨年開催されたオホーツク文化の企画展の図録のなかで、野生植物利用に関するコラムを執筆する機会を得た（榊田 2021）。その準備で先行

研究をひもとき資料を集成・実見するなかで、オホーツク文化の炭化種実組成が、同時期に併行する続縄文文化終末期（北大式期）・擦文文化の炭化種実組成（榊田 2019, 榊田・高瀬 2019, 榊田投稿中）と比較したとき、きわめてユニークな特徴をいくつも有することに気づいた。また近年ではオホーツク土器の編年研究がすすんだことで従来より細かい時間軸で炭化種実組成をとらえることが可能であり、検討の結果、オホーツク文化の雑穀の出現と展開について興味深い知見が得られた。オホーツク文化の寒冷地域における海洋適応と大陸との北回り交流は、北海道ひいては日本列島の歴史上ひととき異彩をはなつ特徴として知られるが、食用植物利用の実態もそうした特徴に関係している可能性を本稿で論じたい。

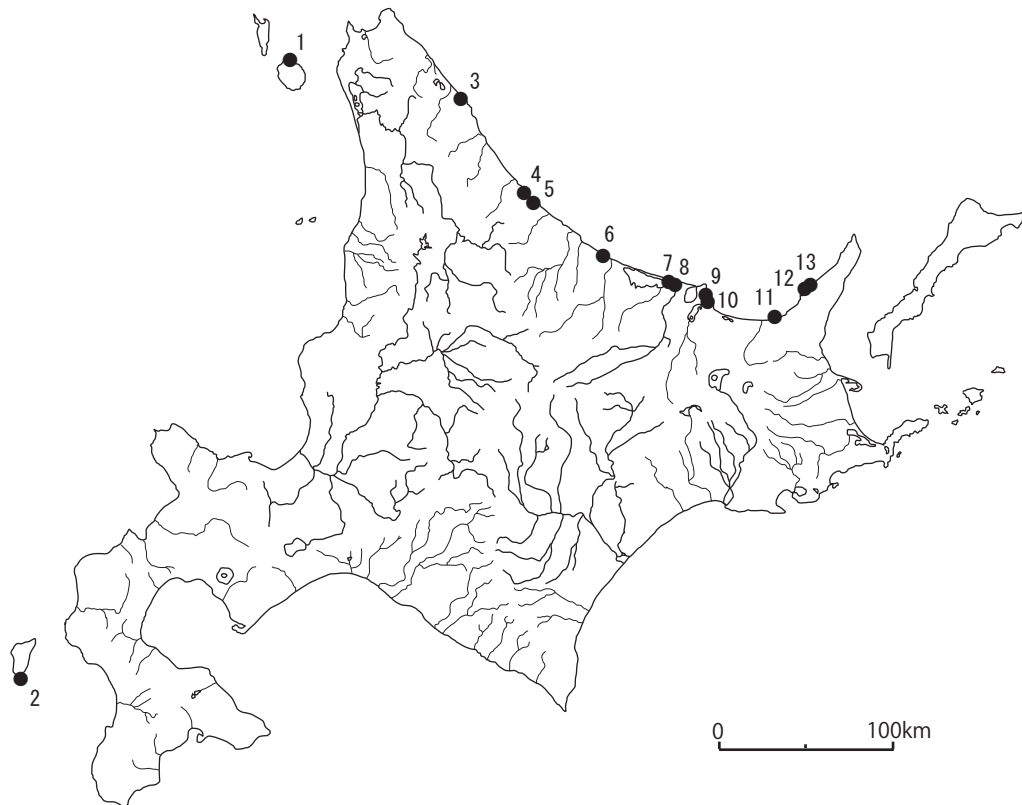
以下では、第一にオホーツク文化の食用植物利用の研究史をたどり、現時点で明らかになっていることをまとめる。第二にオホーツク文化の炭化種実を遺構別・時期別に集成し、その概要を呈示する。第三に炭化種実組成からよみとれるオホーツク文化の食用植物利用の内容と特質を、続縄文文化終末期・擦文文化の炭化種実組成や北方狩猟・漁撈民の植物利用に関する民族調査データとの比較をつうじて論じる。

1. オホーツク文化の植物利用の研究史

1-1. 食用植物利用に関する研究史

オホーツク文化の栽培植物、とくに雑穀の研究は、貼付文期に属する二ツ岩遺跡竈穴屋内骨塚からオオムギ・アワ・キビが出土したことにはじまる。

*SAKAKIDA Tomohiro 札幌市埋蔵文化財センター
文化財調査員



1. 利尻富士町役場：2. 青苗砂丘：3. 目梨泊：4. 雄武堅穴群：5. 雄武川尻：6. 川西オホーツク：7. 常呂川河口
8. トコロチャシ跡：9. ニツ岩：10. モヨロ貝塚：11. カモイベツ：12. チャンコツ岬上：13. ウトロ

図1 本稿で論じる炭化種実が出土した遺跡の位置

なかでもオオムギは、道央・南部や本州東北地方で出土したタイプと異なる「擦文オオムギ」（吉崎・椿坂 1990）であることが注目された。「擦文オオムギ」と似たタイプが大陸沿海州の遺跡で出土していたことから大陸経由でもたらされた可能性が想定されつつも、①経由地のサハリン等の様相が不明なこと、②ニツ岩遺跡から大陸系遺物が出土していないこと、③同遺跡から擦文土器が出土し同時期の擦文文化で雑穀農耕がおこなわれていたことなどから、これらの雑穀は擦文文化から入手されたものと考えられた（山田他 1991）。

その後、貼付文期の目梨泊遺跡（吉崎 1994）と沈線文期の雄武堅穴群遺跡（山田 1995b）で雑穀の出土があいつぎ、「擦文オオムギ」の出現が沈線文期にさかのぼることが明らかになった。そして、同時期の擦文文化遺跡では「擦文オオムギ」が出土せ

ず、大陸沿海州の初期鉄器時代～女真時代遺跡での出土例があらたに多く確認されたこと（山田 1994）が決定打となり、オホーツク文化のオオムギ（「擦文オオムギ」）は大陸から渡来したものと考えられるようになった（山田 1994・1995b, 山田・椿坂 1995）。アワ・キビについては擦文文化から伝わった可能性が指摘されつつも、「通常穀物は数種類がセットとなって伝播することが多く、アワとキビが道央から、オオムギが他の地域（大陸：筆者註）から伝播してオホーツク文化の集団のなかで3種がセットとなっていたとは考え難い（山田前掲：115頁）」とされ、オオムギとセットで大陸から渡来したと考えられた。

その後も川西オホーツク遺跡（吉崎 1995）や常呂川河口遺跡（山田 1996a）で雑穀が出土し、オオムギ・アワ・キビの発見例は着実に増えていっ

た。ただ各雑穀の出土数はどの遺跡でも数個から多くて30個ほどと少なく、擦文文化とくらべたオホーツク文化の利用頻度のひくさが示唆され（山田1996a）、日常食としては利用されなかった可能性が指摘されていた（山田1996b）。このような様相を一変させたのが、モヨロ貝塚とウトロ遺跡の調査である。モヨロ貝塚では刻文期の竪穴屋内骨塚からオオムギ・キビが100個以上、貼付文期前半の墓出土土器（被甕）内の土からキビが496個出土した（山田2009）。骨塚からはモロコシとアサも出土し、栽培植物の種類は5種にふえた。ウトロ遺跡では、刻文期～貼付文期の竪穴床面や竪穴覆土の廃棄層からオオムギが300～400個以上出土した（山田2011）。両遺跡の事例は、オホーツク文化の雑穀利用がそれまで想定されていた以上のものであったことを印象づけただけでなく、雑穀の出現が刻文期にさかのぼることを明らかにした点でも重要である。

その後、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点（山田・今井2012）（以下「トコロチャシ跡遺跡」と呼称）とチャシコツ岬上遺跡（山田2018）でも雑穀が出土し、現在までに9遺跡での発見となっている。フローテーション法による炭化種実回収が実施されたオホーツク文化遺跡は11遺跡であることからみても雑穀の検出頻度はたかく、その利用を疑う余地はなくなっている。また、出土したオオムギは現在まですべて「擦文オオムギ」であり、オホーツク文化のオオムギが大陸から渡来し擦文文化に伝えられたという説（山田2004・2018）は現在も有効である。

そのほかの食用植物については、1996年時点で集成がなされ、果実類、堅果類、根茎類の食用が論じられた（山田1996b）。コナラ亜属の出土例から、オホーツク文化集団がアク抜き知識を有していたとする興味深い指摘がなされている。2012年にも炭化種実がリストアップされ（山田・今井2012）、オニグルミ、コナラ亜属、ヒシ、ツノハシバミなど堅果4種類、エゾエンゴサクの塊茎、ユリ科鱗茎な

ど根茎2種類、ハマナス、ガンコウラン、ヤマグワ、サクラ属、エゾサンザシ、バラ科、ミズキ、キイチゴ属、マタタビ属、キハダ、ヤマブドウ、ガマズミ属、ウルシ属、タラノキ属、ハウノキなど果実14種類、ササ属など野生の穎果1種類が食用されたとされている⁽¹⁾。

1-2. 植物と儀礼に関する研究史

オホーツク文化の竪穴住居では、奥壁を中心とする特定の場所に動物骨を安置した骨塚が発見されることが知られており、動物儀礼の証拠として注目されている（内山2006等）。オホーツク文化の植物遺体は、骨塚（骨塚がない住居はその奥壁側）からよく検出されることが注目され、①動物儀礼にともなう供物、②骨塚に近接して出土する大型土器内に貯蔵されたもの、などの可能性が考えられた（山田1995b）。目梨泊遺跡第4号住居址では、骨塚はないものの、果実類種子（マタタビ属・キイチゴ属・ガンコウラン属・バラ属ハマナス）、雑草種子（タデ属・アカザ属・タラノキ属・ヨモギ属）が、竪穴奥壁側から偏った状態で出土することが注目され、奥壁付近が「神聖な場」であると同時に食糧貯蔵の場であったと推定された（佐藤編1994：176-179頁）。モヨロ貝塚の調査では、雑穀にくわえて野生植物の種実も骨塚ないし骨塚周辺での出土数が際立っていることが確認され、野生植物も雑穀とともに儀礼にともなってささげられた可能性が指摘され

表1 本稿の時間軸と土器編年対比表

文化名	土器型式名 (熊本2018)	本稿の時間軸
オホーツク文化	鈴谷式	鈴谷式期
	十和田式前半	十和田式～ 刻文期
	十和田式後半	
	刻文期前半	刻文期～ 貼付文期前半
	刻文期後半	
	沈線文期前半	
	沈線文期後半	
	貼付文期前半	
	貼付文期後半	貼付文期後半

(1) これらのうちツノハシバミはトビニタイ文化期の所産であり（榊田1982）、オホーツク文化遺跡では現在まで発見されていない。

表2 遺構・サンプリングスポットと集計単位の対応表①

遺跡名	報文中の遺構名	報文中のサンプリングスポット名	本稿の集計単位名
利尻富士町役場	魚骨層	魚骨サンプルA試料№1～3	屋外廃棄層
青苗砂丘	H2	西トレンチ床, 床付近, A床	竪穴床面
		A炉跡炭化物付近, A炉跡炭化物部, B炉跡炭化物部	竪穴屋内炉
	H3	北壁床付近	竪穴床面
		炉跡炭化物部, 炉跡赤化部	竪穴屋内炉
目梨泊	第4号住居址	骨塚上層, 骨塚	竪穴骨塚
		サンプル採取グリッド1～10・12～21・23・26～28・30・33・35・39・40・42・43・50・51・53・54・57・59・61～63・68・70・76・80・84・91	竪穴床面
雄武竪穴群	1号住居	サンプル採取グリッド46炉1・46炉2	竪穴屋内炉
雄武川尻	竪穴住居	床面D-5-10・D-5-14・D-6-8・D-6-10・D-6-15・D-6-16・E-5-10・E-6-4・E-6-8・E-6-12	竪穴床面
川西オホーツク	2号竪穴	北壁中央前部	竪穴床面
		底面ピットの中	竪穴屋内付属遺構
		焼土下	竪穴床面
		№1土器の下の土	竪穴出土土器内・周辺の土
	3号竪穴	底面 骨塚-4	竪穴骨塚
		底面1～4	竪穴床面
		底面 骨塚	竪穴骨塚
		炉	竪穴屋内炉
	7号竪穴	底面	竪穴床面
		炉	竪穴屋内炉
	8号竪穴	底面焼土下, 底面	竪穴床面
		底面 骨塚	竪穴骨塚
		底面一括土器の上	竪穴出土土器内・周辺の土
常呂川河口	15号住居	66床クルミ1, 67床クルミ2, 154床クルミ3, 155床クルミ4, 155床クルミ4, 155床クルミ4, 187床クルミ5, 435床クルミ8	竪穴床面
		382土器№29, 土器3, 土器№9	竪穴出土土器内・周辺の土
トコロチャシ跡	7a号竪穴	ウ区4層木製品集中	竪穴屋内遺物集中
		ウ区骨塚a	竪穴骨塚
		カ区7a炭化材列床面 資料№F149～151	竪穴床面
	7b号竪穴	炉b	竪穴屋内炉
	8号竪穴	エ区炭化材周辺 試料№F29・F155, エ区炭化材周辺①～③, エ区炭化材中, エ区小骨塚北側炭化材列中, エ区床直 (炭化材周辺), イ区炭化材周辺, ウ区焼土 (マウンド状), エ区焼土貼床集中	竪穴床面
		炉の砂①・②	竪穴屋内炉
		ア区骨塚	竪穴骨塚
	9c号竪穴	アイ区骨塚c①・③, 骨塚c上面①～④, ア区骨塚c1,4,5①・②, ア区骨塚c7,8,9,10,11,12①・②, 骨塚c (床面), 骨塚c (上面) 資料№F66・F67, アイ区骨塚c床直ー上面の1～3, ア区骨塚c床直ー上面1～6	竪穴骨塚
		炉cの1～4・6～10	竪穴屋内炉
	10a号竪穴	骨塚aグリッド4	竪穴骨塚
	10c号竪穴	骨塚c①・②・④・⑤の2・⑥・⑦の1・⑦の2・⑩・11・⑭・⑮の1・①グリッド・②グリッド・③グリッド・⑤グリッド資料№F117・№F119・⑥グリッド・⑦グリッド資料№F123～F126・⑧グリッド資料№F130・⑩グリッド資料№F131・F133・11グリッドの1・2・11グリッド資料№F140・F141	竪穴骨塚
ニツ岩	2号住居址	床面	竪穴床面
		骨塚	竪穴骨塚
	3号住居址	床面	竪穴床面
		炉中	竪穴屋内炉
モヨロ貝塚	8号住居跡	骨塚	竪穴骨塚
モヨロ貝塚	8号住居跡	a区 42-51 ク・サ・タ ベンチ直上, a区 42-52 ア・ソ・オ ベンチ直上, a区 42-51 ベンチ下, a区 43-50 セ ベンチ下, b区 45-51 ク ベンチ下床直, b区 45-52 エ ベンチ下, b区 46-51 コ・ス・セ ベンチ下, d区 41-53 キ ベンチ下, d区 42-54 イ・シ ベンチ下, a区 床直 , b区 44-50 カ 床直, b区 44-51 キ・ウ・タ 床直, b区 46-52 ア 床直, b区 南北ベルトセクション 44-51 ケ 床, c区 44-53 イ 7層床直, c区 44-53 ソ 床直, c区 45-53 ウ・ス 7層床直, c区 46-53 オ 床直 , d区 42-53 コ 床直, a 区 東西サブトレンチ7層 , b区 東西サブトレンチ床面, b区 南北ベルト 44-51 ケ, b区 44-51カ・ケ, b区 44-52 タ, b区 ベンチ外, d区 南北サブトレンチ3区・5区・7区, d区 44-53チ	竪穴床面
		b区 東壁礫集中, a区 獣骨集中	竪穴屋内遺物集中
		b区 南北ベルト 5-7b 魚骨層, b区 南北ベルト 6～7b層 魚骨, b区 南北ベルト 5-9ab 魚骨層	竪穴屋内廃棄層

表3 遺構・サンプリングスポットと集計単位の対応表②

遺跡名	報文中の遺構名	報文中のサンプリングスポット名	本稿の集計単位名
モヨロ貝塚	9号住居跡	a区 43-58-c, a区 43-59-b・c, a区 壁際10層, a区 壁際床面直上, a区 床面, b区 44-58-c・d, b区 44-59-a・b・c, b区 44-59-a・b・c, b区 45-58-c・d, b区 45-59-b・c・d, b区 45-60-d, b区 45-61-b, b区 南側壁際床面, b区 西壁炭化材列, b区 北壁西炭化材列, b区 壁10層, b区 床面, c区 44-60-a・b・c, c区 44-61-a・b, c区 45-60-a・c・d, c区 45-61-a・b・c・d, c区 46-60-c, c区 炭化材列付近, c区 炉周辺, d区 43-58-b, d区 43-60-b・c, d区 43-61-b, d区 北壁東側炭化材列, d区 炭化材列内側床面, d区 北壁西側炭化材列下面, d区 炭化材付近,	竪穴床面
		b区 壁際貝送り, b区 壁際骨集積, b区 西壁骨堆積, b区 骨集中6層, b区 骨集中7層, b区 骨集中下層	竪穴屋内遺物集中
		c/d区 骨塚1～9・13～18・20・21	竪穴骨塚
	10号下層住居跡	50-44 ク・タ, 50-45 エ・シ, 50-46 ウ, 51-43 ア, 51-44 ア 床直, 51-46 ア・オ, 51-46 イ・ク・コ 床直, b区 50-42 す, b区 51-46 む, c区 50-46 あ, c区 50-47 い・し	竪穴床面
	O-1016b号墓	墓壇埋土, 覆土1層・2層・3層, 柱穴覆土②, 人骨周辺 土器周辺	墓 墓出土土器内・周辺の土
	O-1017号墓	覆土1層・2層	墓
	O-1029号墓	覆土1層・2層, 覆土2層骨周辺	墓
		覆土1層土器周辺	墓出土土器内・周辺の土
	O-1046号墓	3層底部	墓
		2層土器周辺	墓出土土器内・周辺の土
	O-1076号墓	覆土1層・2層・3層	墓
		土器の中	墓出土土器内・周辺の土
	O-1078号墓	覆土1層	墓
		覆土3層土器周辺	墓出土土器内・周辺の土
	O-1079号墓	覆土1層・4層・5層	墓
O-1080号墓	3層土器周辺	墓出土土器内・周辺の土	
カモイベツ	H-19	HF-1 焼土	竪穴屋内炉
	9号址／75e	炉	竪穴屋内炉
チャシコツ岬上	Pit1	覆土 910土器内	墓出土土器内・周辺の土
	Pit2a	取り上げ番号370・407・534・554・575・579・660・728・739・814・815・877	土坑
	Pit2b	取り上げ番号1043・1052・1139	土坑
	Pit3	床 1866土器内・1869土器内・2192土器内,	竪穴出土土器内・周辺の土
		床直 取り上げ番号2298・2353・2383・3044・3046・3069・3105・3178, 床面 取り上げ番号438・746	竪穴床面
		炉 東・西・石囲	竪穴屋内炉
	22・23号竪穴上層廃棄層	取り上げ番号A-1,Cut4～12・B-1,Cut4～11	屋外廃棄層
トレンチ7魚骨集中	取り上げ番号A-1,Cut16・B-1,Cut16	屋外廃棄層	
ウトロ	Pit39	北西床直 試料№4・7, 床直, 床開口部, 床, 貼床土	竪穴床面
		北西骨範囲①・②, 骨範囲, 床面骨範囲	竪穴屋内廃棄層
		北西周溝, 周溝 試料№10・11, 柱穴3	竪穴屋内付属遺構
	Pit40	焼土・炭, 床 試料№18・19, 床直 試料№20・21	竪穴床面
		骨範囲	竪穴屋内遺物集中
	Pit108	床直焼土	竪穴床面
		炉 焼土D	竪穴屋内炉
		開口部貼床下	竪穴屋内付属遺構
	Pit108	Ⅱ層下面	屋外廃棄層
	Pit114竪穴上層遺構1	床直・焼土・焼土1・2	屋外生活面
	Pit114竪穴上層遺構2	床直(北)・(南)	屋外生活面
	Pit113	床直	竪穴床面
	Pit183	炉 焼土D	竪穴屋内炉
	Pit112	覆土	集石土坑
Pit191	集石①	集石炉	
Pit192	集石②	集石炉	
Pit193	集石③	集石炉	
Pit149	覆土	墓	

表4 遺跡ごとの炭化種実を出土した集計単位の内容と数

遺跡名	竪穴住居址屋内							竪穴住居址屋外							時期 (熊木2018)		
	竪穴床面	竪穴屋内炉	竪穴骨塚	竪穴出土土器内・周辺の土	竪穴屋内付属遺構	竪穴屋内遺物集中	竪穴屋内廃棄層	墓	墓出土土器内・周辺の土	屋外炉	集石炉	屋外炭化物・炭化物集中	土坑	集石土坑		屋外廃棄層	屋外生活面
利尻富士町役場															1	鈴谷式期	
青苗砂丘	2	2	1													十和田式～刻文期	
目梨泊	1	1														貼付文期後半	
雄武竪穴群	1															沈線文期	
雄武川尻	1															貼付文期後半	
川西オホーツク	4	2	3	2	1											貼付文期前半～後半	
常呂川河口	1			1												貼付文期後半	
トコロチャシ跡	2	3	5			1										貼付文期前半～後半	
ニツ岩	2	1	2													貼付文期後半	
モヨロ貝塚	3		1			2	1	7	6							刻文期～貼付文期前半	
カモイベツ		2														刻文期	
チャシコツ岬上	1	1		1									2		2	貼付文期後半	
ウトロ	4	2			2	1	1	1			3			1	1	2	刻文期～貼付文期前半

表5 時期ごとの炭化種実を出土した集計単位の内訳と数

時期名 (表1の本稿の時間軸)	竪穴住居址屋内						竪穴住居址屋外									
	竪穴床面	竪穴屋内炉	竪穴骨塚	竪穴出土土器内・周辺の土	竪穴屋内付属遺構	竪穴屋内遺物集中	竪穴屋内廃棄層	墓	墓出土土器内・周辺の土	屋外炉	集石炉	屋外炭化物・炭化物集中	土坑	集石土坑	屋外廃棄層	屋外生活面
鈴谷式期															1	
十和田式～刻文期	1	1	1													
刻文期～貼付文期前半	11	6	2		2	4	2	8	6		3			1	1	2
貼付文期後半	10	7	9	4	1				1				2		2	

た（山田 2009）。また、竪穴床面から出土したオオムギの大部分が多孔性で、煮沸されふやけた状態で出土したのに対し、骨塚出土のオオムギには煮沸された痕跡がみられないことから、生の状態で祀られたという知見も得られている（山田 2009）。またモヨロ貝塚では、先述のとおり貼付文期前半の墓の副葬土器（被甕）内の土からキビが 496 個出土し、植物が副葬品にされていたことも明らかになった（山

田 2009）。

2. 分析資料の集成と概要

2-1. 時間軸の設定と分析資料の抽出

オホーツク文化の炭化種実出土遺構の時期認定は、熊木俊朗（2018）による土器編年に先行する鈴谷式期をくわえたものを、①鈴谷式期、②十和田式～刻文期、③刻文期～貼付文期前半、④貼付文期後

半の4時期に分けておこなった(表1)。

分析対象とするのは、表1の土器編年によって時期を認定できる遺構から出土した炭化種実である。オホーツク文化の所産であることは確実でも詳細時期の不明な遺構出土資料は分析に含めない⁽²⁾。さらに、堅穴覆土から出土し遺構に伴わない資料、報文中にサンプリングスポットの層位が記載されていない資料なども分析対象からのぞく。本稿で分析対象とする炭化種実出土遺跡の位置を図1に示した。

2-2. 炭化種実出土遺構の実態と集計単位の設定

表2・3に、炭化種実が出土した遺構とそのサンプリングスポット名を遺跡ごとに示した。オホーツク文化の炭化種実のサンプリングスポットは、大きくみて堅穴住居址内・外に分かれる。

オホーツク文化の堅穴住居址には独特の空間分割がみられることが知られており(菊池1978, 大井1979)、それを考慮してか、サンプリングは同じ堅穴住居址内の複数のスポットでなされた例が多い。本稿では煩雑さを避けるため、堅穴住居址内のサンプリングスポットは、表4に示す7種の集計単位にまとめた。このうち「堅穴出土土器内・周辺の土」は、完形土器内に詰まった土のほか、一括土器に接して堆積した土のサンプルも含めている。「堅穴屋内付属遺構」は、おもに柱穴や周溝が該当する。「堅穴屋内遺物集中」は、おもにオホーツク文化の堅穴床面でよくみつかるといわれる貝類や動物骨の集中個所である。遺棄されたとみられる点で骨塚との区別をつけにくい、骨塚に比べ小規模だったり骨の堆積密度が低いものは骨塚とわけて報告されるのが一般的であり、本稿でも基本的に報文にしたがう。「堅穴屋内廃棄層」は、堅穴屋内に廃棄されたと報告されたものである。

堅穴住居址外のサンプリングスポットは、表4に示す9種の集計単位にまとめた⁽³⁾。なお、堅穴

覆土中に堆積した炉跡は「屋外炉」に、同じく堅穴覆土中に堆積した魚骨層や遺物集中は「屋外廃棄層」に含めている⁽⁴⁾。

表4・5は、遺跡別・時期別の集計単位の内訳を示したものである⁽⁵⁾。地域ごとの様相をみると、オホーツク文化の炭化種実は、利尻・礼文島を含む宗谷海峡周辺と知床半島以東の根室海峡周辺では発見されていない(表4・図1)。時期ごとの様相をみると(表5)、十和田式期単独の例はない。これら資料の時空間的空白は、炭化種実回収を目的としたフローテーション法が実施されなかったのが原因と考えられる。

つぎに集計単位ごとに様相を概観すると(表4・5)、オホーツク文化はカモイベツ遺跡をのぞき「堅穴床面」での出土が確認され、現状でもっとも偏りの小さい集計単位といえる。次いで「堅穴屋内炉」も偏りの小さい集計単位とみていいだろう。「堅穴骨塚」はオホーツク文化に一般的な屋内施設であるが、なかには骨塚が存在しない堅穴住居址もあり、それが資料の偏りを生む一因となっている。ただ、骨塚出土の炭化種実は早くから注目されたためか、例数は比較的多い。「堅穴出土土器内・周辺の土」について、床面出土土器は多くの遺跡で確認できるが、完形状態で出土した土器点数の少なさが資料の少なさの一因である可能性がある。柱穴や周溝など「堅穴屋内付属遺構」はオホーツク文化では一般的な屋内施設であるが、サンプリング数は少ない。

それ以外の集計単位は、遺跡によって存在するかどうかが大きく異なるもので(表4)、遺跡の性格・機能の違い、人々の居住形態や活動内容の違いなどが反映されたものといえる。

以上をまとめると、本稿で論じるオホーツク文化の炭化種実組成は枝幸町から知床半島以西の刻文期～貼付文期後半の資料が中心であり、その集計単位には遺跡によって偏りのあるものも含まれている。

(2) 具体的に、青苗砂丘遺跡P1、モヨロ貝塚O-1024号墓・O-1033号墓が該当する。

(3) 2021年7月、村本周三氏(北海道教育委員会)より、ウトロ遺跡報告書386頁表4中の遺構番号「109」「110」が、それぞれ「114堅穴上層遺構1」「114堅穴上層遺構2」の誤植であるとのご教示をいただいた。本稿ではこれにしたがい遺構名を訂正し、それぞれのサンプリングスポットを「屋外生活面」とした。

(4) ウトロ遺跡Pit108の「II層下面」とされたものは、大量の礫

と遺物を出土した「貼付文期の廃棄層を含む」と推定されたサンプリングスポットであることから、「屋外廃棄層」として集計した。

(5) 表4のうち雄武川尻遺跡は出土遺物の詳細が報告されていないが、写真で公表されている土器(佐藤編1986)の特徴から貼付文期後半に含めた。また、知床岬遺跡(松下他1964)では配石遺構の下から木炭・焼骨片とともにクルミが出土したと報告されているが、個数・重量の記載がないため集計から除外した。

以下の考察は、オホーツク文化全体に敷衍できるのかどうかの予察的な意味あいもふくめてのものだということを念頭に置いていただきたい。

3. 炭化種実組成からみたオホーツク文化の植物利用の特徴

集計結果をもとに、時空間的に隣接する続縄文文化終末期・擦文文化の炭化種実組成との比較をつうじて、オホーツク文化の植物利用の特徴を論じる。

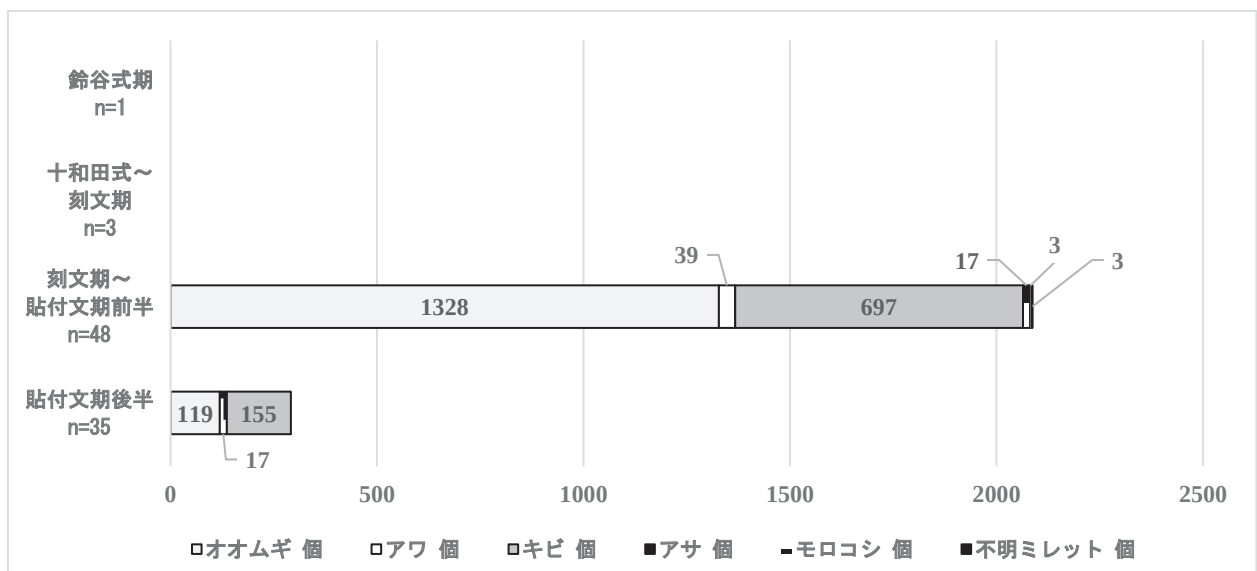
3-1. 雑穀の利用について

a. 雑穀出土数の変化と関連する諸現象

雑穀で注目したいのは、出土数の時間的変化である(図2)。具体的に、刻文期～貼付文期前半(モヨロ貝塚・ウトロ)ではオオムギやキビが数十～数百個出土するが、貼付文期後半(目梨泊・川西オホーツク・常呂川河口・トコロチャシ跡・ニツ岩・チャシコツ岬上)になると数個～数十個ほどにまで減少する。遺跡数に偏りがあるぶん、貼付文期後半における出土数の減少がきわだっている。

このような時間的変化はオホーツク文化の各種物質文化の変容と連動したものとおもわれる。第一

に、大陸から搬入された「威信財」の出土数や偏りなどとの関連性である。高畠孝宗(2005)は、オホーツク文化の金属製品を実用／非実用という観点から「生存財」と「威信財」に分類し、両者の時空分布を検討した結果、①大陸系遺物を中心とする「前期威信財群」が刻文期の交易拠点であるモヨロ貝塚に一極集中すること、②8世紀(貼付文期前半)をさかいにモヨロ貝塚への一極集中状況が緩和され、「前期威信財群」が本州系遺物を中心とする「後期威信財群」にとって代わられることを明らかにした。これとの関連で注目されるのが、研究史でふれた刻文期のモヨロ貝塚での雑穀出土数の多さである。オホーツク文化に大陸系遺物が多く渡来するのは靺鞨系土器がオホーツク海沿岸部全域に展開する刻文期のことであり(菊池1995, 山田他1995)、雑穀も金属製品とセットで渡来したのであれば(山田1994・1995b)、モヨロ貝塚が交易拠点にされたとみる解釈がなりたつ。さらに、雑穀が貼付文期後半になって減少し、かつ各地の遺跡で出土数に大差がなくなる点も、モヨロ貝塚での「前期威信財」の一極集中状況が緩和される現象と連動しているようで興味ぶかい。ただし、同じく雑穀出土数が突出し



※ n は炭化種実が出土した集計単位の数

図2 時期ごとの栽培植物種子出土数

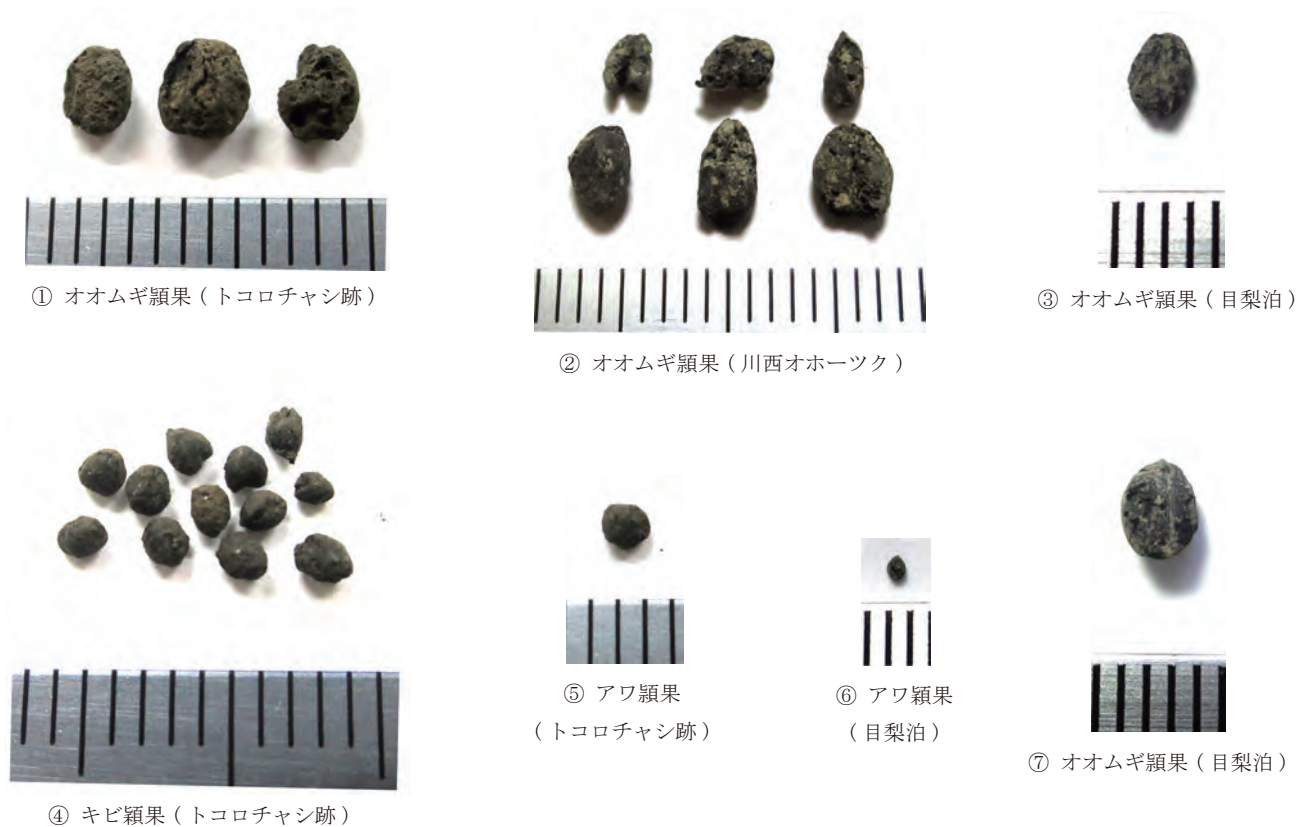


図3 オホーツク文化遺跡から出土した雑穀

①・④・⑤ 東京大学常呂実習施設所蔵：②北海道立北方民族博物館所蔵：③・⑥・⑦枝幸町教育委員会所蔵
(すべて筆者撮影)

ているウトロ遺跡の所在する知床半島西岸部では、大陸系遺物の集中が確認されない。雑穀と「威信財」の流入・拡散過程が、微妙に異なっている可能性がある。

第二に、大陸から搬入された「生存財」である曲手刀子との関連性である。高畠は曲手刀子の分布と出土点数を検討し、「威信財」がモヨロ貝塚と目梨泊遺跡にほぼ限定されて集中するのに対し、曲手刀子は両遺跡に集中しつつオホーツク文化全域で少数出土することを示した（高畠 2005：36-39 頁）。このように一部遺跡で出土数が突出しかつ広範囲でも出土する様相が、雑穀と似ている点が注目される。高畠は雑穀と曲手刀子をともに「搬入生存財」としたうえで、雑穀は「一時的に搬入したものを再生産することが可能」なもの、曲手刀子を含めた金属製

利器は「恒常的な搬入品」として、両者を区別した。しかし近年、曲手刀子の再加工の存在が明らかになったため（笹田 2012）、曲手刀子も雑穀と同様に再生産できる「搬入生存財」とみなせるようになった。だとすれば両者の出土傾向の類似性は、オホーツク文化の再生産できる「搬入生存財」の入手－分配－再生産の過程と結果を表している可能性がたかい。

b. 雑穀栽培をめぐる諸問題

以上を考慮すると、オホーツク文化の雑穀栽培について若干の示唆が得られるように思われる。オホーツク文化の雑穀は、大陸からの搬入品なのか自ら栽培したのかで意見がわかれている。高瀬克範は、出土遺体・道具組成・遺跡立地から搬入品と予測している（高瀬 2019：106 頁）。一方山田らは、

表6 時期ごとの堅果類・根茎類出土数量

	クルミ属			コナラ亜属			ヒシ		ユリ科 鱗茎	エンゴサク 塊茎
	g	個	片	g	個	片	g	片	個	個
鈴谷式期			2							
十和田式～刻文期	1.49									
刻文期～貼付文期前半	173.15		3	56.72	4	3		30		1
貼付文期後半	51.33	10	94	12.72		1	6.36		1	152

表7 各文化のドングリ類の検出率比較表

	オホーツク文化	続縄文文化終末期 (北大式期)	擦文文化
ドングリ類が検出された サンプリングスポット数 (a)	44	14	110
サンプリングスポット総数 (b)	446	528	4019
ドングリ類の検出率 (a/b × 100・小数第二位四捨五入)	9.9	2.7	2.7

表8 各文化のヒシの検出率比較表

	オホーツク文化	続縄文文化終末期 (北大式期)	擦文文化
ヒシが検出された サンプリングスポット数 (a)	18	0	2
サンプリングスポット総数 (b)	446	528	4019
ヒシの検出率 (a/b × 100・小数第二位四捨五入)	4.0	0	0.1

①雑穀は当初大陸系の金属器とともに渡来し、以後大陸系の金属器がみられなくなる時期まで存在すること、②大陸系の金属器がみられる時期はかぎられており、大陸との継続的な接触がみられないことを根拠として、オホーツク文化集団による栽培を考えている（山田 1995b・2018, 山田・椿坂 1995）⁽⁶⁾。

筆者はここでみた雑穀の時間的減少に注目し、以下の2つの可能性を想定したい。1つめは、刻文期にかぎっては雑穀のほとんどが搬入品であり、その後大陸との関係がよわる貼付文期前半にかけて栽培がこころみられたが、本州の農耕社会のような増収をはかるための技術向上や管理をとまなうものではなかったため（高瀬 2019）、貼付文期後半になっ

て衰退した可能性である。先にみた曲手刀子がモヨロ貝塚のような交易拠点を介して搬入されたのち、大陸との関係がよわまりつつも小鍛冶で再生産されていたのと同様に、雑穀も搬入後に大陸との交易拠点をうしないつつ細々と栽培されたと解釈するわけである。

2つめは、最初に二ツ岩遺跡の報告書で想定されたように（山田他 1991）、貼付文期前半～後半には道央部の擦文文化からもアワ・キビが搬入されていた可能性である。たしかに山田（1995b）の指摘どおり、穀物は数種類がセットとなって伝播するのが一般的だと思われるし、この時期のオオムギ（「擦文オオムギ」）が擦文文化からの搬入品ではありえ

(6) ただし高瀬も栽培の存在を全否定しているわけではなく、可能性があるとすれば「植物の管理、育成の遂行を第一義とする道具の製作と運用、居住形態・土地利用などの変化は生じず、顕著な人口増加もともなわない」、氏のいう「維持型」の植物利用だとしている（高瀬 2019：100・106頁）。



図4 オホーツク文化遺跡から出土した堅果類と根茎類

① 網走市立郷土博物館所蔵：② 枝幸町教育委員会所蔵：③・④ 北海道立北方民族博物館所蔵：
⑤～⑦ 東京大学常呂実習施設所蔵（すべて筆者撮影）

ない。しかし「威信財」の分析では、8世紀（貼付文期前半）に大陸系遺物を中心とする「前期威信財群」の交易拠点だったモヨロ貝塚にかわって本州系遺物を中心とする「後期威信財群」の交易拠点として目梨泊遺跡が形成されるなど、オホーツク文化の社会変容が生じるなかで大陸系の搬入品と本州系の搬入品が共存しつつ徐々に入れ代わることが明らかにされている（高島 2005）。貼付文期前半～後半のオホーツク文化遺跡では擦文土器やロクロ製土師器

が出土することからみて、蕨手刀や直刀などの「後期威信財群」は道央部を経由してもたらされたと考えられるが、同時期の道央部の擦文文化ではアワ・キビ栽培がおこなわれていたとみてまちがいない（榊田・高瀬 2019, 榊田投稿中）。オホーツク文化の交流対象が大陸から本州にかわる大きな社会変動のもと、増収や技術向上をめざさない栽培活動が実施される状況下では、オオムギを自ら栽培・利用しつつアワ・キビは擦文文化からの搬入品にも依存する

表9 時期ごとのベリー類種子出土数

	バラ科	ハマナス	エゾサンザシ	サクラ属	ヤマゲワ	キイチゴ属	ガンコウラン
	個	個	個	個	個	個	個
鈴谷式期							
十和田式～刻文期							
刻文期～貼付文期前半	104		41	3	61	46	
貼付文期後半		1				38	2

表10 各文化のベリー類種子の検出率比較表

	オホーツク文化	続縄文文化終末期 (北大式期)	擦文文化
ベリー類種子が検出された サンプリングスポット数 (a)	51	2	117
サンプリングスポット総数 (b)	446	528	4019
ベリー類種子の検出率 (a/b×100・小数第二位四捨五入)	11.4	0.4	2.9

という、ある種の“妥協的”な要因による変化が起こりうるのではなからうか。

これら2つの考えにはどちらにも有利・不利の証拠があり、また両者が複合して生じていた可能性も当然ある。当面でオホーツク文化の雑穀栽培の有無を追究する際には、考えうるいくつかの可能性を想定し、各種遺物・遺構の分析を広い視野のもとでおこなうなかで妥当性のたかい考えを絞り込んでいくような慎重な姿勢がもとめられよう。

ちなみに近年の研究では、①刻文期に併行する続縄文文化終末期では確実性のたかい雑穀関連資料が皆無であること（榊田 2019）、②縄文文化のヒエ属をはじめとする各種植物の栽培が道内で脈々とつづけられ擦文文化に受け継がれたという図式は成りたらず（榊田・高瀬 2019, 那須 2019）、道央部の本格的な雑穀栽培の開始期は擦文文化であることが再確認されている。これは、仮にオホーツク文化の雑穀栽培が渡来直後の刻文期からおこなわれていた場合、北海道で最初に本格的な雑穀栽培をおこなったのはオホーツク文化集団だということの意味する⁽⁷⁾。すなわちオホーツク文化の雑

穀栽培は、北海道の農耕史の評価において重要であり、かつ“もっとも寒冷な地域から栽培がはじまる”という点では日本列島の農耕史のなかでもきわめてユニークな現象の可能性があるのであり、その問題の追究には大きな意義があることを強調しておきたい。

3-2. 堅果類と根茎類の利用について

表6に、堅果類と根茎類の時期ごとの集計結果を示した⁽⁸⁾。もっとも多い堅果類はクルミ属であり（図4-①）、資料数の少ない十和田式～刻文期でも確認できる。堅果類のなかでクルミ属がもっとも多い点は、続縄文文化終末期や擦文文化とも共通する（榊田 2019, 榊田・高瀬 2019）。

一方で、オホーツク文化はドングリ類（コナラ亜属）の出土がめだつのが特徴である（図4-②～⑤）。サンプリングスポット数を単位としたドングリ類の検出率を比較すると、オホーツク文化は続縄文文化終末期や擦文文化の3倍以上の値をしめす（表7）⁽⁹⁾。ウトロ遺跡では炭化したコナラ亜属子葉がまとまって出土した集石土坑が発見されており（松

(7) 北海道で唯一の例外は縄文時代のヒエ属の評価であるが、ヒエ属種子の大型化に人間の干渉があったのはたしかだとしても、それが採集、管理、栽培のいずれだったのか現時点では判断できない（那須 2018・2019）。

(8) 北海道東北部の気候と植生からみて、「ブナ科」と同定された

ものはミズナラやカシワなどのコナラ亜属と考えられる（札幌市博物館活動センター 2020）。いずれもタンニンを多く含み、アク抜きをしなければ食用できないものである（渡辺 1975, 松山 1982）。



図5 オホーツク文化遺跡から出土したベリー類種子

①・③ 枝幸町教育委員会所蔵：② 東京大学常呂実習施設所蔵：④ 網走市立郷土博物館所蔵
（すべて筆者撮影）

田他 2011)、アク抜き等のための加工・調理施設の可能性がある。ドングリ類が多量に出土した遺構は、続縄文文化終末期や擦文文化でみつからない。オホーツク文化もウトロ遺跡の1例のみだが、集石土坑そのものはオホーツク文化遺跡で比較的よく検出される遺構である。これまでに発見された集石土坑にもドングリ類加工施設が存在しており、ウトロ例はなんらかの理由でドングリ類がそのまま廃棄されたものとみる解釈は十分なりたつだろう。オホーツク文化のドングリ類のアク抜きと食用は山田 (1996b) によって指摘されていたが、このような遺構の存在と上記検出率のたかさをふまえれば、ドングリ類はオホーツク文化の食用植物のなかで一定のウェイトを占めていた蓋然性がたかい。

もうひとつ注目すべき堅果類はヒシである (表6)。オホーツク文化のヒシはモヨロ貝塚とトコロチャシ跡遺跡でしか出土しておらず (図4-⑥)、検出率は決してたかいとはいえない。とはいえ、続

縄文文化終末期では出土例がなく、擦文文化の検出率が非常にひくい点からすれば (表8)、やはり注目に値する。ヒシは湖沼などの水中になり、集中豪雨による増水と河川の氾濫によって遺跡内に混入する可能性が考えられる植物であるが、トコロチャシ跡遺跡のように氾濫の影響がおよばない台地上での出土例もあることから、混入はないとみていいだろう⁽¹⁰⁾。

根茎類は、エゾエンゴサクの塊茎が雄武川尻遺跡とモヨロ貝塚で、ユリ科の鱗茎がトコロチャシ跡遺跡で出土している (表6・図4-⑦)。エゾエンゴサクは両遺跡例とも孔が空けられており、特に152個がまとまって出土した雄武川尻例は糸・紐をとおして吊るして乾燥された事例と評価されている (名久井 2019: 21-23 頁)。山田 (1996b) の指摘どおり、オホーツク文化では根茎類が食されていたと考えられる⁽¹¹⁾。一方続縄文文化終末期では出土例がなく、擦文文化ではわずかな遺跡から出土しているが個数

(9) 定量的な比較をおこなううえではサンプル土壌重量・容量を母数とした検出率を算出するのがのぞましいが、サンプル土壌重量・容量は記載されていない報告が多いため実施できなかった。以下、表8・10の比較も同様である。なお表7・8・10の各文化のサンプリングスポットは、すべて遺構にかかわるものである。ちなみに続縄文文化終末期や擦文文化でも1つの遺構から複数の土壌サンプリングを実施した例は多く、炭化種実を出土した遺構数 (榊田 2019) とサンプリングスポット数 (表7・8・10) がイコールではない点に注意

していただきたい。
(10) ヒシの核果は、渡り鳥の羽毛に付着した状態で別の水域に運ばれることが確認されている (河野・後藤 2016: 4 頁)。したがって、渡りの最中に羽毛から落ちた核果や、狩猟された渡り鳥の羽毛が遺構近辺でむしり取られたときに落ちた核果が混入する可能性も皆無ではない。ただオホーツク文化のヒシは、堅穴屋内の骨塚など特殊な遺構から完形の状態で出土した例もあるため (図4-⑥)、やはり混入はないと考えられる。

は非常に少ない。

以上をまとめると、オホーツク文化ではデンプン質に富む野生植物の食用頻度がたかかったと評価できる。オホーツク文化と擦文文化は焼失住居が多く、植物遺体の遺存条件のよい遺構が多い。しかし擦文文化のサンプリングスポット総数はオホーツク文化の9倍におよぶにもかかわらず、ドングリ類・ヒシ・根茎類の検出率は軒並みひくい(表7・8)。この点からも、擦文文化とくらべたオホーツク文化の上記植物の食用頻度のたかさは裏づけられよう。オホーツク文化の出現当初の雑穀が搬入品だとすれば、外部依存性がつよく突発的なトラブル等で入手機会・経路が遮断されたときの対処となるデンプン摂取法として、ドングリ類・ヒシ・根茎類の利用が発達した可能性がある。それは裏をかえせば、擦文文化では積極的な雑穀栽培や本州東北地方との交流で得られたイネ科穀類からデンプンを摂取していたことが、ドングリ類等の出土が少ない理由ということだろう。

3-3. ベリー類の利用について

a. ベリー類種子の検出率と遺存率

オホーツク文化では、果実類のなかでもいわゆるベリー類の種子検出率がたかい。ここでは、特に特徴的とみられるバラ科、サクラ属、クワ科、キイチゴ属、ガンコウラン属と同定された種子にかぎって検討する(表9)。これらの種子検出率をサンプリングスポット数単位で比較したものが表10である。オホーツク文化では、続縄文文化終末期の約29倍、擦文文化の約4倍の値をしめす。

ベリー類、とくにクワ科クワ属やバラ科キイチゴ属(図5-①・②・④)などの場合、①種子が2mm以下と小さい(鈴木他2012)、②生食可能で種子が飲みこまれたり噛み砕かれやすい、などの理由から、種子遺存率が大幅に下がっている可能性がある。これらにくわえて、③加工・保存法によっても種子が

残らない状況が起こりうる。たとえば、バラ科のエゾノウワミズザクラは、北海道とりわけ道東部に多く自生し、サハリン・アムール流域の諸民族に食用として重宝されてきたベリー類である(Levin and Potapov 1964, Ivanov. et al. 1964, 水島・池田2000, 佐藤2005, 田口2005, 大貫2010, 水島2010, 風間2016等)。その果肉はすりつぶして保存食・携行食等にされるが、なかには果肉を種子ごとつぶす事例が報告されている(手塚・水島1997, 佐々木2005, 水島・タチヤナ他2005, 水島・田村2008)。そのほか、果肉を種子ごと粉にして飲用する事例や(水島・池田2003)、種子だけを粉にして食用・薬用にする事例も報告されている(水島・タチヤナ他2005)。オホーツク文化のエゾノウワミズザクラの同定例は、いまのところない。このことがオホーツク文化に同様の加工法が存在した根拠になるわけではないが、種子遺存率に影響をおよぼす例として念頭におくべきだろう。また、同じくバラ科のハマナスにも果肉を種子ごとすりつぶしたという報告や(水島・田村2008, 水島・白石2013)、種子をそのまま食べて薬用にしたという報告もある(水島・白石2013)⁽¹²⁾。ハマナスの種子は目梨泊遺跡で1個出土している(図5-③)。管見にふれた民族誌・民族調査報告では、「種子ごとすりつぶす」という記載はエゾノウワミズザクラとハマナス以外のベリー類には確認できなかった。ただし、その他のベリー類にも果実をすりつぶして利用するという報告が多くみられ、そのなかには種子がエゾノウワミズザクラやハマナスより小さいものも含まれている。果肉を種子ごとすりつぶす加工法は、実際はさらに多いのではないだろうか⁽¹³⁾。

ベリー類種子の遺存率は、上記①②③の条件が組みあわさるなどして、堅果類などよりはるかにひくくなることが推測される。だからこそ、オホーツク文化遺跡での検出率のたかさが注目されるのである(表10)。

(11) エゾエンゴサクの塊茎は、目梨泊遺跡でも出土している。枝幸町のオホーツクミュージアムえさして常設展示されており、2022年11月に実見し塊茎に空けられた孔を確認した。なお詳細な出土場所・時期がわからなかったため、表6には集計していない。

(12) ハマナスは、幌別・斜里地方のアイヌでは種子をのぞいてか

ら果肉を生食・すり潰し加工・加熱調理されたとされている(知里1976)。

(13) その意味では、北方諸民族の広汎な利用が確認されるコケモモ、ツルコケモモ、クロマメノキなどツツジ科のベリー類種子が1点もみられないことは、同様の理由で注意すべきだろう。

b. ベリー類利用法の推定

それでは、遺構からベリー類種子がまとまって出土するような利用法にはどのようなものが考えられるだろうか。1つめは研究史でふれたように、骨塚での儀礼用供物としてささげられた可能性である（山田 2009）。実際、モヨロ貝塚や目梨泊遺跡では堅穴骨塚や奥壁側の堅穴床面での出土数が多い（吉崎 1994, 山田前掲）。続縄文文化終末期や擦文文化では食料をささげるような儀礼の痕跡がほとんどみられず、オホーツク文化のベリー類種子検出率との格差がきわだっている理由の1つに、植物を供物にする儀礼の有無や執行頻度の違いなどが考えられる。

ただ、奥壁側の堅穴床面での出土数の多さについては土器に入れて貯蔵されたという考えもあり（佐藤編 1994：176-179 頁）、また堅穴屋内炉から出土したベリー類種子もあるため、食用にもされたとみるのが妥当だろう。そこで2つめの利用法として考えられるのが、ほかの食材とともに調理された果実がこぼれ落ち遺存した可能性である。北方諸民族では、ほぐした魚の身、すりつぶした魚や海獣の内臓にベリーの果実と魚油・海獣の油を加える料理（クレイノヴィチ 1993, 佐々木 2005, 佐藤 2005, 永山 2016, 小野 2016, 丹菊 2016, 長崎 2016）、魚油・海獣の油を混ぜた魚の煮こごりにベリーの果実を加える料理（加藤 1986, クレイノヴィチ 1993, 佐々木 2005, 水島 2010, 丹菊 2016）などが広く知られている。オホーツク文化遺跡から多量に出土する魚骨や海獣骨の存在、土器による海洋生物の調理が付着物の安定同位体分析によって明らかになっていること（國木田 2018, 宮田・宮内他 2020）をふまえると、北方諸民族の料理や調理法はベリー類の利用法や種子出土状況を考えるうえで示唆にとむ。

3つめは、ベリーの果実そのものを加熱調理した際に吹きこぼれたものが遺存した可能性である。やはり北方諸民族の民族誌に、ベリーの実を煮る調理法（クレイノヴィチ 1993, 水島 2010）が記録

されている。オホーツク土器はサイズ・容量の分化が顕著であり（武田 1996, 榊田 2007）、主食の調理用とは考えにくい小型土器が多く出土する。そのなかにはススなどの加熱痕跡がみられるものもめずらしくない。加熱調理に使われた小型土器については、儀礼的な意味を含めた検討の必要性が指摘されているが（庄田・塚本他 2005）、なかにはベリー類だけを土器で煮沸したものも含まれているのではなかろうか。

c. ベリー類利用の発達と生態適応

北方の諸民族は、糖質を多く含むベリー類から炭水化物を摂取していた（大貫 2005, 水島 2005）。アムール流域の諸民族では北方にいくほどベリー類を中心とした果実利用の発達が確認され、「堅果類が分布しないか数量の少ない地域における食性拡大のための適応行動」である可能性が述べられている（佐藤 2005：129 頁）。オホーツク文化はアムール流域からサハリンを経由して北海道北東部に展開した集団ののこした文化であるが、経由地と目されるアムール河口部・サハリン北部の植生はアムール中・下流域やサハリン南部・北海道北東部とは異なり（沖津 2002）、植物資源とくに堅果類の種類が非常にとぼしい地域である反面、海獣猟が発達する背景のある地域でもある（大貫 2005・2006）。そこを経由する過程で海獣利用とともにベリー類（おそらく根茎類も）の利用を極度に発達させ、さらにドングリ類・ヒシなどのデンプン質に富む堅果類にまで炭水化物の供給源をひろげたのが、北海道のオホーツク文化なのではないだろうか。

オホーツク文化のベリー類種子は、刻文期～貼付文期前半から貼付文期後半にかけて種類や出土数が減少しており（表 9）、根茎類やヒシ（表 6）と対照的な様相をみせる。ベリー類の調理法の変化や生食利用の増加にともなう種子遺存率減少が原因の可能性もあるため、単純に食用頻度がさがったと考えることができないとはいえ、貼付文期後半は大陸との関係がよわまり擦文文化との関係がよまる時期で

(14) なお続縄文文化終末期や擦文文化にもベリー類種子の出土例はあり（表 10）、食用等に利用されていたと考えられる。先述の種子の残りにくさという問題をふまえると、検出率の差をもって各文化の食用頻度の違いを論じるのは危険だろう。

表 11 時期ごとのベリー類以外の炭化種実出土数

	イネ科	ササ属	マメ科	ナス科	ブドウ科	ブドウ属	ヤマブドウ属果皮	ヤマブドウ属	キハダ果実	キハダ属	ニワトコ属	マタタビ属果実	マタタビ属	ミズキ	タラノキ属	タデ属	ボントクタデ近似種果実	アカザ属	ウルシ属	モクレン属	ホウノキ	コブシ	ナデシコ科	ヨモギ属	ガマズミ属	オトギリソウ科	セリ科	カヤツリグサ科	スゲ属果実
	個	個	個	個	個	片	個	片	個	片	個	片	個	片	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個	個
鈴谷式期			1						3		1	1	1			1		あり (数不明)	2										
十和田式～刻文期										2																			
刻文期～貼付文期前半	33	64	16	1	1	1	183		91	9	69	157	7	405	16	17	31	1	459	4		5	1			70	1	230	1
貼付文期後半		1	2				17	6	1	24	6	66	5	276	10	1	19	143	2095	3	3			4	3	3			3

あるだけに、注目すべき現象といえる⁽¹⁴⁾。

3-4. その他の植物利用について

表 11 に、前項で検討したベリー類以外の炭化種実を時期ごとに集計した結果をしめした。ブドウ属、ヤマブドウ属、キハダ属、マタタビ属、ニワトコ属、タデ属、アカザ属が比較的多く出土しており、鈴谷式期にも例がある。十和田式期の様相が不明瞭であるものの、これらの植物はオホーツク文化をとおして食用にされた可能性がたかい。

研究史でふれたように、野生植物のなかには、骨塚に雑穀等とともに供物にされたと考えられるものがある。モヨロ貝塚 9 号住居跡骨塚のマタタビ属（サルナシ）・ブドウ属・バラ科種子、トコロチャシ跡遺跡 9c 号堅穴骨塚のニワトコ属（エゾニワトコ）・アカザ属種子は 100 個以上と出土数が多い⁽¹⁵⁾。一方、骨塚はあっても炭化種実の出土数が少ない遺跡もあり、多様な様相をみせる。このような遺跡ごとの違いは、供物に選ばれる植物が地域ごと・時期ごとに異なっていたことの反映なのか、執行された儀礼の内容の細かな違いと関係するのか、あるいは儀礼が執行された季節の違いが示されているのか、さまざまな可能性を想定できそうである。

ほかの注目すべき例に、川西オホーツク遺跡の 2 軒の「堅穴出土土器内・周辺の土」でアカザ属種子が数十個まとまって出土したのがあり（吉崎 1995）、土器内に貯蔵されていた果実が遺存した可能性がある。そのほか、目梨泊遺跡第 4 号住居址床面のタデ属種子、モヨロ貝塚 9 号住居跡床面のカヤツリグサ科種子が 100 個以上の出土数をしめすが、遺構での遺存過程をしめす証拠は得られていない。

おわりに

以上、最新の土器編年にもとづき炭化種実を集計し、続縄文文化終末期・擦文文化との比較という視点をくわえてオホーツク文化の食用植物利用に関する考察をおこなった。ベリー類や根茎類利用の発達、食用植物資源が相対的に乏しい地域における食性拡大のための適応行動の結果である可能性がたかく、それ自体がオホーツク文化のもつ北方寒冷地へのたかい適応度をしめすものといえる。さらに、ドングリ類やヒシの利用は、環オホーツク海沿岸の多様な植生地理区域（沖津 2002）にひろがったオホーツク文化の針広混淆林帯（北海道）における食生態上の適応型として評価しうる特徴であり、環境適応と食生態という側面からオホーツク文化の地域性

(15) ただし、このアカザ属種子はほとんどが未炭化であることから混入と評価されている（山田・今井 2012）。

(北海道的特質) を浮き彫りにしうる指標といえる。

オホーツク文化の植物利用の特徴をさらに追究するためには、炭化種実の時間的・地域的な空白を埋めることが今後の課題となる。具体的に、十和田式期単独の炭化種実が皆無であるほか、利尻・礼文島を含む宗谷海峡周辺と知床半島東側から根室半島にかけての根室海峡周辺は、オホーツク文化の炭化種実の空白地帯となっている。これらの時期・地域の資料の充実化が目下の最優先事項となろう。レプリカ法による種実探索は既存資料でおこなえる点に期待できるが、本稿で述べたように、オホーツク文化は堅果類・根茎類の存在も重要な論点となるため、やはりフローテーション法による種実回収が重要である。くわえて、残存デンプン粒分析や残存脂質分析の実施も効果的だろう。

オホーツク文化の食用以外の植物利用に関してだされている仮説に、雑穀とブタ飼育の関係の問題がある。山浦清(1982)は、道北のオホーツク文化遺跡から骨鋤とブタ骨が多量に出土した点に注目し、ブタ飼料用に雑穀や豆類が栽培され、そのための耕起・碎土・整地に用いられたのが骨鋤だった可能性を早くに指摘していた。現在の炭化種実の内容をみれば、豆類栽培がおこなわれていたとは考えにくい。雑穀栽培・利用については興味深い仮説である。オホーツク文化のブタは十和田式期から確認されるため(菊池 1995, 山田他 1995)、十和田式期の雑穀の有無がこの問題を追究するうえで重要な意味をもつ。しかし、いま述べたように十和田式期単独の炭化種実が皆無であるばかりでなく、オホーツク文化の時期を認定できるブタは炭化種実の空白地帯である宗谷海峡周辺と根室海峡周辺にかぎられるため(山田他 1995)、現状では雑穀とブタ飼育の関連性を検証できない。この意味でも先述した資料の充実化は重要である。

さらに、元地式期(熊木 2018)とトビニタイ式期(榊田 2016)の資料の充実化も重要と考える。炭化種実が前者ではゼロ、後者では標津町と斜里町

の計 4 遺跡にしか出土例がない。この時期は、擦文文化後半期に全道的に拡散する「擦文オオムギ」の伝播・流通ルートが重要な論点となるので(山田 2004, 榊田投稿中)、レプリカ法を含めた植物関連資料の蓄積が期待される。また近年では、トビニタイ式土器・擦文土器とオホーツク土器の付着炭化物の安定同位体分析等による食性比較研究が積極的になされ(國木田 2018, 平河内 2020, 村本・宮内他 2021)、残存脂質分析でトビニタイ式土器付着炭化物からキビのバイオマーカーが検出されるなど重要な成果があがっている(村本・宮内他 2022)。今後は本稿で論じたオホーツク文化の雑穀利用や野生植物利用が、擦文文化との関係がつよまるなか食性全体のなかでどのような経過をたどったのかを考えていきたい。

本稿は、2021 年度に横浜ユーラシア文化館と大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された特別展『オホーツク文化 あなたの知らない古代』の図録コラムを執筆する過程で調べた内容が基になっている。まず、執筆の機会を与えてくださった熊木俊朗先生、高橋健氏、塚本浩司氏の 3 名に深甚の謝意を表したい。特に高橋氏には本誌への掲載をご快諾いただいたことも併せて感謝申し上げたい。

また下記の諸氏・諸機関には炭化種実の実見等でお世話になり、データや論文のご提供や植物の生態に関するご教示をいただいた。末筆ながら記してお礼申し上げたい。

梅田広大・太田圭・窪谷葵・高島孝宗・種石悠・豊原熙司・村本周三・渡部高士(五十音順・敬称略)

網走市立郷土博物館分館モヨロ貝塚館・オホーツクミュージアムえさし・ところ埋蔵文化財センター・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設・北海道立北方民族博物館

参考文献

天野哲也 2003「オホーツク文化とはなにか」『新北海道の古代 2 縄文・オホーツク文化』北海道新聞社、110-133 頁

- 内山幸子 2006「オホーツク文化の動物儀礼」『北海道考古学』42、75-92 頁
- 大井晴男 1979「オホーツク文化の堅穴住居址－環オホーツク海海洋漁撈・狩猟民文化の成立過程についての一仮説－」『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』三上次男博士頌寿記念論集編集委員会、1-38 頁
- 大井晴男編 1982『シンポジウム オホーツク文化の諸問題－その起源・展開・社会・変容－』學生社
- 大貫静夫 2005「極東先史社会の野生食料基盤」『ロシア極東の民族考古学－温帯森林猟漁民の居住と生業－』六一書房、263-294 頁
- 大貫静夫 2006「東アジアの中の縄文文化」『東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』國學院大學 21 世紀 COE プログラム第 I グループ考古学班、25-38 頁
- 大貫静夫 2010「大・小興安嶺狩猟民の居住形態について」『比較考古学の新天地』同成社、833-842 頁
- 沖津 進 2002『北方植生の生態学』古今書院
- 小野智香子 2016「ヤナギラン－ほんのり甘く干し芋のような味（イテリメン）」『シベリア先住民の食卓－食べもののから見たシベリア先住民の暮らし』東海大学出版部、140-145 頁
- 風間伸次郎 2016「アムール流域の食用植物－万能調味料塩漬けラムソン（ナーナイ、ウデヘ）」『シベリア先住民の食卓－食べもののから見たシベリア先住民の暮らし』東海大学出版部、156-161 頁
- 加藤九祚 1986『北東アジア民族学史の研究』恒文社
- 菊池徹夫 1978「オホーツク文化の住居について」『北方文化研究』12、139-170 頁
- 菊池俊彦 1995「オホーツク文化に見られる鞆鞆・女真系遺物」『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、31-131 頁
- 國木田大 2018「土器付着物を用いた続縄文・擦文・オホーツク文化の食性復元」『SEEDS CONTACT』5、23-26 頁
- 熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター
- 倉橋直孝 2003「(6) 青苗砂丘遺跡出土の植物遺体」『奥尻町青苗砂丘遺跡 2』北海道埋蔵文化財センター、86 頁
- クレイノヴィチ、E. A. (榊本 哲訳) 1993『サハリン・アムール民族誌』法政大学出版局
- 河野本道・後藤朱美 2016『北海道島のヒシ ～道南部編～ 函館・大沼国定公園・せたな方面』北海道出版企画センター
- 榊田朋広 2007「土器容量組成からみたトビニタイ文化と擦文文化の関係」『古代』122、123-153 頁
- 榊田朋広 2016『擦文土器の研究－古代日本列島北辺地域土器型式群の編年・系統・動態－』北海道出版企画センター
- 榊田朋広 2019「続縄文文化終末期の炭化種実組成」『SEEDS CONTACT』6、29-36 頁
- 榊田朋広 2021「オホーツク文化の野生植物利用」『オホーツク文化－あなたの知らない古代－』横浜ユーラシア文化館、37 頁
- 榊田朋広 (投稿中)「擦文文化の雑穀利用の展開と地域間交流」『東日本穀物栽培開始期の諸問題』雄山閣、(頁数未定)
- 榊田朋広・高瀬克範 2019「石狩低地帯北部における先史・古代の植物利用－札幌市域における炭化種子・土器圧痕の検討－」『日本考古学』48、1-19 頁
- 佐々木史郎 2005「極東ロシア、アムール川の先住民」『世界の食文化② 極北』農山漁村文化協会、23-77 頁
- 笹田朋孝 2012「第四節 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土の鉄器について」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科、277-280 頁
- 札幌市博物館活動センター 2020『Muse Letter 72 札幌付近を通る植物の境界線』札幌市博物館活動センター
- 佐藤和利 1989「オホーツク文化期の堅穴住居跡に伴った植物性食料」『PROJECT SEEDS NEWS』2、4 頁
- 佐藤和利編 1986『紋別市立郷土博物館特別展「水海の民族・オホーツク文化展」』紋別市立郷土博物館
- 佐藤隆広編 1994『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 佐藤宏之 2005「コンドン村とロシア極東の植物資源利用」『ロシア極東の民族考古学－温帯森林猟漁民の居住と生業－』六一書房、118-133 頁
- 庄田慎矢・塚本浩司・根岸 洋 2005「北海道オホーツク海沿岸先・原史土器の焼成痕」『貝塚』60、17-30 頁
- 梶田光明 1982『史跡標津遺跡群伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書』標津町教育委員会
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 2012『草木の種子と果実』誠文堂新光社
- 高瀬克範 2019「北海道島におけるイネ科有用植物利用の諸相」『農耕文化複合形成の考古学①』雄山閣、91-110 頁
- 高島孝宗 2005「オホーツク文化における威信財の分布について」『海と考古学』六一書房、23-44 頁
- 田口洋美 2005「アムール川流域少数民族の狩猟漁撈活動」『ロシア極東の民族考古学－温帯森林猟漁民の居住と生業－』六一書房、13-59 頁
- 武田 修 1996「オホーツク文化堅穴住居内の遺物出土パターンについて－常呂川河口遺跡 15 号堅穴を中心として－」『古代文化』48-6、3-13 頁

- 丹菊逸治 2016「ベリーー第二の主食（ニヴフ）」『シベリア先住民の食卓－食べものから見たシベリア先住民の暮らし』東海大学出版部、146-150 頁
- 知里真志保 1976『知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社
- 手塚 薫・水島未記 1997「ロシア・ハバロフスク地方におけるエヴェンキ、ネギダール、オロチの植物利用」『北海道開拓記念館研究紀要』25、97-119 頁
- 長崎 郁 2016「ユカギール人が一番好きなベリー」『シベリア先住民の食卓－食べものから見たシベリア先住民の暮らし』東海大学出版部、151-155 頁
- 永山ゆかり 2016「ベリーー緑の絨毯にちりばめたビーズ（アリュートル）」『シベリア先住民の食卓－食べものから見たシベリア先住民の暮らし』東海大学出版部、134-139 頁
- 名久井文明 2019『食べ物の民俗考古学 木の実と調理道具』吉川弘文館
- 那須浩郎 2018「縄文時代の植物のドメスティケーション」『第四紀研究』57-4、109-126 頁
- 那須浩郎 2019「ヒエはなぜ農耕社会を生み出さなかったのか？」『農耕文化複合形成の考古学⑤』雄山閣、161-176 頁
- 西秋良宏・宇田川洋編 2002『北の異界 古代オホーツクと氷民文化』東京大学総合研究博物館
- 野村 崇他 1982『ニツ岩』北海道開拓記念館
- パリノ・サーヴェイ 2020「7 カモイベツ遺跡の炭化種実同定」『斜里町カモイベツ遺跡』北海道埋蔵文化財センター、365-372 頁
- 平河内毅 2020「土器付着炭化物および胎土残存脂質を用いた史跡チャシコツ岬上遺跡の食性復元」『知床博物館研究報告』42、39-46 頁
- 前田 潮 2002『オホーツクの考古学』同成社
- 松下 亘・米村哲英・畠山三郎太・安部三郎 1964『知床岬』市立網走郷土博物館
- 松田 功・村本周三・田代雄介 2011『ウトロ遺跡』斜里町教育委員会
- 松山利夫 1982『ものと人間の文化史 47・木の実』法政大学出版局
- 水島未記 2005「サハリン・アムール地域の植物利用」『第20 回特別展 アイヌと北の植物民族学～たべる・のむ・うむ～』北方民族文化振興協会
- 水島未記 2010「サハリン先住民の自然資源としての植物：利用植物一覧」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史－北方文化共同研究報告－』北海道開拓記念館、17-52 頁
- 水島未記・池田貴夫 2000「ロシア・ハバロフスク地方におけるナーナイ、ウデへの植物利用」『北海道開拓記念館研究紀要』28、39-60 頁
- 水島未記・池田貴夫 2003「ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用」『「北方文化共同研究事業」2000-2002 年度調査報告』北海道開拓記念館、111-136 頁
- 水島未記・白石英才 2013「ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用（4）」『北方地域の人と環境の係数史 2010-12 年度調査報告』北海道開拓記念館、39-80 頁
- 水島未記・タチヤナ P. ローン・会田理人 2005「サハリン先住民の植物利用（ウイルトを中心）」『18 世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化－北方文化共同研究事業研究報告－』北海道開拓記念館、125-186 頁
- 水島未記・田村将人 2008「ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用（2）」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史－2005-07 年度調査報告－』北海道開拓記念館、17-78 頁
- 宮田佳樹・宮内信雄・堀内晶子・吉田邦夫・村本周三・小林克也・平河内毅 2020「北海道斜里町チャシコツ岬上遺跡出土土器の残存有機物分析」『知床博物館研究報告』42、29-37 頁
- 村本周三・宮内信雄・堀内晶子・吉田邦夫・宮田佳樹 2021「トビニタイ文化期における土器を用いた調理について」『日本文化財科学会第 38 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会第 38 回大会実行委員会
- 村本周三・宮内信雄・堀内晶子・吉田邦夫・宮田佳樹 2022「脂質分析から見たトビニタイ文化の特徴について」『日本考古学協会第 87 回総会 研究発表要旨』日本考古学協会、50 頁
- 山浦 清 1982「オホーツク文化の骨斧・骨篋・骨鋏」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1、151-166 頁
- 山田悟郎 1994「ロシア沿海地方から出土する栽培植物について－ソバとオオムギを中心として－」『1993 年度北の歴史・文化交流研究事業中間報告』北海道開拓記念館、29-50 頁
- 山田悟郎 1995a「第 7 章 魚骨層から出土した植物遺体」『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』利尻富士町教育委員会、84-86 頁
- 山田悟郎 1995b「第 VI 章まとめ 1. 擦文時代の農耕について」『雄武堅穴群遺跡』北海道開拓記念館、97-120 頁
- 山田悟郎 1996a「付編 II 常呂川河口遺跡 15 号住居跡から出

- 土した植物遺体」『常呂川河口遺跡 (1)』常呂町教育委員会、615-620 頁
- 山田悟郎 1996b「オホーツク文化期に利用された植物」『北海道開拓記念館研究紀要』24、49-66 頁
- 山田悟郎 2004「擦文文化期における二系統のオオムギ」『宇田川洋先生華甲記念論文集 アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター、133-142 頁
- 山田悟郎 2009「4 モヨロ貝塚の住居跡および墓墳から検出された植物遺体について」『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会、413-423 頁
- 山田悟郎 2011「付編2 ウトロ遺跡から出土した植物遺体分析結果について」『ウトロ遺跡』斜里町教育委員会、382-388 頁
- 山田悟郎 2018「第9節 チャシコツ岬上遺跡から検出された植物遺体」『チャシコツ岬上遺跡－総括報告書－』斜里町教育委員会、179-184 頁
- 山田悟郎・今井千穂 2012「第六節 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の堅穴から検出された植物遺体について」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科、284-293 頁
- 山田悟郎・椿坂恭代 1989「オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀」『PROJECT SEEDS NEWS』1、3 頁
- 山田悟郎・椿坂恭代 1995「大陸から伝播してきた栽培植物」『北の歴史・文化交流研究事業研究報告』北海道開拓記念館、107-133 頁
- 山田悟郎・椿坂恭代・右代啓視 1991「網走二ツ岩遺跡から出土した栽培植物」『北海道開拓記念館調査報告』30、27-38 頁
- 山田悟郎・平川善祥・小林幸雄・右代啓視・佐藤隆広 1995「オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物」『北の歴史・文化交流事業研究報告』北海道開拓記念館、65-80 頁
- 横浜ユーラシア文化館・東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設編 2021『オホーツク文化－あなたの知らない古代－』横浜ユーラシア文化館
- 吉崎昌一 1994「北海道枝幸郡目梨泊遺跡出土のオホーツク文化の植物種子」『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会、335-349 頁
- 吉崎昌一 1995「湧別町川西遺跡出土の植物種子」『湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館、69-75 頁
- 吉崎昌一・椿坂恭代 1990「サクシュコトニ川遺跡にみられる食料獲得戦略」『北大構内の遺跡 8』北海道大学埋蔵文化財調査室、23-35 頁
- 米村 衛・梅田広大編 2009『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会
- 渡辺 誠 1975『縄文時代の植物食』雄山閣
- Ivanov, S.V., M.G. Levin, and A.V. Smolyak. 1964. The Negidals. In *The Peoples of Siberia*, edited by M.G. Levin and L.P. Potapov, pp. 685-690. The University of Chicago Press. Chicago.
- Ivanov, S.V., A.V. Smolyak, and M.G. Levin. 1964. The Orochi. In *The Peoples of Siberia*, edited by M.G. Levin and L.P. Potapov, pp. 750-760. The University of Chicago Press. Chicago.
- Levin, M.G. and L.P. Potapov. 1964. The Nanays. In *The Peoples of Siberia*, edited by M.G. Levin and L.P. Potapov, pp. 691-720. The University of Chicago Press. Chicago

李徳成家文書に見る戦時下の横浜華僑の暮らし

伊藤 泉美*

はじめに

日中戦争・太平洋戦争期に横浜華僑はどのような暮らしを営んでいたのだろうか。この点について、近年、口述記録集やそれらを基にした研究などが著されているが⁽¹⁾、その実態が十分に解明されたとは言い難い。その原因の一つは1945年5月29日の横浜大空襲により、横浜中華街をふくむ横浜市の中心部が壊滅的な打撃をうけ、横浜華僑に関する歴史資料がほとんど残っていないことである。そうした中、横浜開港資料館に寄贈された李徳成家文書⁽²⁾は戦時下の横浜華僑の暮らしの一端を具体的に知ることのできる大変貴重な資料である。本稿ではこの李徳成家文書を読み解きながら、戦時下の横浜華僑の営みについて考察する⁽³⁾。

以下、まずは李徳成（1897年～1976年）の一族について述べ、次に戦時下の横浜中華街の一般状況にふれ、最後に李徳成家文書を具体的に解釈していく。

1 李家について

一枚の写真

古い一枚の写真を見てみよう。中国服を着た3人の男性と2人の少年が写っている。

中央に座っているのが、四人兄弟の父・李貴昌（1848年～1928年）である。その右隣が長男の東成、右端が次男の金成、李貴昌の左隣が3男の啓成、そして、左端が4男の徳成である。左の2人は学帽をかぶり制服のようなコートを着ているの



図1 李貴昌一家 1903年頃 左端が李徳成
以下、図3・図15を除き、図版資料は全て黎啓榕氏寄贈・横浜開港資料館所蔵。

で、学校に通っていたのだろう。左端の徳成はまだ幼く、尋常小学校の1年生くらいだろう。徳成は1897年生まれなので、6歳だとすれば、写真の撮影年代は1903年頃と推定される。当時、横浜中華街には尋常および高等小学校に相当する大同学校があり、徳成はここに入学したと考えられる。

撮影年を1903年とすると、父李貴昌は55歳、長男東成は24歳、次男金成は20歳、3男啓成は17歳となる。このように年齢がわかるのは、李家には「族譜」という家系図が伝わっているからだ。族譜は、原則的に父系血縁集団である宗族内の男子について、歴代の氏名、続柄、生没年、経歴などを記録したものである。図2は、李家の族譜の第18世の徳成とその息子と孫世代にあたる第19世、第20世について記した箇所である。

なお、1923年の関東大震災で中華街全域は倒壊

(1) 財団法人横浜中華会館・横浜開港資料館編『横浜華僑の記録—横浜華僑口述歴史記録集』財団法人中華会館、2010年。陳天璽「太平洋戦争期の横浜華僑華人—魏家と江家のファミリーヒストリーを通して」早稲田大学国際教養学部『Waseda Global Forum』No.17、2020年、p.1-23。横浜ユーラシア文化館編『横浜中華街160年の軌跡 この街がふるさとだから』2021年。横浜中華街生業と文化編集委員会編『横浜中華街 生業と文化 横浜中華街発展会協同組合設立50年記念』横浜中華街発展会協同組合、2022年。

(2) 本文書は子孫の黎啓榕氏より横浜開港資料館に寄贈された。

(3) 本稿は拙稿「横浜華僑・李家の肖像」『開港のひろば』135号（2017年2月）および2017年6月に香港中文大学で行われたThe International Conference “Recapture endangering social life: source materials and ways of living of the East Asian Overseas Chinese during the Pacific War Period”での口頭発表“The Difficult Life of Wartime Chinese Living in Yokohama Based on the Li family's Documents”をもとに加筆作成したものである。

*ITO Izumi 横浜ユーラシア文化館副館長



図2 李家族譜

焼失の被害をうけたので、それ以前の横浜華僑の家族写真はきわめて貴重である。ただし写真の撮影場所は残念ながら不明である。横浜の写真館かとも思われるが、背景画には、洋室の中に中国的にも見える植物が描かれており、香港などで撮影した可能性も排除できない。

広東から横浜へ

この写真におさまるまでの李家の足跡を考えてみたい。李家のルーツは中国の南部、広東省南海県黄竹岐堡である。横浜での足跡は、徳成の父李貴昌が20歳の頃、単身で横浜を訪れたことに始まる。出生年から計算すると、1870年前後である。現存する1877年の横浜在住中国人の名簿（「明治十年在横浜清国人名簿」『神奈川県史料』第7巻所収、原本は国立公文書館蔵）を調べてみると⁽⁴⁾、残念ながら李貴昌の名前はない。ただし、名簿には、「李承昌」・「李達昌」・「李雲昌」と似たような名前が見られる。中国人の男性は、兄弟・従兄弟・はとこなど、宗族内で同じ世代に属する者が名前の一文字を共有する習慣があるため、この3人が親戚であり、彼らを頼って来日した可能性もある。

貴昌の孫李福泉は、「祖父は単身で横浜にやってきて、こっちで祖母（梁氏）と結婚した」と語っ

ている⁽⁵⁾。長男の東成が1879年生まれであるため、77年の名簿に李貴昌の名が見られない状況の解釈は3つあるだろう。第1は初来日が1878年頃とする解釈、第2は1876年以前に来日していたが、1877年時点では妻と共に帰国していたとする解釈である。というのも、77年の名簿で梁姓の女性は9人確認できるが、1人は女兒、残りの8人にはいずれも配偶者がおり、貴昌の妻である梁氏は見当たらないからだ。第3は、横浜にはいたが、登録していなかったので人名簿には掲載されていないとする解釈である。「在横浜清国人名簿」は当時の登録証である「籍牌」を受けた者の名簿だが、在住者の中には未登録の者もいたからだ。

李家の家業

来日後の李貴昌は、西洋料理のコックとして横浜で働いていたと伝わる。長男の東成については、1924年頃の記録『中華民国十二年九月一日横浜大震災中之華僑状況』によれば、妻李黄玉蘭と長男李福基とともに根岸町に住み、職業は料理業となっている。



図3 横浜中華街記憶地図 1940年頃
『横浜華僑の記憶』より

(4) この名簿については、拙稿「1877年の横浜外国人居留地における中国人―「明治十年在横浜清国人名簿」の分析から」『横浜開港資料館紀要』第33号（2015年、35-82頁）を参照されたい。

(5) 李福泉氏インタビュー（1997年6月2日）、『横浜華僑の記憶』44頁。

次男の金成については、創業年は定かではないが、中華街の山下町 147 番地で洋食の金海亭を営んでいた。図 3 は 1940 年頃の中華街の記憶地図だが、中央の路地沿いに「金海亭」が見られる。現在の香港路沿いである。店の名は「金成」の金と、先祖の地「南海」の「海」を組み合わせたのだろうか。この店は 1945 年頃まで存続した。1940 年に神戸から横浜にやってきた鄭金美（後に徳成の長男福泉と結婚）は、金海亭の向かいに住んでいたが、店はいつも賑わっていたと記憶している。4 男の徳成については、資料解説の中で後述するが、1942 年頃には、東京の花月食堂でコックとして働いていた。

2 戦時下の横浜中華街

戦争の勃発

関東大震災をなんとか乗り越え、李一家が暮らしを立て直しつつあった 1930 年代はまた、日本の軍国化が進んだ時期でもあった。1931 年には満州事変、1937 年には日中戦争、1941 年には太平洋戦争に突入する。

1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件が起きると、ただちにその影響が日本在住の中国人に現れた。7 月 10 日には帰国第一陣が横浜港を出港し⁽⁶⁾、8 月までに帰国者が相次いだ。しかし、その多くは留学生であり、中には華僑など定住者もいたが、彼らは「旅行願」として、一時的帰国の扱いとされた⁽⁷⁾。それは、再来日する際、入国しやすいようにとの配慮からであった。

1937 年 12 月あたりから華僑社会に変化が出はじめた。南京の蒋介石政府支持か、日本の傀儡政権である北京臨時政府支持かで、華僑たちの意見が揺れた。日本国内で生きていくためには「日華融和」によって、経済関係の復旧をはかり、商取引の硬直を打開することが必要であった。そのため、華僑の間では総領事館や国民党支部の「抗日意識の昂揚」への反発が広がった。12 月 13 日に南京が陥落すると、

総領事館の指導統制にゆらぎが出始め、12 月 14 日には北京で北京臨時政府が樹立された。

1938 年 1 月 14 日、横浜の福建連合会は北京臨時政府の旗である五色旗を掲揚し、横浜華僑社会に北京政府支持の動きが広がった。中華会館で華僑大会が開かれ、五色旗問題が協議された。1 月 16 日、「南京政府を相手とせず」との対中国重大声明、所謂近衛声明が発表され、事実上の国交断絶となった。これを受けて、横浜の中華会館では臨時理事会が開かれ、北京臨時政府支持が決定された。翌 17 日、馬福生、鮑啓康ら中華会館理事は神奈川県庁外事課長を訪ね、新政府支持を表明するとともに、華僑各団体に五色旗の掲揚を通告した⁽⁸⁾。1 月 20 日、駐横浜中華民国総領事館は閉鎖され、総領事、駐日大使が帰国した。22 日には在浜華僑 18 団体主催による「新政府設立大祝賀会」が中華会館にて開催され、神奈川県知事、横浜市長も参列した。この祝賀会を契機として、横浜華僑社会は「親日」にまとまりつつあった⁽⁹⁾。

横浜で生きることを選んだ華僑たちは、「日華融和」のため、防空演習、皇軍慰問、国防資金への献金などを行った。また横浜中華公立学校もこうした事態に敏感に反応した。1938 年 1 月からは親日教育方針をとることになり教科書の改訂が行われた⁽¹⁰⁾。11 月 24 日には横浜中華公立学校の小学生 2 人、汪近周と陳慧彩がラジオに出演し⁽¹¹⁾、海外に向けての「日支親善提携」宣伝に動員された。12 月には当時日本全国で行われていた建国体操を通して日本精神に触れたいとして、伊勢佐木警察署長による指導を受けた⁽¹²⁾。さらに華僑は山下町出征兵士の区民葬や靖国神社の大祭に代表を送るなど、日本社会との協調を模索した。

経済的影響としては、日中戦争勃発以後、輸出入業者はほとんど休業状態に陥った。中華料理店は主に日本人を顧客としていたため影響は大であったが、「北京政府支持」表明後は日本人客が戻り、日

(6)『横浜貿易新報』1937 年 9 月 26 日。なお、本節の記述にあたっては、『戦時下における外国人の動向』『横浜市史Ⅱ』第 1 巻下 (937-1026 頁、1996 年) を参照にした。

(7)『横浜市史Ⅱ』第 1 巻下、937 頁。

(8)「南京街に五色旗翻る」『夕刊神奈川読売新聞』1938 年 1 月 15 日号。

(9)『横浜市史Ⅱ』第 1 下巻、947 頁・948 頁。

(10)『読売新聞』1938 年 1 月 18 日号。

(11) 汪近周氏インタビュー (2007 年 9 月 20 日)『横浜華僑の記憶』142 頁。

(12)『読売新聞』1938 年 12 月 16 日号。

本人相手の店は回復した。しかし、華僑労働者を対象としている店は半減した。洋裁業については、顧客が欧米人であることから、彼らの帰国により業務不振に陥った⁽¹³⁾。業種による違いはあるが全体的に華僑の経済活動は停滞を余儀なくされた。

1941年12月8日、アジア太平洋戦争開戦と同時に、英国・米国など交戦国の敵性外国人の全国一斉捜査が行われ、成年男性はただちに「敵国人抑留所」へ入れられた。中国人については、日本の傀儡政権である汪精衛政権を支持していると見なされ、居住や移動の自由を奪われたものの、抑留されることはなかった。移動については、道府県を越えて外出する場合は、所管する警察に届け出を出すことが義務づけられた。1943年6月30日現在で、横浜市内在住外国人は4555人、その内、中国人は2804人であった⁽¹⁴⁾。

華僑の空襲体験

本格的な日本本土空襲が始まった1944年の年末以降、横浜を襲った空襲は29回を数えた。華僑もこうした度重なる空襲におびえていた。コックや洋裁師などの一部の華僑は、箱根や軽井沢などに避難したドイツ、イタリア、スイスなどの枢軸国や中立国の外交官などととともに同地に避難した⁽¹⁵⁾。しかし、中華街に暮らす大半の華僑は街中に防空壕を掘り、防空演習に参加するなどして、戦時下の日々を耐えていた。

特に大きな被害をもたらしたのが、1945年4月15日と5月29日の空襲であった。4月15日の空襲では、堀ノ内町にあった横浜華僑の2つのピアノ工場、周興華ピアノ工場と李兄弟ピアノ製作所が焼失するなどの被害を受けた。

5月29日には、500機を超えるB29が来襲し、横浜市内では確認されているだけで、死者は3649人、罹災住宅は約4万に登った。横浜大空襲と呼ばれるこの空襲で、中華街は焼け野原となり、店舗や住宅、中華公立学校、関帝廟などが焼失し、

大半の華僑が被災した。空襲を体験した華僑の一人梁兆華は「戦闘機は500くらい飛んできて、蜂みたいだった」、また空襲の前に「逃げるように」という意味のビラを米軍が空から撒いたと語る⁽¹⁶⁾。また、当時5歳だった曾徳深は、中華街の自宅の防空壕に、母と姉二人、弟の5人で逃げこんだが、そこにいると焼け死ぬと外から声をかけられ、中華街大通りを駆け抜けて、山下公園に避難した。その晩はニューグランド・ホテルのロビーで一夜を明かしたが、ホテル裏の空き地で大人たちが大きな鍋で炊き出しをしていたのを覚えている⁽¹⁷⁾。家を失った華僑は、山下町で焼け残った欧米系の銀行・石油会社・ホテルなどの石造りの建物に避難して数日を過ごした。それから2か月半後の8月15日、終戦を迎えたのである。

3 李徳成家文書の資料から

このような戦時下において、横浜中華街の華僑はどのような生活を送っていたのだろうか。仕事や日々の暮らしに必要な日用品の入手はどうだったのか。そうした事柄に関わる、李徳成家文書の資料を見ていきたい。

資料1 居住並労働従事許可証（李徳成）図4・図5

発行者：警視庁

発行日：1942年（昭和17）7月15日

継続許可日：1944年（昭和19）7月15日

これは李徳成の日本での居住および労働従事に関する許可証である。李徳成の原籍は中華民国広東省南海県、住所は横浜市中区山下町106、労働従事の場合と屋号は東京都麹町区丸ノ内2-2丸ビル地下花月食堂、雇い主は岡本正治郎、職業は料理職従事で、年齢は42年と明記されている。花月食堂は『東京名物食べある記』（時事新報社家庭部編、1929年）でも紹介されている日本人経営の食堂である。

遵守事項として以下の記載がある。1）効力期間は2年、2）許可証は常時携帯し要求があれば掲示

(13) 神奈川県外事課『支那事变下ニ於ケル外事警察ノ一般状況』（昭和14年3月末）。

(14) 『横浜市史II』第1巻下、1025頁。

(15) 陳天璽「太平洋戦争期の横浜華僑華人」17-19頁。

(16) 梁兆華氏インタビュー（2003年8月）、『横浜華僑の記憶』88頁。

(17) 『横浜中華街 生業と文化』118頁。

すること、3) 許可期間内に従事場所、雇い主、住所に変更があった場合は3日以内に所轄署へ届けること、4) 継続して居住従事する場合は期間終了後30日前に更新出願すること、5) 帰国・他府県へ転出はその前に、転職の場合は3日以内に所轄署へ届けて許可証を返納すること、6) 許可証を破損あるいは失くした場合は写真3枚を添えて所轄署へ届

け出て再交付を受けること、7) 国籍・氏名・身分上に異動が生じた場合は速やかに所轄署に届けること、8) 改ざん・不正利用、遵守事項に違反した場合は許可を取り消すこと。

3) については、図4の「異動事項」欄に何も記載がないので、この間に変更はなかったといえる。

4) 継続申請に関してはこの許可証は1度更新され



図4 居住並労働従事許可証（李徳成）表紙ほか



図5 居住並労働従事許可証（李徳成）

ている。最初は1942年4月10日に申請し、約3か月後の7月15日に許可発給されている。その2年後の1944年7月15日に継続許可がおりたが、戦争末期で物資が不足していたためであろうか、新しい許可証が発給されるのではなく、「継続許可、年月日、警視庁取扱者印」のスタンプが押され、1944年（昭和19）7月15日に更新されている。

資料2 定期旅行許可証（李徳成）図6

発行者：神奈川県知事

発行日：1945年（昭和20）3月30日

更新日：1945年（昭和20）7月1

太平洋戦争勃発翌日の1941年12月9日に発令された、内務省令第31号「外国人の旅行等に関する臨時措置」によって、日本国内に居住する外国人は道府県外への旅行が許可制となった。「旅行」と表現されているが、日々の「移動」、たとえば通勤や

通学にもこの許可証が必要となった。

これは李徳成が山下町の自宅から東京駅前の丸ビルにあった花月食堂まで、日々の通勤のために必要だった許可証である。記された内容を確認してみよう。

国籍は中華民國、居住地は横浜市中区山下町106番地、職業は料理職、氏名は李徳成、年齢は46歳、旅行の目的は東京都丸ノ内花月食堂ニ通勤ノタメ、とある。発行日は昭和20年3月31日、許可期間は当初は昭和20年4月1日から6月30日となっているが、赤線で消され、7月1日から9月30日と赤字で記入されている。発行日も昭和20年3月31日を、インクが滲んで判読しがたいが、7月1日に直している。これから、この許可証の有効期間は3か月であったことがわかる。行先地および往復経路については、居住地を出発、京浜線（国有鉄道東京－横浜（桜木町）間の路線）桜木町駅と品川駅を経由

第六號様式

第 3074 定期旅行許可証

國 籍 中華民國

居 住 所 横浜市中区山下町 106 番地

職 業 料理職

氏 名 李 徳 成 年 齢 46

本 人 自 署 東京都丸ノ内花月食堂ニ通勤ノタメ

旅行ノ目的

許可 期間 自昭和 20 年 4 月 1 日 至昭和 20 年 6 月 30 日

行 先 地 ニテ乗(船) 京浜線 桜木町 駅(港)

及

往復経路 品川 駅(港)ニテ降車(船)

昭和 20 年 3 月 31 日

注 意 本證ハ常ニ之 携帶シ警察官吏ノ請求アリタルトキハ之ヲ提示スベシ

日本標準規格 B 6

図6 定期旅行許可証（李徳成）

し、京浜線東京駅にて降車し、上記行先地（花月食堂）に至る間の往復、と明記されている。神奈川県知事の印の横には、神奈川県横浜臨港警察署のスタンプが押されている。注意書きには、本証を常に携帯し警察官吏の請求あるときは提示すべしとある。日々の通勤までも厳しい監視下にあったこととともに、横浜大空襲後の昭和20年7月の段階でもこの許可証の更新を行っていたことになる。

資料3 滞邦許可書（逗留許可書）（呉順娥）図7

発行者：神奈川県知事

発行日：1944年（昭和19）5月5日

更新日：1945年（昭和20）5月8日

1939年3月1日、内務省令第6号「外国人の入国、滞在及退去に関する件」が改正され、厳しい許可制・登録制がしかれた。それまで在住許可を受けていた者も1年ごとに所轄警察署に届けるこ

とが必要となった。これは李徳成の妻呉順娥に発行されたもので、発行日から約1年後に更新されている。神奈川県知事の印のほかに、2か所押されている印は、判読しづらいが「神奈川県横浜臨港警察署」の印と思われる。また、用紙下部の注意書きに、滞在許可期間満了後に引き続き滞在を希望する外国人は期間満了10日前までに居住・滞在する地方長官に延長許可申請するようにと、日本語と中国語で明記されている。李徳成文書には、この呉順娥の滞邦許可書とともに3男の李福強の滞邦許可書もある。

資料4 衣料切符（李徳成）図8、図9

発行者：農商務省

有効期間：1944年（昭和19）4月1日～
1946年（昭和21）3月31日

戦時下、食料品や衣料品などの物資不足により、

第二様式

第571号

滞邦許可書
(逗留許可書)

滞邦許可期間 (逗留許可期間)	自昭和19年5月11日 至昭和20年5月10日	20.5.11 21.5.10
国籍	中華民國	
居住地	横浜市中山山下町106番地	
職業	無職	
籍(無氏姓人) (家族關係)	李徳成妻	
氏(姓)	吳	
名(名)	順娥	
年	38	
月	8	
性	女	
本人		
同伴		
家族		

上記ノ通り滞邦スタートラ許可
(上表所記之人允其逗留日本特此許可)

昭和19年5月5日

神奈川県知事

注意 滞邦許可期間満了後引續キ滞邦セシムル外国人ハ期間満了10日前ニ居住又ハ滞在地方長官ニ滞邦期間延長ノ許可ヲ願フベシ

注意 逗留許可期間満了後引續キ逗留シムル外国人ハ期間満了10日前向居住地域逗留地方長官ニ延長許可ヲ申請スルベシ

日本標準規格 第5

図7 滞邦許可書（逗留許可書）（呉順娥）

配給制が順次導入された。横浜市では1940年6月から砂糖・マッチが切符制となり、1941年4月には米の配給制が実施された。9月には野菜が切符制となり、さらにみそ・醤油が配給制となった。衣料品の切符制は1942年2月から実施された。物資が次々と統制の対象となったが、その配給の事務を町内会が請けおった⁽¹⁸⁾。

衣料切符発行者は農務省、有効期間は1944年（昭和19）年4月1日から1946年（昭和21）3月31日までである。住所の欄に「第二区第五隣組」とあり、表紙の「経由責任者」として「山下町町内会」の印鑑が押されている。人びとは配給によって戦時体制へと接続させられ、町内会は衣食に関わる物資を操作する権力を持つ地域団体がゆえに、どのような態度や意志をもつ者をも強制的にまきこみ従属化させていったとされる⁽¹⁹⁾。まさに事実上の交戦国の国民である華僑も戦時下の日本で生き抜くためには、町内会の配給制度に組み込まれざるを得なかったことを、この衣料切符が示している。

裏面の「注意（良く読んで下さい。）」とある注意事項から、この衣料切符の使用方法の概要を見てみ

よう。

注意書きの最初に「今年度は衣料切符の点数も少なくなりましたので皆さんは今一層衣料品の消費節約と手持品の補修活用に心掛けられ決戦下の衣生活を戦ひ抜いて下さい。」とある。

使用方法については、衣料品を購入する時は衣料切符から購入しようとする衣料品について定められた点数分の小切手を切り取り、引き換えて購入した。タオル、手ぬぐい、靴下、足袋、縫い糸については、小切手のほかに制限小切手が必要であり、制限小切手分しか購入できないとある。手ぬぐいタオルは1本、足袋靴下は合計2足、縫い糸は合計15匁だけである。そのほか品名の書いていない制限小切手が3枚あるが、これは当局の指示があるまで使えなかった。戦争終結前年の厳しい物資状況の中で華僑の生活が営まれていたことがわかる。

資料5 郵便貯金通帳（李徳成）図10、図11

原簿所管：横浜貯蓄支局

これは李徳成の1944年5月から1945年12月までの郵便貯金通帳である。1944年5月から1945年



図8 衣料切符（李徳成）表紙

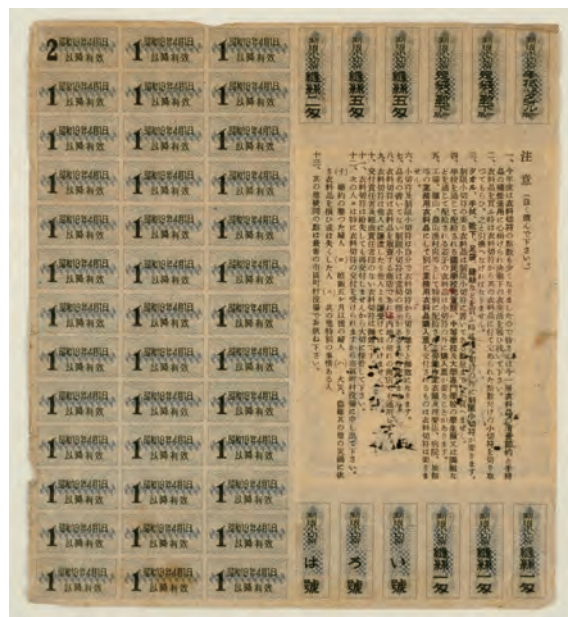


図9 衣料切符（李徳成）

(18)『横浜市史Ⅱ』第1巻下、895-897頁。

(19)『横浜市史Ⅱ』第1巻下、901頁。

6月まで毎月貯金をしている。5月と6月に150円、7月から9月に100円、10月と11月に50円、12月に100円、翌1945年1月に150円、2月に50円を貯金している。そして、横浜大空襲のあった5月29日の1週間後の6月5日にそれまでの全額1000円を引き出している。

資料6 郵便貯金通帳（李雪英）図12、図13

原簿所管：横浜貯蓄支局

李雪英については、表の住所書きが判読しづらいが、おそらく同居していた親族の女性であろう。1943年（昭和18）1月から1945年10月までの郵便貯金通帳である。1943年1月から1944年5月まで毎月貯金がおこなれ、当初は1円だったが、1円50銭、2円、2円50銭、7円、10円と金額が上がっている。貯金総額は61円で、1944年に15円が引き出され、残りの全額46円は横浜大空襲の8日後の1945年（昭和20）6月6日に引き出され、



図10 郵便貯金通帳（李徳成）表紙ほか

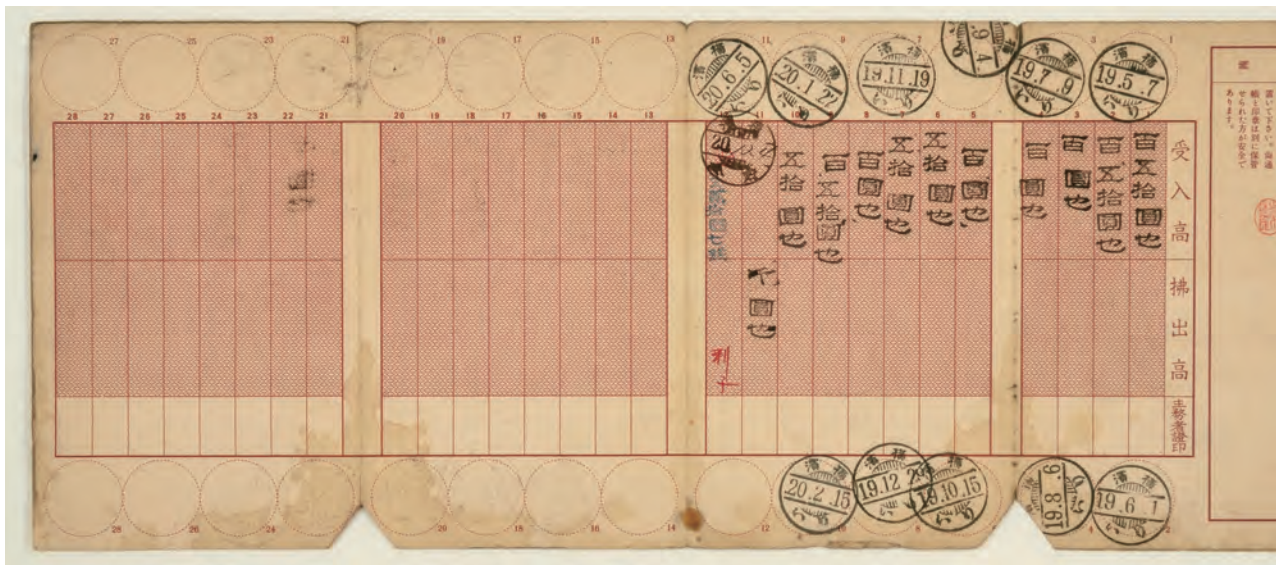


図11 郵便貯金通帳（李徳成）

表にも6月6日の日付スタンプと手書きの「即時金払」の文字が確認できる。

この2冊の郵便貯金通帳に記された毎月の貯金は何を物語るのだろうか。これは当時日本国内で展開された「貯蓄報国」の動きと無関係ではないだろう。国民精神総動員運動が展開される中、戦費調達の効果をもつ「国民貯蓄奨励運動」が展開された。横浜市でも講演会などの宣伝活動が行われ、人びとを「貯蓄報国」に邁進させた。1938年頃から国民貯蓄組合が各地で町内会と一体となって結成され、1941年3月には国民貯蓄組合法が制定された。地

域ごとの貯蓄目標額が設定され、人びとに強制的に貯蓄を行わせたのである²⁰。この2冊の通帳は、戦時下の社会的圧力の中で、山下町に住む華僑に対しても、町内会を通じて「貯蓄報国」が勧められていたことを示している。

資料7 空襲罹災証明書（李徳成）図14

発行者：横浜港臨港警察署

発行日：1945年（昭和20）5月30日

1945年5月29日の横浜大空襲で李家が罹災したことを示す証明である。罹災者として、横浜市中

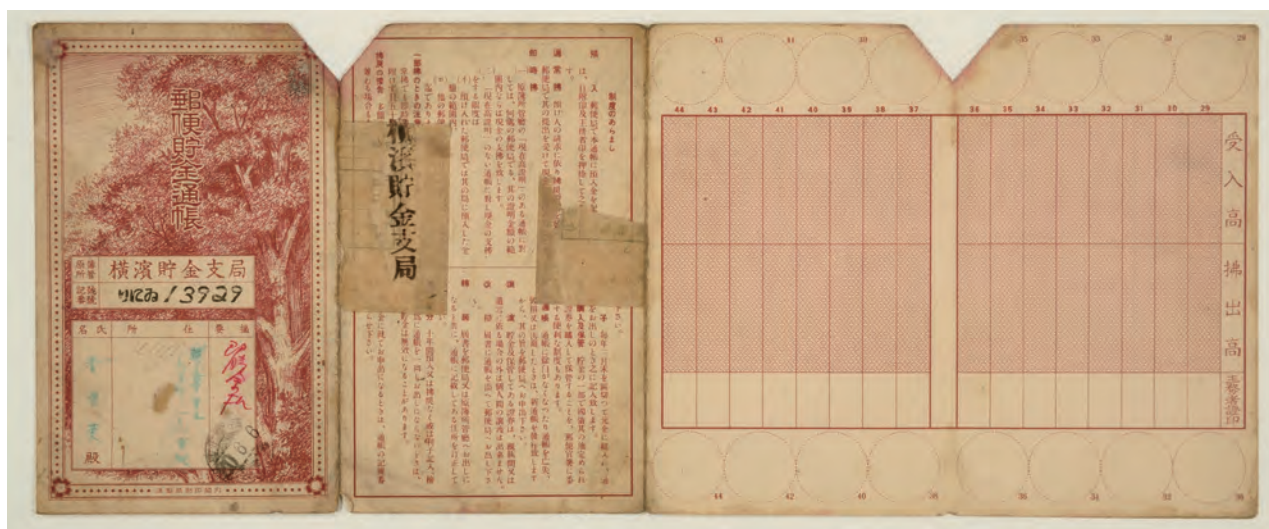


図12 郵便貯金通帳（李雪英）表紙ほか

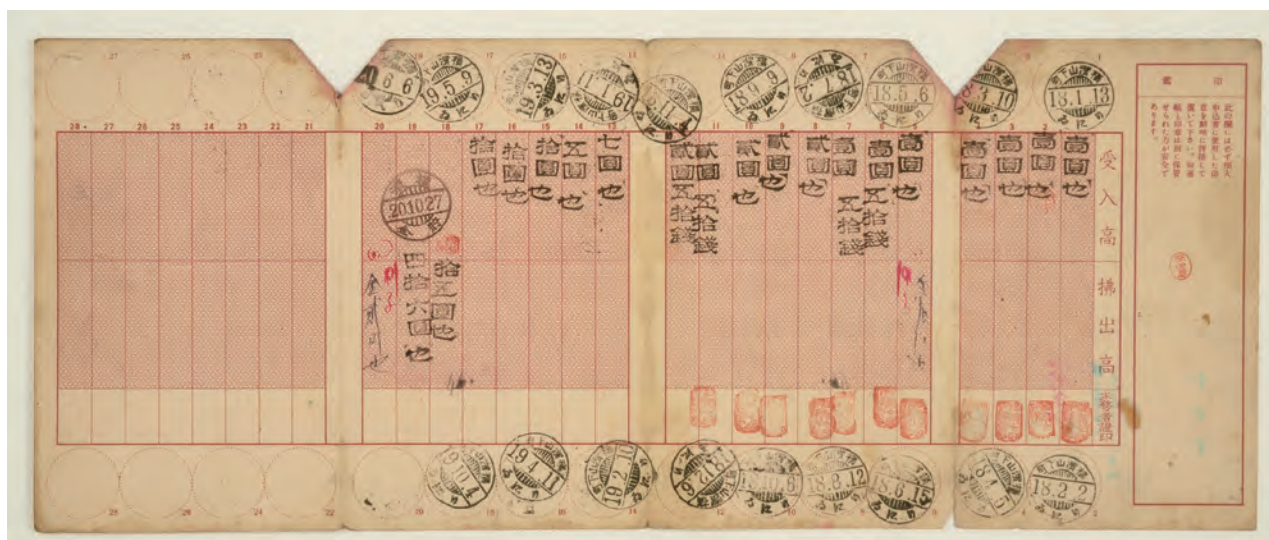


図13 郵便貯金通帳（李雪英）

²⁰『横浜市史Ⅱ』第1巻下、858 - 859頁。

区山下町 106 番地、料理職、李徳成 46 歳、世帯員として妻、41 歳との記載がある。罹災理由は「戦

争に依る」、罹災月日は「昭和 20 年 5 月 29 日」となっている。左下には発行日の「昭和 20 年 5 月 30

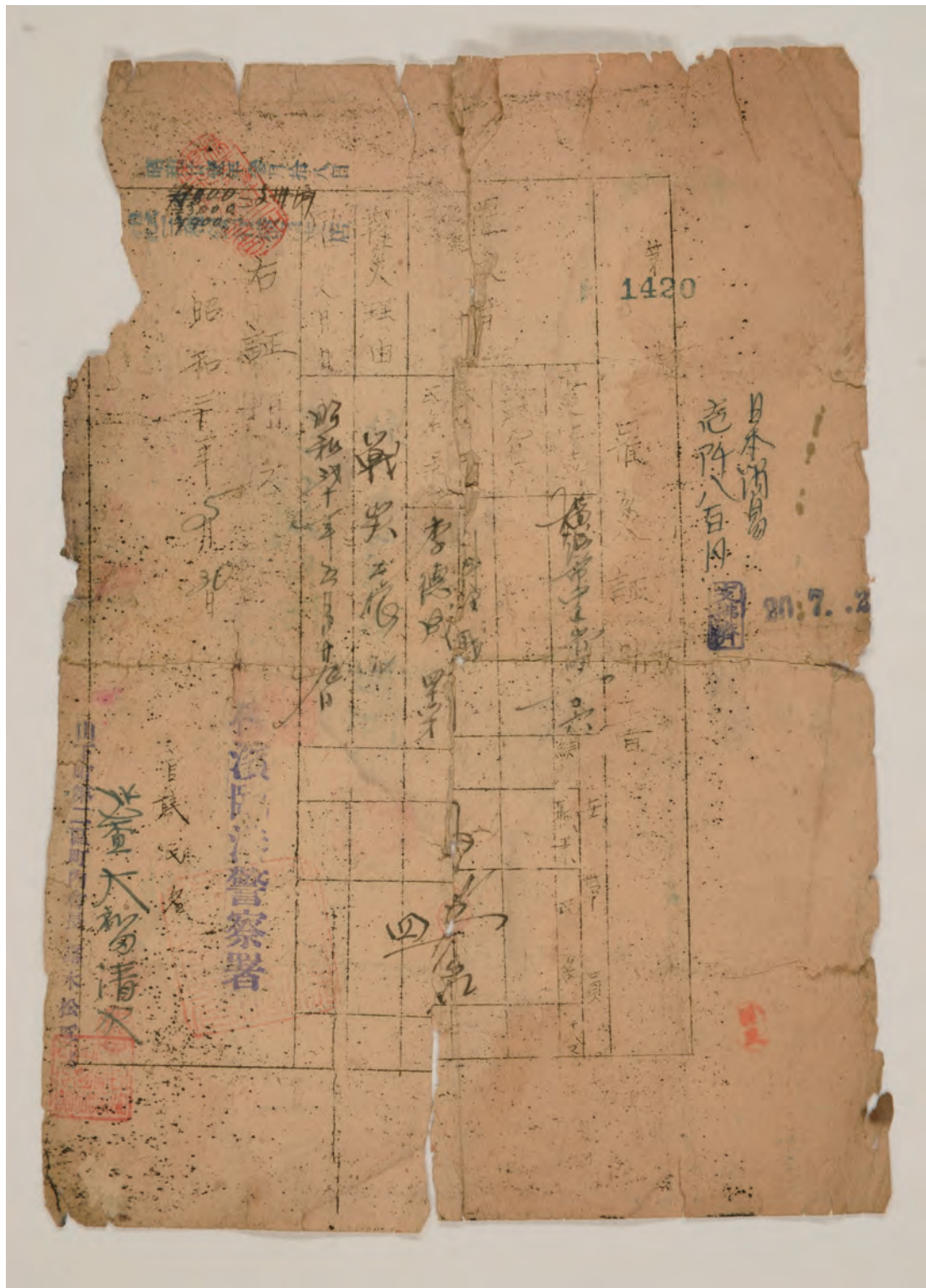


図 14

日」、発行者として「横浜臨港警察署」のスタンプがあり、大和田清次巡査の手書き署名がなされている。また露木山下町第二区町内会長のスタンプも押されている。華僑は町内会に組み込まれることで、配給の差配や貯蓄報国への対応など管理される立場におかれたが、一方、罹災した場合には町内会によってその事実が保証されていた。

この証明書をさらに詳しく見てみると、右欄外には手書きで「日本簡易、壱千八百円」、スタンプで「20.7.2」「支払済」と押されている。日本簡易とは日本簡易火災保険（現富士火災海上保険株式会社）と思われ、1945年（昭和20）7月2日に同社より1800円を受け取ったことの記録であろう。また、左上にはスタンプで「昭和廿壱年参月拾八日、株式会社三和銀行横浜支店」、手書きで「¥3000、¥900支払済」とある。これは三和銀行から昭和21年（1946）3月18日に3000円と900円を受け取ったことの証明書かと思われる。どうしてこうした記録が書かれているのかであるが、おそらく火災保険証書や銀行通帳が空襲で焼失したことにより、公的記録である罹災証明を利用して本人であることを証明し、その記録を記したのではないだろうか⁽²¹⁾。

焼け出された李一家は、一時、軽井沢に避難した。図11の郵便貯金通帳で6月5日に貯金を全額引き出ししているのが確認できるので、その現金をもって避難したのであろう。既述の通り、欧米人などの避暑地として栄えた軽井沢には、戦時中に各国の外交官などが避難しており、彼らのお抱えコックの中国人も住んでいた。李家はコック仲間の知り合いを頼り、軽井沢に向かったのである。

おわりに

1945年8月に戦争が終わった段階では、李徳成一家は横浜に戻っていた。その頃作成された二つの日本在住外国人名簿には、山下町106番地に

李徳成と妻と3人の息子の名前が見られる⁽²²⁾。翌1946年、李徳成は自宅のあった106番地のバラック建ての家屋を所有する岩崎幸太郎と熊谷忠之進との共同経営で料理店を始めた⁽²³⁾。食べるものにと欠いていた時代、料理店は軌道に乗ったようで、同年5月には岩崎・熊谷から家屋を買い取っている⁽²⁴⁾。翌年に徳成の長男李福泉と結婚した鄭金美によれば、お店はバラック造りだったが、日本人の客で繁昌したという⁽²⁵⁾。

李徳成家文書の中には、1947年の1月31日付の東京電灯株式会社関東配電所あての請願書がある⁽²⁶⁾。これは、山下町104番地から108番地に住む中国人と日本人の住民55人が同社に十分な電気の供給を要求したもので、筆頭署名人は李徳成である。「電球内ワズカニ赤線ヲ認メル程度ニテ読書、又ハ書キ物ノ用ニ弁ゼズ、況ヤ夜間営業等ハ思ヒモ依ラヌ処ニテ」、「再建途上ニ日夜働ク我々市民ノコノ不便ヲ御推察ノ上」と改善を要求している。料理店を開いていた李徳成にとって、電力の供給は喫緊の課題であり、近所の住民とともに行動を起こしたことがうかがわれる。

以上、李徳成家文書をもとに、戦時下の横浜華僑の暮らしの一端を垣間見た。そこから次の諸点が指摘される。

（1）横浜華僑は特異な政治的立場にありつつ、厳しい監視下・管理下に置かれていたこと。

日本と中国は日中戦争を戦っていたが、横浜華僑は「親日政権」である北京臨時政府と汪精衛政権を支持する立場をとったため、敵性国民とはみなされず、「親日国民」とみなされた。そのため、敵性国民である交戦国の国民、英米仏などの国民とは異なり、収容所に送られることもなく、居住地などの制限はあったが、中華街の住民は従来の家で暮らすことができた。しかし、道府県知事や所管警察署により厳しい管理下、監視下におかれた。横浜で生まれ

(21) 本資料の解釈にあたっては、羽田博昭横浜市史資料室主任調査研究員に種々ご教示いただいた。

(22) 米国議会図書館所蔵米軍接収資料中の名簿および外務省記録K門3類7項「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第4巻所収「在留外国人名簿」。これらの名簿については拙稿「1945年、神奈川県下の中国人社会—二つの名簿から見えてくるもの」『横浜ユーラシア文化館紀要』第9号（2021年、1－13頁）を参照

されたい。

(23) 李徳成家文書「共同経営契約書」昭和21年2月7日。

(24) 李徳成家文書「支払契約書」昭和21年5月1日。

(25) 鄭金美氏インタビュー 2016年11月9日。

(26) 李徳成家文書「願書（東京電灯株式会社関東配電所宛）昭和22年1月31日。

育った者であっても、1年ごとに滞在許可を取らねばならず、道府県を越えての移動は、たとえそれが、日々の通勤でも通学であっても3ヵ月ごとに許可が必要であった。

さらに、日々の暮らしにおいては、町内会を通じて、配給による日用品の入手や「貯蓄報国」のための郵便貯金の推奨など、日本社会の戦時圧力の中で生きなければならなかった。

(2) 監視・管理と表裏一体の保護

李徳成家文書に残された衣料切符や空襲の罹災証明書は外国人だからといって異なったものではなく、日本人同様に配布・発行されていた。このことから、監視・管理と表裏一体ではあるが、山下町に暮らす華僑は、町内会に組み込まれることで、住民として保護される側面もあったということができよう。図15は、1941年1月23日に山下町第1区町内会結成式が行われた時の写真であるが、前列左から3人目の人物は、当時の聘珍楼の経営者鮑金鉅である。中華街を含むエリアの町内会には住民としての華僑も組み込まれていたのであり、それは管理・監視といった側面が強いが、そこに加入することにより、生き残るという華僑の立場もあったのではないだろうか。



図15 山下町第1区町内会結成式 1941年(昭和16) 1月23日 鮑啓東氏寄贈・横浜開港資料館所蔵

日中戦争下の日本で暮らす華僑はさまざまなレベルでの差別や耐え難い不当な扱いに苦しんでいた。英語が堪能で上海にたびたび出張にでかけていた周ピアノの2代目周譲傑が特高に連行され拷問を受け、それが原因で亡くなった⁽²⁷⁾。また、日本の小学校に通っていた華僑の子供が日本人児童から侮蔑的な言葉を浴びせられて登校拒否になることもあった⁽²⁸⁾。

李徳成家文書は、そうした厳しい時代を生き抜いた、横浜で生まれ育った一人の華僑が残した資料である。そこから浮かび上がってきたのは、日中戦争下、1945年の段階でも東京の職場に通勤し、町内会を通じて日々の暮らしに必要な物資の配給を受け、「貯蓄報国」の要請こたえ、懸命に生きていた姿である。李徳成は、1945年5月29日の横浜大空襲で家屋を失い、一端は軽井沢に避難するも、数か月後には横浜中華街に戻った。コックの腕をいかして料理店を開き、戦後も一家を支えつづけた。その後、一時は喫茶店経営を行うが、再び本格的中華料理店「嶺南」を開いた。そして、1976年、明治、大正、昭和を生きぬいた79年の生涯をとじ、横浜中華義荘に埋葬された。

参考文献

- 伊藤泉美「横浜華僑・李家の肖像」『開港のひろば』135号、2017年2月。
- 伊藤泉美「1877年の横浜外国人居留地における中国人－「明治十年在横浜清国人名簿」の分析から」『横浜開港資料館紀要』第33号、2015年、35-82頁。
- 伊藤泉美「1945年、神奈川県下の中国人社会－二つの名簿から見えてくるもの」『横浜ユーラシア文化館紀要』第9号、2021年、1-13頁。
- 陳天璽「太平洋戦争期の横浜華僑華人－魏家と汪家のファミリーヒストリーを通して」早稲田大学国際教養学部『Waseda Global Forum』No.17、2020年、p.1-23。
- 東海林静男「戦時下における外国人の動向」『横浜市史Ⅱ』第1巻下、937-1026頁、1996年。
- 横浜中華会館・横浜開港資料館編『横浜華僑の記録－横浜華僑口述歴史記録集』中華会館、2010年。

(27) 「大塚錠吉手記」18頁。

(28) 魏徳夫の体験。陳天璽「太平洋戦争期の横浜華僑華人－魏家と汪家のファミリーヒストリーを通して」。

横浜中華街生業と文化編集委員会編『横浜中華街 生業と文化 横浜中華街発展会協同組合設立 50 年記念』横浜中華街発展会協同組合、2022 年。

横浜ユーラシア文化館編『横浜中華街 160 年の軌跡 この街がふるさとだから』2021 年。

公刊資料

孫士傑報告『中華民国十二年九月一日横浜大震災中之華僑状況』[中華民国駐横浜総領事館、1924 年]

『横浜貿易新報』1937 年 9 月 26 日号。

『夕刊読売新聞』1938 年 1 月 15 日号。

『読売新聞』1938 年 1 月 18 日号、1938 年 12 月 16 日号。

一次資料

大塚錠吉手記「横浜洋楽器製造史資料・稿本」所収、横浜開港資料館。

李徳成家文書、横浜開港資料館。

神奈川県外事課『支那事变下ニ於ケル外事警察ノ一般状況』(昭和 14 年 3 月末、横浜市史資料室。)

オホーツク文化の動物意匠遺物集成 (2)

高橋 健*

はじめに

昨年はオホーツク文化の動物意匠遺物の図と一覧表を掲載した（以下、前稿とする）。今年は出土遺跡及び資料について記載する。昨年は23遺跡・227点を集成していたが、見落とししていた資料5点を追加し（図25、表1-(5)）、24遺跡・232点となった。また、一部の資料について補足のための参考図（図26）および新たな写真・図（図27）を掲載した。図表の番号については、昨年からの連番としており、同一資料の場合はアルファベットを加えて区別した。

資料

動物意匠遺物が出土した24遺跡を道北部と道東部に分けた上で、それぞれ地域ごとのまとまりにしたがって述べていくことにしたい。道北部は利尻礼文両島から枝幸まで、道東部は湧別から根室までとする。日本海沿岸やオホーツク海沿岸の枝幸―湧別間にもオホーツク文化の遺跡はあるが、動物意匠遺物の出土は知られていない。

道北部

道北部では、12遺跡から87点が出土している。ネズミザメ吻端骨製のクマ座像が40点以上出土した香深井1遺跡が突出して多い。この他にも、礼文島北部の牙製像（女性・クマ）、枝幸の土製像など特徴的な素材利用がみられる。礼文島、利尻島、宗谷地域（島嶼部以外）に分けてみていきたい。

礼文島

礼文町 浜中遺跡（図3-1～3・6、図25-6a）

礼文島北岸の船泊湾のほぼ中央の海岸砂丘上に広がる遺跡である。1949年に北海道大学によって船泊砂丘遺跡として調査されたのをはじめとして、近年に至るまで繰り返し発掘調査が行われている。縄文文化期からアイヌ文化期までの複合遺跡であり、オホーツク文化についても十和田式期から沈線文期、さらに元地式期に至る各時期の土器が出土している。北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地としては、浜中1遺跡、神崎遺跡、浜中2遺跡などに分かれて登録されているが、本稿では浜中遺跡と一括して扱うことにしたい。

北海道大学による1949年の調査では、船泊砂丘第二遺跡から基部に尻尾の大きなキツネの彫刻を施した髪飾りが出土した（1）。成人女性の10号人骨の右上腕骨上から円盤形垂飾（クックルケシ）とともに出土したものである。道北島嶼部の墓は被葬を伴わないため厳密な時期比定は難しいが、オホーツク文化期のものであることは間違いないだろう。

1990年には浜中2遺跡で排水管の付け替えによる緊急調査が行われ、動物意匠を施したヘラが出土した（2）。板状の基部に動物のシルエットを表現する点は1と共通しているが、脚の曲がり方や尾の細さからトカゲだと考えられている。B区Ⅲ層から出土しており、オホーツク文化後期のものである。トカゲの反対側の側縁には縦の刻線で細い棒状に作出した部分に平行短刻線を並べている。頭部がはっきりしないが、オンネモト遺跡例（221）と共通するヘビの表現の可能性があるが、そうだとすれば、爬虫類2種類を表現したことになる。

北海道にはヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、コモチカナヘビの三種のトカゲが分布してお

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

り、特にコモチカナヘビ *Zootoca vivipara* は広くユーラシアからサハリン、道北部にかけて分布する種である。また、北海道北部に分布する横縞をもつヘビとしては、ニホンマムシとシマヘビが挙げられる。トカゲもヘビも現在の礼文島には生息していないが、オホーツク人はサハリンないし北海道本島の知識をもっていたのだろう。

3 は、千葉大学（礼文・利尻遺跡調査の会）による 2015 年の浜中 2 遺跡の発掘調査で出土した四本足のクマ像である。マッコウクジラの歯製で、尻側には歯髄腔があり、層状の構造がみえる。耳と口は表現されているが、目鼻は確認できない。7b 区 11 層下部（ほぼ 12 層上面）から出土したとされる。沈線文系土器に伴ったものとみてよいだろう。

6 は前稿では礼文島内出土とした牙製クマ像だが、出土地点が浜中 2 遺跡の範囲に含まれることが明らかになった⁽¹⁾（図 27 - 6a）。やはり海獣歯牙製で四本足のクマ像である。

浜中 2 遺跡からは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターによる 2016 年の発掘調査でも骨製クマ頭部像が出土した（図 26 - 1）。この資料は縄文文化期の層から出土したとされている。クマ頭部像はオホーツク文化で一般的な形態の一つであるが、縄文文化晩期にも滝川安井遺跡の石製品例がある。時期的に今回の集成対象外であるが、参考資料として掲げておく。

礼文町 上泊遺跡（図 3 - 4）

礼文島東岸の北部に位置する。上泊灯台のある小さな岬の南、2 本の小沢にはさまれた高さ 20m 弱の海岸段丘上から鈴谷式・オホーツク式土器が採集されるという（大井 1976）。

4 は四本足の牙製クマ像であるが、採集品のため出土状況等は不明である。北海道大学による報告では「第一遺跡の西方砂丘」（浜中 2 遺跡の西）の出土とされていたが（児玉・大場 1952）、大塚（1968）によって上泊遺跡出土と訂正されたものである。背

中から脚にかけてひだ状の組織を残している点が大きな特徴である。目と耳の表現はないが、鼻はしっかり彫り込まれており、未成品ではない。右前脚は後世に補修されている。尻側には歯髄腔がみられる。

大川は、ウエントマリ（上泊）遺跡下の海岸で発見されたという「牙製彫刻全身像」に言及している（大川 1998）。1949 年に実見したが、1950 年に再訪した時には北大・児玉氏に貸与中だったために実測できなかったと述べ、記憶にもとづくスケッチを示している（図 26 - 2）。1952 年の児玉・大場報告に掲載された牙製クマ彫刻は 1 点のみであるが（図 26 - 3）、これは明らかに資料 4 と同一個体である⁽²⁾。大川のスケッチとの相違点は大きいものの、同一資料だと判断しておきたい。

この資料はクマ像とされてきたが、ひだ状の表現からトラの可能性を考えてもいいかもしれない。もちろん北海道にトラは分布しないが、アムール川流域はシベリアトラの生息範囲であり、オホーツク人がトラを知っていた可能性はある。ただしナナイなどアムール下流域の先住民の作るトラの彫像は尻尾がまっすぐ後ろに伸びていることが多く、この牙製像とは異なっている⁽³⁾。

礼文町 内路（ナイロ）遺跡（図 3 - 5）

礼文島東岸やや北寄りに注ぐ内路川の河口付近右岸に位置する遺跡である。大川によって 1949 年・50 年に発掘された。クマ頭部像は 1950 年に郵便局舎南の昆布乾場の B 地点、表土下約 25cm の黒色腐食砂質土層の上部から出土した。同地点からは、オホーツク文化の刻文系から貼付文系の土器が出土している。大川によれば、頭部の破片ではなく最初から頭部像として作られたものであり、後頭部の欠損は発掘時のものらしい。素材はトドの脊椎骨だとされている。

礼文町 香深井 1 遺跡（図 4 - 7 ~ 図 8 - 63）

礼文島東岸の南部に注ぐ香深井川の河口付近に付

布する香深井遺跡群のうち、左岸の標高 4m 弱の小砂丘上に位置するのが香深井 1 遺跡（旧称・香深井 A 遺跡）である。1968 年から 72 年にかけて北海道大学北方文化研究施設によって発掘調査が行われ、オホーツク文化期の竪穴住居 5 軒と墓・石積み遺構、竪穴のくぼみなどを覆う 6 枚の魚骨層が調査された。オホーツク文化の十和田式期から沈線文期にかけてを主とする。

香深井 1 遺跡では、ネズミザメ吻端骨製の動物像が 45 点出土した（7～51）。ネズミザメ吻端骨の素材の形状を生かして作られている。写実的なクマ座像（7）や大型魚を抱えている様子がわかる例（12・14・17）、があるが、省略された表現のものも多い。しかし、基本的にはクマが大型魚（サケ？）を抱えて座った様子を表したと考えられている。ただし、魚ではなく何らかの容器を持っている例（9）もあり、クマというよりも海獣に近い印象を与えるものもある（28・50・51）。48 は四足獣を表しており、丸々としたプロポーションと短い鼻面はブタを思わせるものがある。49 は「人間をあらわしたものとしてほぼ誤りないのではないか」と報告されたものだが（大井編 1981: p.58）、破損している口の部分が突出していることを考えると、海獣のようにも見える。このほか、人間を表現した可能性が高いと考えた資料 2 点（高橋 2021: 図 4 - 2・5）は今回の集成から省いた。ネズミザメ吻端骨製彫像は、魚骨層 II から 12 点、魚骨層 IV から 15 点出土しているが、背面に孔をもつもの（30・32・34・37・39・42・44～46）や平らに削ったもの（28・30）が魚骨層 IV に多いことが指摘されている（大井編 1981: p.391）。

52・53 は 1 号 b 竪穴から出土した不詳角製品である。52 は鹿角の第一枝分岐部を用いて、角座部の周囲を削っている。第一枝の外側に、鰭脚類の全身を浮彫で表現している。角幹部を切り落とし、その端には四本脚の突起を設けている。角幹部には長方形の穴をあけ、目釘穴状の小円孔を設けている。53 は棒状の角製品の端部に海獣の頭部を表現して

いる。52 は埋土、53 は柱穴中から見つかったものだが、報告では 53 を 52 の長方形の穴にはめ込んだ可能性が想定されている。

54 は 1 号 a 竪穴床面から出土した、頭部に一對の逆鉤をもつ前田 A 群 3 類銛頭である。尾部は周縁を鋸歯状にしており、背面側中央に魚を線刻で表現している。おそらく海獣骨製であろう。

55 は 1 号 d 竪穴床面から出土したトド犬歯製の垂飾である。丁寧に加工され、光沢をもつ。ひれ状の後肢を前方に向けて折りたたんだ様子を表現しており、アシカ類であることは間違いない。背面に 2 本の刻線に挟まれた短刻線を並べた梯子状の装飾をもつ。報告では首の周囲に施された刻点とあわせてタテガミの表現とみなし、タテガミをもつオットセイないしトドのオスを表したものと考えている。ただ、アシカ類のタテガミは背筋全体に及ぶものではない点にやや疑問は残る。56 は魚骨層 IV から出土したクジラ類の歯牙製品である。腹面側に横長の穿孔を施している。垂飾というよりも留め具といえるかもしれない。

57 は 2 号竪穴床面から出土した鹿角製のスプーンである。柄の端部に海獣の頭部が表現され、首の周りには鋸歯文が 2 重に施されている。スプーンの軸には縦長のスリットが設けられている。匙部分は欠損している。

58 は 1968 年調査のトレンチ 4 層から出土したアホウドリ上腕骨製の針入れである。この層は魚骨層 IV に対応する可能性が高いとされている。片面に線刻による装飾を施す。右側に描かれている動物は、頭部・背びれ・胸びれの形態からゴンドウクジラだと考えられている（大井編 1981: p.299）。左側の文様の意味は不明であるが、刺し網やテントのようにも見える。

59・60 は土製品。59 は海獣の上半身を表したもので、目と口を刻みで表現している。口に直交して入れられた連続する刻みはヒゲだと報告されたが、歯を表したものではないだろうか。この種の土製

品は湧別川西遺跡出土の88のような牙製品を写したものだと考えられる。60は表土出土の土製品で、四足獣の胴部破片であろう。

61～63は土器片で、61は水鳥貼付文、62・63はクマ足跡の型押文をもつ。水鳥は右向きである。クマは5本の指をもつが、足跡では拇指が浅く目立たないことが多い。縦長の楕円形をした形状からヒグマの後肢の足跡だと考えられる。

利尻島

利尻富士町 利尻富士町役場（図8－64）

利尻島北岸、北東に向かって突き出したペシ岬の南東側の鴛泊港を見下ろす標高13～18mの段丘上に位置する。1932年に名取武光らによって調査され、1994年・2009年には道路工事に伴う緊急調査が行われた。

64は2009年調査のピット102から出土したネズミザメ吻端骨であり、クマ座像の未成品だと報告された。このピットからは他に遺物は出土しておらず、遺跡全体では鈴谷式から沈線文系の各時期の土器が出土しているため、時期は絞り込めない。

利尻町 亦稚貝塚（図8－65・66、図25－228）

利尻島西岸に突き出した杓形岬の南の入り江に面している。海岸線から100mほど離れた標高5～6mの砂丘上に位置する。1900年に人類学会員藤井秀による発掘で牙製婦人像が出土したことで知られている。1977年に宗谷バス杓形バスターミナルの工事に伴う緊急調査が行われ、鈴谷式期からオホーツク文化の各時期にわたる遺物が出土した。

228は第1ブロック3層から出土したヘラである。基部に海獣の頭を表現している。首には溝が3本めぐり、柄の部分には2本の切込みが入るが、貫通していない。あるいは未成品かもしれない。第1ブロックからは、刻文系と円形刺突文系の土器が出土している。

第3ブロックHグリッド焼骨遺構からは、海獣

の線刻文土器（65）が多段の貼付文を持つ小型土器と並んで出土した。この遺構が形成されたのは、オホーツク文化貼付文期後半とみられる。65は完形の小型土器であり、上半部に沈線によって動物のモチーフ10頭分が描かれている。海獣や水鳥のように見えるものがあり、さらに想像をたくましくすれば、動物が変身する様子を描いたものとも考えることもできる。

同じ遺構からは、トナカイ角製の指揮棒（66a・b）が出土している。この資料は被熱してバラバラになっており、分岐部と軸部の2点に分けて報告された。山谷（2008）はこの2点が接合関係にあることを示し、動物彫刻の模式図（図26－5）と一覧表を示している。山谷によれば動物は全部で44頭であり、クマ1頭、クジラ37頭、トド1頭、クジラか鰭脚類3頭、ラッコ？1～2頭とされている。トドとされた例は、アシカ類に留めておいた方がいいかもしれない。海獣が圧倒的に多いが、1頭だけのクマが端部に大きく立体的に表されている点は、クマが儀礼的に重要な地位を占めていたことをうかがわせる。この指揮棒の素材について、報告では厚さと表面の状態を根拠にトナカイ角製だと推測していた。山谷によって復元された第一枝と角幹の角度はエゾシカにはみられないものであり、これもトナカイ角だと判断する根拠になるだろう。

宗谷地域（島嶼部以外）

稚内市 富磯（図9－67、図25－229）

富磯貝塚は宗谷岬の西側、宗谷湾に流れ込む富磯川の右岸の海岸砂丘に立地する。1961年に北海道学芸大学旭川分校によって発掘調査が行われた。

67は土製のクマ頭部である。拡張区の地表下40cmから出土したという。ただし、この付近は攪乱を受けており、アイヌ文化期とオホーツク文化期の遺物が混在していたらしい。写真左側が破損しているように見えることから頭部破片の可能性もあるが、おそらく頭部像だと思われる。目と鼻は孔で表現さ

れ、口をはっきりと大きく開けている。

229は大場によって「富磯海岸のオホーツク遺跡の近く」から出土したと報告された土製のフクロウ像である(大場 1953)。全長 8.2cm、重量 100g、中空である。刻線による装飾によって羽角をもつフクロウを表しており、シマフクロウの可能性もある。採集品であり、オホーツク文化かアイヌ文化か帰属があいまいだと報告された。アイヌ文化の土製動物像の出土例はないため、オホーツク文化の可能性が高いと判断し、集成に含めておく。

稚内市 オンコロマナイ貝塚(図 9 - 68・69)

オンコロマナイ貝塚は、宗谷岬の先端やや西側に位置する。富磯貝塚からは約 4km 北にある。宗谷湾にそそぐ小沢であるオンコロマナイ川の川口左岸の海岸砂丘上に位置する。背後の小台地上には堅穴群が残されており、発掘調査によって鈴谷期の集落であることが明らかになっている。貝塚は 1959 年に東京大学教養学部文化人類学研究室、1966・67 年に北海道大学北方文化研究施設によって調査された。動物意匠遺物が出土したのは後者の調査である。

68 はネズミザメ吻端骨製のクマ座像である。背面側に欠損がみられるが、クマの頭部や前肢、抱えられた魚などの部分はほぼ完全に残っている。この種の座像としては、簡略化されない写実的な表現である。69 は石製の海獣像である。表面に海獣の毛並みを表したかのような細かい擦痕がみられ、前肢の位置に刻線が入る。海獣に似た形をした自然礫にわずかな加工を加えた石製像である。報告にはもう 1 点が掲載されているが、こちらには人為的な加工がみられないので、集成に含めていない。68 は N-22 区の第二層(包含層)、69 は N-21 区の第一層(表土)から出土したが、オホーツク文化の各時期の土器が混在しており、時期の決定は難しい。

稚内市 大岬(図 9 - 70)

松下(1968)が「宗谷村シリウス」出土として報告した資料である。前稿ではこれにしたがってシリウスとしていたが、シリウス(尻臼)は現在の大岬付近を指す旧称であるため、大岬と改める。宗谷岬の東側、現在の宗谷港の付近である。

70 はオホーツク文化に特徴的な大形の有孔石錘である。多孔質の石材で作られ、下半部には浅い溝が巡っているようである。体部片面に線刻で魚を 2 匹表している。魚は幅広の刻線でひし形を基調として記号的に表現されている。左側が上向き、右側が下向きである。

枝幸町 目梨泊(図 10 - 71 ~ 80)

道北オホーツク海沿岸は基本的に海と海岸砂丘の単調な地形が続くが、宗谷岬から 70km ほど南東に行くと神威岬がオホーツク海に突き出している。目梨泊遺跡は、神威岬の東南側の内湾に面している。目梨泊遺跡では 1960 ~ 70 年代には北海道大学文学部がオホーツク文化の集落の調査を行った。1980 ~ 90 年代には国道建設に伴う大規模な発掘調査が枝幸町教育委員会によって行われ、1999 年以降はオホーツクミュージアムえさしを中心とした学術調査が行われている。これまでに 9 軒の堅穴住居跡と 50 基の墓が調査されており、金属製品などの大陸系・本州系の遺物が多く出土している点でも注目を集めている。ただし、大規模な貝塚が確認されていないこともあって骨角器の出土は少なく、見つかった動物意匠遺物も土製品・石製品の例が多い。

71 ~ 76 は 1987 年の国道工事で遺構外から出土した土製品である。71・72 はクマ頭部を表したものの。71 は完形品で長さ 4.6cm。72 は欠損しているが下面(図右側)が内湾しており、後頭部に斜めの貫通孔をもつ。73・74 はネズミザメ吻端骨製クマ座像を模したものの。74 は手の指まで表現されているが、73 はややデフォルメされている。骨製品にも同様の簡略化された表現のものがある。75 はさらに簡略化が進んだものである。76 は四本足で立

つ動物像である。頭部を欠くが、クマだとしてもおかしくはない。

77は1990～92年の国道工事で出土した土製品である。耳をもち、口は一本線で表現する。前肢は折れている。クマとして報告されたものだが、プロポジションからは海獣に近い印象も受ける。

78～80は、筑波大学と枝幸町教育委員会による学術調査で出土したものである。78は5号住居跡覆土から出土した土製品で、下端部に4本の刻みをいれ、5本の指を表現している。おそらくクマの右前肢を表現したものだろう。報告では四本足のクマ形土製品の破片だとしている。そうした土製品の完形品は知られていないが、妥当な推測だと思われる。

79は包含層出土の鉤状製品。素材は海獣寛骨の坐骨部左側であり、アザラシ類の大型個体の可能性が高いとされている。図の下端には寛骨臼を残し、その先は破損しているが本来はV字形をしていたと考えられる。軸頭部は平坦面になっており、2つの不整な孔を設けている。穴の周辺には紐ずれの痕跡はなかったという。この平坦面に魚の意匠が表現されている。尾部付近は浮彫状となり、頭部から胴部は線刻である。頭部には口やエラ、側縁には短刻線によってヒレが表現されている。福井は、この魚が幅広であることからカレイ類、特にオヒョウを表したものだとして推測している（福井2014）。軸の内側は波状に削られており、それに沿って波状の刻線がある。波の下にいる魚を表現したものだろうか。軸頭部の反対面には、やはり波状の刻線と斜め方向に2本の刻線が施されている。

この資料は器種不明の装飾品として報告されたが、釣針軸の可能性が高いと考えられる。①海獣寛骨を素材とする、②軸頭部を薄く平坦な板状にして糸掛けの孔を設ける、③軸に魚の意匠を施す、④軸に波状の装飾を施す、といった要素はモヨロ貝塚の釣針軸に類例があるためである。一方で軸頭部の孔に紐ずれがみられなかったことは釣針軸と判断する

上では不利な材料であり、モヨロ例も含めて再検討の必要があるかもしれない。

80も包含層出土の釣針軸である。報告ではJ字形の結合釣針軸の完形品として報告されたが、「接合面」に調整痕がみられないことから、U字形の釣針軸の破損品だった可能性もある。軸頭部には糸掛けの溝を巡らせており、その上の端部に掌状の意匠を彫刻している。端部はわずかに内側に曲がっており、短い線刻が3本並んで指が表現されている。破損しているため、全体の本数は不明である。人間とするには指が短すぎることから、クマの左前肢をモチーフとした彫刻だと報告された。

枝幸町 ホロベツ砂丘（図11－81～83）

ホロベツ砂丘遺跡はオホーツク海に注ぐ幌別川の河口部近くの左岸河川敷に位置する。標高1.5m～4.5mの砂丘上にある。1983年に河川改修工事に伴う緊急調査が行われ、オホーツク文化の堅穴2軒とオホーツク文化の各時期の遺物が出土した。

動物意匠遺物は、いずれも遺構外から出土した土製品3点である。81はクマ頭部の土製品である。写実的な作りだが、ややしゃくれ気味な顔つきが特徴である。82はクマが魚をくわえて座っているところを表したもので、サメ吻端骨製のクマ座像を写したものと考えられる。全身にみられる刺突も、骨製の質感を表そうとしたものかもしれない。83は水面に現れた海獣上半身像であろう。首の部分に貫通する小孔がある。この資料も牙製品の写しだった可能性がある。

枝幸町 川尻北チャシ（図25－230）

幌別川右岸の湿地の中にある2つの小島がそれぞれ北チャシ・南チャシと呼ばれている。1971年に枝幸町教育委員会と北海道大学によって測量と発掘調査が行われた。発掘された北チャシの2号堅穴は、オホーツク文化前期の十和田式期の住居であった。

230は遺跡北端の崖部で表面採集された土器片で

ある⁽⁴⁾。沈線文と同心円のスタンプを施し、さらに胴部にクマ足跡の型押文を並べている。この資料はサハリンに分布する南貝塚式の北海道における出土例の一つとされている（氏江 1995）。

枝幸町 枝幸町内（図 11 - 84）

84 は明治年間に坪井正五郎により報告された「北見国枝幸村」出土の土器片である。この資料は枝幸の畠山三次郎が開拓に伴って採集したものを人づてに鑑定を依頼されたものであった。したがって出土地点などの詳細は不明だが、畠山三次郎は明治初期にエサシで漁業を行っていた人物であるので（日塔 1967）、枝幸市街地の海岸部だった可能性が高い。

84 は土器破片の表面に「浮き模様」（粘土貼付）によって四足獣を表現している。坪井は同時に持ち込まれた内耳土器と比較して「貝塚土器」だとしているが、オホーツク土器とみて問題ないだろう。描かれた動物について、坪井はイヌだと考えている。その根拠としては、クマにしては瘦せて足が細いこと、シカやキツネとは尾が異なること、オオカミは害獣なので装飾にしないだろうことを挙げている。しかし、少なくともオオカミを否定した根拠は弱いように思われる。貼付文による動物意匠は水鳥文など定型化されたものが多く、四足獣を表した例は少ない。モヨロ貝塚からの出土例（172）などがあるが、趣は異なっている。

道東部

道東部では 12 遺跡から 144 点が出土している。特に常呂から網走にかけての出土が多い。モヨロ貝塚やトコロチャシ跡遺跡のように比較的多くの資料が出土した遺跡はあるが、道北部における香深井 1 遺跡のように突出して多かったり、特定の器種に偏ったりすることはない。各地域の拠点的な集落から多様な器種が出土しているといえる。網走地域（湧別～網走）、知床地域、根室地域に大別してみたい。

網走地域

湧別川、常呂川、網走川などオホーツク海に注ぐ大河川の河口部付近に形成された集落遺跡から、動物意匠遺物が多く出土している。

湧別町 川西（図 11 - 85 ～ 90、図 25 - 91）

湧別川河口部とシブノツナイ湖にはさまれた段丘の縁に位置する。1960 年に米村喜男衛によりオホーツク文化の堅穴 2 軒が調査され、1990 年代には北海道立北方民族博物館による発掘が行われた。

1960 年の調査では 2 号堅穴の南西部の壁際に近い床面からクマと海獣の彫像が出土した。牙製クマ像（85）は 4 本足の姿勢で、ほぼ完形品である。顔つきをリアルに表現しているが、プロポーションはかなり頭でっかちである。首と胴の周りに刻線と列点で帯状の装飾を施している。また、喉の部分には左右を貫く貫通孔をもつ。両脇腹にも孔があるが、貫通はしていない。これらの孔の機能は不明である。牙製海獣上半身像（88）は、アシカ類が海面から上半身を出した様子を表しており、自立する。前肢は浮彫で表現されている。これらの牙製動物像はいずれも丁寧に作られ、滑らかに仕上げられた優品として知られている。色調がやや灰色を帯びているのは、焼けたためかもしれない。

この時の調査では水鳥貼付文をもつ土器が出土した。10 羽分の破片があってもいずれも右向きだったと報告されている。このうち 6 点の写真を示した（図 25 - 91）⁽⁵⁾。ゆるい S 字状の両端に円形文をもち、台形状の足を貼付している。水鳥文の直上の貼付文が直線の例と波状の例が含まれており、文様構成については検討を要する。

86・89 は 1960 年の調査以前に清野忠によって発掘されていた牙製品であり、住居内の骨塚から出土したものだという。86 はクマ頭部破片で比熱して灰色に変色している。89 は海獣上半身像の小型品であるが、基部は欠損しているという。

87・90 は、北方民族博物館による 3 号堅穴の調

査で出土した。87は鹿角製のクマ彫像の頭部破片である。90は鹿角の分岐部に浮彫でアシカ類の後肢のひれを表現したものである。

3号堅穴は貼付文期の堅穴であり、2号堅穴も同時期のものと考えられる。

北見市 栄浦第二（図11－92～図13－103）

栄浦第二遺跡は、サロマ湖東岸から常呂川河口にかけての砂丘上に広がる常呂遺跡群の中核をなす遺跡であり、二千軒以上の堅穴のくぼみが確認されている。地表面の観察によって大型で六角形のオホーツク文化の堅穴47軒が確認されており、さらに発掘調査で見つかったものが6軒ある。道内最大規模のオホーツク文化の集落である。発掘調査としては、1950年代末から60年代にかけて東京大学によって行われた学術調査と、1990年代初めに常呂町教委によって行われた道路工事に伴う緊急調査がある。オホーツク文化期の遺構としては、堅穴13軒、墓11基、動物骨集積2基などが調査されている。時期はオホーツク文化後期（沈線文期・貼付文期）である。

貼付文期前半の4号堅穴床面からは、クマ犬歯製の動物頭部彫刻品が出土した（93）。頭部の形だけが表現されており、目鼻口耳の表現はない。クマとして報告された資料だが、耳をもたないことから海獣と考えた。基部は深い溝を巡らせており、また細く深い盲孔が穿たれている。用途不明である。

貼付文期の7号堅穴の骨塚からは、鹿角製の指揮棒が出土した（92）。焼けて欠損しているが、鹿角の分岐部を逆に利用して、角座側にクマの頭部を彫刻している。94～96も7号堅穴からの出土。94は炭化した木製品の端部に口が刻まれており、海獣の頭部が表現されている。95は海獣の下半身と思われる浮彫をもつ鹿角製品。黒く焼けている。船か橇のようなものに載せられているようにも見えるが、よくわからない。96は鹿角製の棒状製品に、浮彫と刻線・刻点でエイの姿を表現している。また、左

側のU字状のモチーフは釣針軸ではないかともいわれている。刻線・刻点は非常に深く刻まれている。全体の形状は不明だが、下端は丁寧加工され、先がすぼまる盲孔が設けられている。素材は直線的な軸部であるが直径4.5cmと太く、表面に粒状の組織がみられないことから、トナカイ角の可能性もある。

99・102は11号堅穴表土・埋土から出土した動物意匠の貼付文土器である。99は2羽の水鳥が向かい合って連結したような形である。連結部には円形文を貼付し、貼付文上に刺突を加えている。102はS字状に3つの円形の貼付文を加えている。右上の1つが頭だろうが、下の2つが脚だとすればあるいは水鳥ではないのかもしれない。

97は貼付文期前半の23号堅穴骨塚から出土した角製品である。顔面部分は剥離しているが、右耳が残っており、本来はクマの頭部を作出していたものだろう。鹿角分岐部の角座側にクマ頭部を彫刻したいわゆる指揮棒とみられるが、別の棒状製品と組み合わせる構造になっている点が特異である。98・100も23号骨塚から出土した動物意匠の貼付文をもつ土器である。98はS字状に円形文1つを組み合わせしており、水鳥ではなく「海獣」として報告されたものである。円形文が体の前方についていることから鳥の足ではなく海獣の前肢と考えたものであるが、円形文の位置だけで種を描き分けていたと判断していいのか疑問も残る。100は飛翔する水鳥を正面から描いたとされている。

101・103は包含層から出土したもので、クマ足跡型押文土器である。

北見市 常呂川河口（図14－104～図15－120）

常呂川の河口部右岸、標高1～5m前後の氾濫原に位置する。大きく屈曲する常呂川に三方を囲まれた部分であり、1988～2003年にかけて河川改良に伴う緊急調査が行われた。オホーツク文化の遺構としては、堅穴住居跡5基、墓2基が見つかり

る。中でも 15 号堅穴は貼付文期の焼失住居であり、床面から大量の遺物が出土した。動物意匠遺物が見つかったのも、この 15 号堅穴からである。

104 は骨塚上部から出土した指揮棒である。104a・b は同一個体と考えられているが、被熱しており破損が著しい。鹿角の第一枝分岐部を使用し、角座側にクマの全身像を彫刻している (104a)。頭部は立体的な彫刻であるが、胴部は浮彫で表現されている。角幹部は途中で折れているが、彫刻はみられない。第一枝側 (104b) には、クジラの浮彫が施されている。残りが悪いが、ヒゲクジラ類を背面から見たものと思われる。この他に、動物意匠をもたないがこの指揮棒の端部だった可能性が指摘されている棒状鹿角製品がある (常呂町教委 1996: 第 70 図 1・2)。

105 ~ 109 はクマ頭部の破片であり、やはり骨塚上部の出土である。105 は全体を残すが、106 は顔の右側、107・108 は顔面を欠き、109 は顔面部の破片である。110 は足部の破片。111 は小さな四足獣が手足を広げた様子が表現されており、「小熊が母熊に抱っこしているところかもしれないが、木登りを想起させる」と報告されたものである。ただし単体ではクマと判断する根拠に乏しいものも含まれている。

112 は海獣の頭部を表現したものと思われる。113 は鰭脚類を表現した垂飾である。114 は小型の海獣彫刻であり、頭部と尾部が表現されている。115 は首の部分に 6 条の溝がめぐるビン状の製品で、上端に掌状の装飾を施している。クマの手であろうか。素材はクジラ類の歯である。118 はヒグマ犬歯製のラッコ彫刻で、手を胸の前に合わせた姿勢、腹の皮のたるみによる皺などがラッコの特徴をよくとらえている。119 は端部に海獣頭部を表現したスプーンである。被熱が著しい。113・114・118・119 は西側 IV 域からまとめて出土しており、さらに 118 は 119 の上に載って出土したという。

116・117 は木製品である。116 は棒状製品の端部にフクロウを彫刻したもの。117 は上側に 5 本、基

部側にも 1 つの突起をもつ。5 本の指と手根球だとすれば、クマの右手を彫刻した可能性がある。120 は埋土から出土した土器であるが、口径 35cm・高さ 37cm とサイズの的には骨塚からまとめて出土した「特大型」に属する。口縁部に動物意匠の貼付文を施している。緩いカーブの S 字状の右端に刻みを入れて口を表したもので、一般的な水鳥のモチーフとは異なっている。海獣と報告されたが、ヘビのようにも見える。

北見市 トコロチャシ跡 (図 15 - 121 ~ 図 17 - 143)

常呂川の河口部右岸の段丘上に位置する。縄文時代からアイヌ文化期に至る複合遺跡であるが、北端部にオホーツク文化の堅穴群が位置している。この部分の標高は約 15 ~ 18m である。東京大学による学術調査および常呂町 (北見市) と共同での史跡整備調査が行われている。1960 年代に 1 号・2 号堅穴、1990 年代から 2000 年代にかけて 7 号 ~ 10 号堅穴が発掘された。

1 号堅穴は外側から内側への建て替えがみられ、それぞれ藤本編年の d 群と e 群の標識資料となった土器群が出土した。貼付文期の前半と後半に位置づけられる。121 は 1 号堅穴の外側骨塚から出土した 4 本足のクマ彫像である。長さ 5.4cm と小型である。被熱して表面が若干ひび割れているが、残りのいい丸彫り像である。素材はトド雄の四肢骨である。132 は 1 号堅穴表層から出土した牙製海獣像の頭部破片。川西遺跡出土例 (88) のような上半身像になる可能性が高い。また、この海獣像の首の周りには刻線と列点による装飾がめぐっている。これも川西遺跡出土のクマ像 (85) と共通する特徴である。137 は 1 号堅穴の柱穴内から出土した土製品で、土器の把手部分の破片で、海獣の頭部を表現したと考えられる。両側の突起部が目を表しているようにも見えるが、上面に 2 つ貼付された小円形文を目の表現と見ることも可能である。139 は 2 号堅穴

の覆土から出土した水鳥貼付文を持つ土器片。右向きで、足の部分に小さな円形文を加えている。

125は1990年代のチャシ跡の調査時に遺構外から出土した石製品であり、厳密には時期不明である。丸い目と突出した鼻を表現している。首(?)の周りを細い隆線が一周しており、両側に三角形の表現が見られる。クマとして報告されたものだが、三角形がひれだとすれば海獣にも見えるし、耳だとすればブタにも見える。いずれにせよかなりデフォルメされた表現である。

7号堅穴は貼付文期の古い段階の7a号と貼付文期後半の7b号が重複していた。比較的多くの動物意匠遺物が出土した。まず鹿角製品だが、全て白く焼けている。122は写実的なクマ頭部破片。首の角度から四つん這いのクマ像ではなく、指揮棒端部の可能性もある。126・127はクジラの頭部。126は口と鼻孔2つが見えることから、ヒゲクジラ類である。128はクジラの背面から尾部にかけてを浮彫で表現している。横から見て屈曲しているのは、器体の屈曲部にあたるためだろうか。129はやはり浮彫で魚の姿を現している。131は、海獣像の頭部破片である。口を刻んでいるが、目や耳は表現していない。報告ではラッコの可能性を指摘したが、必ずしもラッコに限定はできない。133はやはり海獣像の頭部破片。目鼻口の表現はみられない。134は海獣像の胴部～後肢の破片で、ひれ状の後肢が見える。135は鰭脚類の後肢を浮彫状に表現したもので、おそらくはアシカ類であろう。

136は土製の海獣像頭部破片。頭部と左前肢を残すが、右前肢は欠損している。鰭脚類の頭部を写実的に表現しており、中空で表面は丁寧にヘラ磨きされている。割れ口を見るとかなり薄く作られており、全身像だったのかどうかはわからない。138・141・143は水鳥貼付文を持つ土器。138は太いクチバシと目、大きな水かきが表現されており、エトピリカを思わせる。141は水上に浮かぶ様子、143は脚で立つ様子を表している。143はほかにも同一

個体の大型破片がある。今回の集成の対象外だが、人の鼻形のモチーフをもつ土器も出土している。出土層位は122、126、127、131、136が埋土、128が7a号床面、133が7号床面、141が7b号床面、143が7a号骨塚である。しかし、埋土出土の資料についても多くは骨塚に伴っていた可能性が高いと考えている。

8号堅穴は貼付文期後半の堅穴である。123・124は8号堅穴の埋土から出土した。いずれも白く焼けた鹿角製品であり、何らかの製品(指揮棒?)の一部だったと考えられる。123は四足獣を浮彫で表現している。頭部には口を刻んでおり、4本の脚も表現している。クマではないかと推測しているが、決め手はない。また、この四足獣の足元にも別の動物の鼻づらの部分(?)が表現されている。クマ(?)よりも大きく見えることから、クジラ類の可能性もある。124は長さ3.3cmと小型のクマ彫像破片である。首の周りや背筋の右側に細い隆起線を浮彫で表現している。これが首輪と引き縄だとすれば飼育された仔グマの姿を現した可能性があり、オホーツク文化のクマ儀礼との関連でも注目される資料である。140は8号堅穴床面から出土した土器片で、貼付文でひれ状のモチーフを表現している。

10号堅穴も3段階にわたる建て替えが認められ、貼付文期後半に位置づけられる。動物意匠遺物は埋土出土の1点のみであった。130は10号堅穴埋土から出土した鹿角製品で、クジラの尾部と波線が浮彫で表現されている。これも指揮棒の破片だと考えられる。

網走市 ニツ岩(図17-144・145)

網走川河口部から北西に3kmほど離れた標高約45mの海岸段丘上に位置する。1970年代に北海道開拓記念館による発掘調査が行われ、3軒の堅穴が調査された。いずれもオホーツク文化貼付文期後半のものである。

144は1号住居跡床面から出土した水鳥貼付文を

もつ小型土器である。逆L字形の貼付文で右向きの水鳥を表したものだと考えられる。145は3号住居跡の焼土から出土したクマ彫像の顔面部破片。鼻と口がはっきりと刻まれている。

網走市 モヨロ貝塚(図17-146~図20-182、図25-231)

網走川の河口左岸の標高5~6mの砂丘上に位置する。竪穴住居跡群、墓域、墓から構成されるオホーツク文化を代表する集落遺跡である。

大正から昭和にかけてモヨロ貝塚の調査と保護に生涯を捧げた米村喜男衛の一連の調査による出土品からみていきたい。主な資料は『モヨロ貝塚資料集』に掲載されている(米村1955)。149は牙製のクマ彫像である。頭部から肩部(?)にかけての破片であり、全体の姿勢は不明である。顔つきは写実的に表現されている。

164~166は海獣骨製の釣針軸に線刻で上向きの魚を描いたもの。165は平行線や鋸歯文による装飾帯の下に魚が描かれる。164は魚の口から波状線が伸びており、釣糸を表しているように見える。166は直線が伸びて横線につながっている様子が両面に描かれている。これも釣糸だとすれば、延縄のようである。171は水鳥貼付文を持つ土器である。簡略化されておらず、はっきり鳥だとわかる表現である。足は一本で横向きのシルケットである。右向きと左向きの鳥を向かい合わせにしたものが5組施文されている。181はカエル貼付文を持つ土器である。上に刻みを加えた粘土紐で四足の動物を描いているが、手足を深く曲げた姿勢からカエルだと考えられている。231は結合式釣針の軸頭部に掌状の彫刻を施したもの。掌は軸に対してやや斜めについている。軸部には横方向の細い隆帯状の装飾が4本めぐっている⁽⁶⁾。

モヨロ貝塚では、北海道内外の多くの研究者による発掘調査も行われた。158は1933年に河野広道による発掘で出土した骨製スプーンで、名取武光に

よって報告された(名取1936)。墓の上部を覆うオホーツク文化期の貝層中から出土したものである。スプーンの匙部分は欠けているが、柄の部分に2頭の海獣が背中合わせに表現されている。

1941年には海軍施設の建設工事に伴う緊急調査が行われた。この時の出土遺物は、大場利夫によって報告されたが(大場1955)、動物意匠遺物のような「目立つ」ものについてはほぼ網羅されていると考えていいだろう。146はネズミザメ吻端骨製のクマ座像。比較的写実的な表現であり、背中には貫通孔をもつ。魚を抱える様子はない。156は弓弭、162は髪飾り、163は釣針軸である。いずれも端部を少し湾曲させ、口を刻んで海獣頭部を表現したもの。163には貫通孔もみられるが、目を意図したものかもしれない。176~180は水鳥などの動物意匠を貼付文で表現した土器である。L字(176)、緩いS字(177)、円形文の足を付加(178)、棒状の足2本を付加(179)などの例がみられる。176が向い合せである以外は右向きである。180は人のようにも見える形を描いたものだが、小破片であるため、どのようなモチーフになるのかはわからない。

159は大場が北海道大学医学部蔵品として紹介した資料である⁽⁷⁾(大場1962)。器種について大場は垂飾、松下(1968)は異形骨器としているが、骨角製のバックル(帯留)であろう。帯留めの突起部や帯を通す基部の孔も備えている。縁辺に動物のシルエットが4頭分表現されている。端部の2頭は尻尾が短く、側縁部の2頭は尻尾が大きい。松下(1968)はクマとキツネだと考えている。骨角製バックルの表面には優美な装飾が施されることが多いが、縁辺部に動物意匠をもつ例はほかに知られていない。

昭和20年代にはモヨロ貝塚調査団による発掘調査が行われた。この時の出土品の一部は1964年に『オホーツク・知床半島の遺跡』の下巻別篇として報告されている(駒井編1964)。

157は10号竪穴出土として報告されたが、住居西側の貝層から出土したものと思われる。長さ

12.4cmのスプーンで、柄の端部に海獣の頭部を表している。10号堅穴は貼付文期前半のものであるが、西側貝塚は刻文期に形成された。170も10号堅穴出土のクマ足跡型押文をもつ土器片である。

182は、7号堅穴出土と伝えられる石製クマ頭部像である。安山岩製で、長さ59.2cm、幅42.7cm、高さ25.0cmを測る。3D画像からおこした図を掲載しておく⁽⁸⁾ (図27-182a)。モヨロ貝塚8号・9号床面から出土した土製クマ頭部像とよく似た表現であるが、十倍以上の大きさである。この資料については大場(1964)が美幌出土と紹介しており、松下や宇田川の集成もこれに従っている。しかし、現在は網走市モヨロ貝塚館に常設展示されており、網走市立郷土博物館によればモヨロ貝塚出土で間違いないということである。8号・9号出土土製品との類似からも、オホーツク文化の所産である可能性が高い。

147は1948年に名取によって報告されたもので、ネズミザメ吻端骨製のクマ座像である。北大博物館蔵とされるが、いつの出土品かははっきりしない。顔の表現ははっきりしないが、ほぼ全体を残しているようである。

160は幅広の板状製品の上に2頭の四足獣を肉厚の浮彫で表現したものである。尻尾が大きいことからキツネだと考えた。写真の下側は破損しているが、周縁は波状になり、上縁沿いには列点をもつ。また、やや斜めの刻線と刻点・刻みを組み合わせて、縫い目のような表現をしている。出土位置等は不明である。

2000年代には史跡整備のための発掘調査が行われた。8号堅穴と9号堅穴を新たに発掘したほか、墓域や貝塚の調査も行われた。この調査で出土した資料については、遺構ごとに見ていきたい。

9c号堅穴の床面からは、動物型土製品が多く出土している。150は西側の床面から出土したもので、顔面を欠損するが、土製のクマ座像だと考えられる。151は骨塚6東隣の炭化材下から出土したもの

で、頭部を欠損しているが、前後肢の表現がより平板になったクマ座像であろう。報告では「婦人像のスカートのような部分」と推測しているが、足(後肢)をもつ点が説明できない。152は骨塚6の西隣の炭化材下から出土したクマ頭部土製品である。長さ4.9cm、刻みで目・鼻・口を表現している。154は、南西側の炭化材列下から出土したもので、鰭脚類が水中を進む様子を表している。155は骨塚6の西隣の炭化材下から出土したクジラ土製品である。152・155は船形土製品と近接して出土し、クマ・シャチ・船の「3点セット」として注目されたものである。報告時は155をシャチとしていたが、特徴的な背びれを欠いている以上シャチとみなすのは難しいと考え、今回判断を改めた。168は9号堅穴の上層骨集中①から出土した石製品である。前で手を組んでいる点はいわゆるクマ座像と共通するが、基部の幅は狭く自立はしない。

8号堅穴の覆土中には魚骨層が形成されていた。第4段階の魚骨層から、動物意匠の貼付文をもつ半完形土器が出土した(172)。への字形の貼付文に口の刻みを加え、さらに4本の刻みで足を表現している。魚骨層下の床面直上の層であるⅦ層からは、右向きの水鳥貼付文をもつ土器片(169)が出土している。8号堅穴の床面には8ヵ所に骨塚が残されていたが、これらに伴う動物意匠遺物はみられなかった。8c号堅穴の南西部貼床外砂地(床面)からは、クマ頭部の土製品(153)が出土した。長さ5.2cmと9号堅穴出土例(152)より一回り大きく、作りはやや粗いが、表情も含めて共通性が高い。8c号堅穴の時期は貼付文期前半とされているが、魚骨層については時期を絞り込むことは難しい。

7号堅穴は1947年に発掘調査されていたが、148は再調査時に埋め戻し土から見つかったものである。頭部を欠損したネズミザメの吻端骨製のクマ座像である。

10号堅穴西発掘区では、貝塚の調査が行われた。161はⅤc層から出土した鹿角製の柄であり、端部

に海獣の頭部を作出している。先端は欠損しているため、匙状になるのかナイフ状になるのか不明である。173～175はVc～Vd層から出土したクマ足跡型押文の土器である。173・174は同一個体と推測される。4本指の足跡で、足底球と肉球足根部に擦痕がみられるという。外面に横方向で左右に向きを変えて3列が施され、口縁部内面にも施されている。

知床地域

斜里町 チャシコツ岬下B(図21-183～193)

知床半島の中ほど、ウトロ市街地のすぐ西側で北西に向かって小さく突き出す岬がチャシコツ岬である。チャシコツ岬下B遺跡(旧称ウトロチャシコツ下遺跡)はこの岬の西側付け根の低位海岸段丘上に位置する。

183～187は、1949年に河野広道による発掘調査で1号堅穴から出土したものである。この堅穴では7枚の床面が認められたというが、そのうち第2層住居跡から出土したものである。第2層出土の土器はオホーツク文化後期の貼付文後半期のものである。被熱して割れているが、いずれも鹿角製。クジラ類の頭部を彫刻・浮彫で現したものが4点、尾部と泳跡を浮彫で表したものが1点ある。頭部は顎のラインと噴気孔2つが刻まれており、ヒゲクジラ類を上から見たところであろう。複数の動物が表現された同一個体の指揮棒の破片であった可能性もある。この他に、泳跡のみを現した浮彫の破片が1点あるが、集成には含めなかった。

188・189の2点は、1925年に小林正喜による発掘で堅穴から出土したものである。188はクマの頭部像であり、全体に角ばった作りである。189は鰭脚類が前肢を体側に沿わせ、後肢を後ろに伸ばして泳ぐ姿を現している。背中に長方形の凹みがあり、容器状になっている。オホーツク文化の彫刻は優美な曲面で構成されることが多いが、この2点の資料は、直線的な削りを残している点の特徴である。

190～192は2001年の調査で出土した。190・

191はオホーツク文化貼付文期後半のPIT3(堅穴)床面から出土した垂飾であるが、2点とも被熱が著しい。190は牙製のラッコ像であるが、常呂川河口例(118)に比べると省略された作りである。首の部分には横線でひだが表現されている。前肢は胸の前で畳まれており、尾部端には一孔が設けられているため、垂飾として分類した。191は一端に孔をあけ、縦に多数の刻線を施している。海獣像として報告されたものだが、半分を欠損していることもあり、動物意匠とする根拠は不確実である。192は土器表面に貼付文で四本足の動物を表現したもので、遺構外から出土した。後肢が強く屈曲していることから、カエルを表した可能性が高い。図の左右の斜辺は割れ口ではなく、口縁部突起の破片だと考えられる。

193は2011年報告のPIT4(堅穴)床直出土の土器である。口縁部に水鳥貼付文を施している。2つの円形貼付文を2本の弧状の貼付文でつなぎ、2本の短い足も貼りつけている。細長くてやや上に向く方が頭だとすれば、右向きである。

斜里町 チャシコツ岬上(図21-194)

切り立った海蝕崖に囲まれたチャシコツ岬の上にあるのがチャシコツ岬上遺跡である。オホーツク文化の堅穴は31軒が確認されており、発掘調査の成果から終末期にほぼ限定される。

194は22・23号堅穴の上層廃棄層から出土した小型棒状製品である。両端を欠損しているが、軸部に彫刻が施されている。大きな目や翼の表現があることから、フクロウを表現したものだと考えられる。端部ではなく中間部に彫刻されている点、小型で薄い点などが特徴である。

羅臼町 松法川北岸(図21-195～図22-199)

知床半島の南東側海岸の中央付近、根室海峡に注ぐ小河川である松法川の北岸砂丘上に位置する。1982年、国道の改修工事に伴う緊急調査が実施さ

れ、オホーツク文化の竪穴住居 11 軒が発掘された。時期は刻文期が 6 軒、貼付文期が 5 軒である。遺跡の付近は明治中期から拓けた場所であったが、竪穴は埋め立ててられており、保存状態は良好であった。特に 12 号・13 号住居跡は焼失住居であり、蒸し焼きになった状態で遺存状態の良い木製品が大量に出土した。

195・196 は 13 号住居跡から出土した角製品。195 はクジラ類の尾部と泳跡を浮彫で、196 は鰭脚類の頭部を彫刻で表現している。197・198 は 12 号竪穴から出土した木製品。197 は大型木製容器で、注口部がクマの頭部を模した形になっている。また口縁外側にはシャチの背びれ状の陰刻がみられるが、シャチを表した記号ではないかとも考えられている。なおこの大型木製容器は掲載した実測図では長さ 40.4cm であるが、その後の接合作業により、2021 年現在で長さ 60cm ほどになっている。198 はクマ頭部が鎖状に別の部品と組み合わさっている。全体像は不明だが、精巧な作りである。このほかに、詳細は不明だがラッコの彫像の破片も出土している（199：非掲載）。さらに 11 号竪穴ではイルカ土製品が開口部側に散在した多量のイルカ骨の上に乗るような形で出土したという（232：非掲載）。

以上の 11 号～13 号住居跡はいずれもオホーツク文化貼付文期の竪穴であり、動物意匠遺物の帰属時期も同じであろう。

根室地域

根室市 弁天島（図 22 - 200 ～図 23 - 208）

根室半島の北岸、根室港の北西部に浮かぶ東西 400m、南北 100 m ほどの島が弁天島である。最高地点 10m ほどの平坦な島である。弁天島遺跡は、1878 年にジョン・ミルンによって調査されたのをはじめ、数多くの研究者による調査が行われており、オホーツク文化を代表する遺跡の一つである。発掘された竪穴は 14 軒であり、墓も確認されている。オホーツク文化の各時期の土器が出土している。

204 は北構保男によって戦前に発見された、クジラ鯨の様子を描いた針入れである。オホーツク文化を代表する遺物として知られている。205 はやはりクジラか大型魚が中央に描かれた針入れである。204 に比べて線は粗いが、左側にはギザギザの線が描かれ、右側には横の長い刻線とその上に伸びる短刻線が描かれている。中央にクジラ、左奥に山並み、右側に船を配したとも考えられる。

203 は鹿角の分岐部に浮線彫刻によってクジラを描いたものである。クジラから線が伸びており、反対面には船のモチーフもみられることから、これもクジラ鯨の様子を描いたものとされる。

202 は 1979 年調査で骨塚から出土した指揮棒である⁽⁹⁾。焼けて状態が良くないのが惜しまれるが、全面に動物意匠と精緻な装飾が施されている。クジラや背びれの立ったシャチ、大きな尻尾のキツネなどが浮彫で表現され、平行する直線・曲線によって飾られている。

200 は国立歴史民俗博物館による調査で 9 号竪穴覆土から出土した、ネズミザメ吻端骨製クマ座像である。頭部を欠損している。覆土からは刻文系と貼付文系の土器が混在して出土した。

207・208 は 14 号竪穴から出土した水鳥貼付文土器である。207 の口縁部と 208 はどちらも細い粘土紐で紡錘状の輪郭を表現する点、頭を円形文で表す点で共通する。207 は円形文で足も表現し、208 は短い 2 本の足を貼付する。207 では、肩部にも S 字状の水鳥文を配している。口縁部と肩部の表現の違いが何を意味するのかわからないが、種の違いを表したものでしょうか。水鳥はいずれも右向きである。

根室市 トーサンプオロ（図 23 - 209 ～図 23 - 214）

根室半島の先端近くの北岸に入江状に入りこむトーサンプオロ湖の湖口北側の台地上に位置する。1930 年代から 40 年にかけて、北構保男氏によって発掘調査が行われた。当時竪穴のくぼみは 6 か所確

認できたというが、発掘の対象は刻文系土器が出土する小貝塚 10 カ所だった。

210 は鳥管骨製の針入れである。図の左側の面は集合沈線と列点で器面を区分し、首と脚の長い鳥のモチーフが刻線で描かれている。大きさと向きの異なる鳥が 4 羽程度いるようである。反対の面にはクジラないし魚が線刻で描かれている。

1970～80 年代にトーサムポロ遺跡 R-1 地点で行われた調査で出土したのが、209～214 である。いずれも貼付文期後期後半のものである。

209 は、1a 号堅穴の土器集中部から出土した指揮棒である。焼けて破片になっているが、リアルなクマ彫像である。本来は屈曲部にクマの全身像が逆 V 字の軸を抱き抱えるような向きで表現されていたらしい（図 26 - 4）。214 は 2 号堅穴から出土した小型土器で、口縁に動物の頭部を模した把手がつけられている。上面の円形の貼付文 2 つで目を表し、先端部の小さな刺突によって口を表している。212 は 2 号堅穴の東側遺構外から発見されたクマの頭形の石である。長さ 41cm で、人為的な加工の有無は不明。213 は 6 号堅穴床面から出土した水鳥貼付文の土器である。水鳥の頭にあたる部分に刺突を加えている。211 は 7 号堅穴から出土した有孔石錘である。両側縁に浅い抉りが入り、表面に太い凹線でモチーフを描いている。凹線で区切られた範囲に注目すれば上向きの魚、凹線自体に注目すると人間の下半身のようにも見える。類例から判断して、魚としておくのが妥当だろう。

根室市 オンネモト貝塚（図 24 - 215～図 24 - 226）

オンネモト貝塚は根室半島の北岸、トーサムポロ遺跡の 2km ほど東に位置する。納沙布岬まで約 2km の地点である。遺跡は入江の西側の標高 12～13m の台地上に位置する。1965・66 年に東京教育大学によって堅穴 2 基と貝塚が調査された。いずれもオホーツク文化貼付文期のものである。

215・216 は II 号堅穴に付属する貝塚から出土した。215 は鹿角製で端部に小さくクマの頭部を表現している。反対側はクサビ形に切断されており、別の部品と組み合わせたものかもしれない。216 は鰭脚類を丸彫りで表現した骨製垂飾である。後肢部に孔をあけている。217 は II 号堅穴上層床面から出土したもので、長さ 2.4cm と極めて小さな四足獣の丸彫り像である。218 は貝塚から出土した板状骨製品で、尾をもつ四足獣のシルエットを表している。217・218 はいずれも細長い尾を後ろに突き出し足が短い四足獣である点が共通する。カワウソなどの小型獣の可能性が高いと考えられている。

219～221 は釣針軸に動物意匠を施したもので、いずれも貝塚から出土した。219 は摩耗が進んでいるが、軸部に線刻で魚類を表したものの。220 は軸頂部にフクロウ像を彫刻している。針先部は欠損しているが、U 字型になるものだろう。221 は外縁にヘビを象った細い隆帯を設けた例である。×字状の刻線を連続して施し、頭部も表現されている。

222～226 は、土器表面に粘土紐の貼付による動物意匠を施したものである。225 は四本の足を広げた様子を上から見たものであり、姿勢はカエル意匠とされるものに近いが、棒状のプロポーションはカエルとは似ていない。その他 4 点はいずれも水鳥文とされるものである。222 は II 号堅穴の C 区床面溝中、226 は貝塚から出土した。224 は z 字形の左向きになっており、珍しい。

謝辞

以下の諸氏には資料についての情報や図版を提供いただいた。末筆であるが、記して感謝したい。

梅田広大、大塚和義、木山克彦、熊木俊朗、高島孝宗、西本豊弘、藤澤隆史、米田衛（五十音順）

図の出典

図 25：表 1 - (5)に記載

図26-1：加藤・長沼編2017、2：大川1998、3：児玉・大場1952、4：山浦1984、5：山谷2008
 図27-6a：筆者撮影、182a：熊本俊朗氏計測

文献

大場利夫 1953「ふくろ像」『貝塚』45:3
 佐藤忠雄・長田良雄・山口巖 1964『稚内・宗谷の遺跡』稚内市教育委員会
 大場利夫 1964「北海道の先史時代の原始工芸」『日本原始美術』2、講談社、pp.160-162（遺物解説 p.188、出土遺跡一覧はページ無し）
 大場利夫・新岡武彦・大井晴男・菊池俊彦 1972『枝幸町川尻北チャシ調査概報』、枝幸町教育委員会
 市立函館博物館編 1983『児玉コレクション目録 I 先史・考古資料編』
 網走市立郷土博物館 1990『網走市立郷土博物館考古資料目録』第4集

氏江敏文 1995「「南貝塚式土器」に関するメモ」『北海道考古学』31:229-240
 野村 崇 1997『日本の古代遺跡 41 北海道Ⅱ』、保育社
 山谷文人 2008「利尻島亦稚内貝塚出土トナカイ角製品の再考」『北方島研究』6：75-84
 加藤博文・長沼正樹編 2017『2016年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター

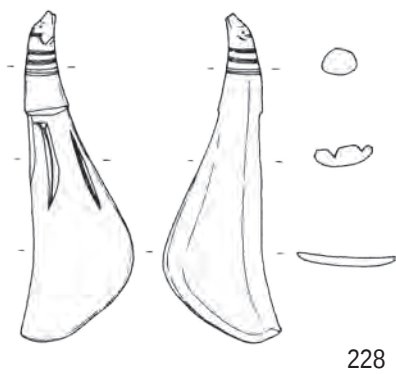
札幌市 「ヒグマ対策 痕跡の見分け方」
<https://www.city.sapporo.jp/kurashi/animal/choju/kuma/konseki/index.html>（2023年2月14日取得）
 北海道教育委員会 「北の遺跡案内」
https://www2.wagmap.jp/hokkai_bunka/portal（2023年2月1日取得）
 ※（1）と共通するものは省略した。

表1-(5) オホーツク文化の動物意匠遺物

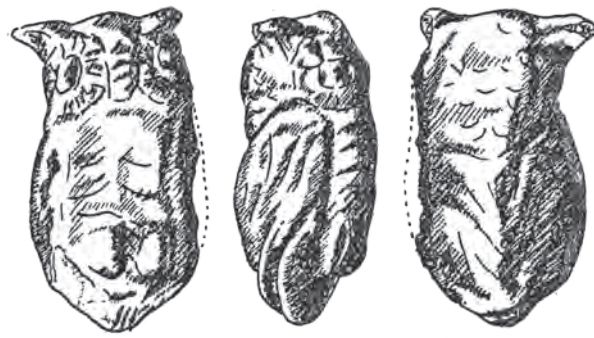
図	番号	自治体	遺跡名	器種	動物	部位	手法	素材	出典	出典図番号	備考
図25	228	利尻町	亦稚貝塚	スプーン	海獣	頭部	立体		岡田他1978	図15-6	
図25	229	稚内市	富磯	動物像	フクロウ	全身	立体	土	大場1953		
図25	230	枝幸町	川尻北チャシ	土器	クマ	足跡	型押	土	木山克彦氏提供 (大場他1972)	(Fig.18-3)	
図25	231	網走市	モヨロ貝塚	釣針軸?	クマ	掌部	立体	海獣骨	米村1955	PL.53-12	
図25	91	湧別町	川西	土器	水鳥	全身?	貼付	土	網走市教育委員会1955	図版3、a: 6-59、b: 6-700、c: 6-629、d: 6-82、e: 6-8、f: 6-47	10羽のうち7羽分

(1) この資料については大塚和義先生、西本豊弘先生、藤沢隆史氏にご教示いただいた。掲載写真は、1996年の浜中2遺跡の発掘調査時に筆者が撮影したものである。
 (2) 図のスケールは誤っていたため修正した。
 (3) もっともナナイのトラ彫像は前後肢が短く、一般的にイメージされるトラとはやや異なるプロポーションである。シルエットだけをオホーツク文化の遺物と比べれば、カワウソなどの小型獣とされてきたものに近い。現代人のイメージを当てはめて動物意匠遺物のモデルとなった動物を推測することには当然限界がある。
 (4) 本資料については高畠孝宗氏にご教示いただいた。拓図は木山克彦氏の提供による。

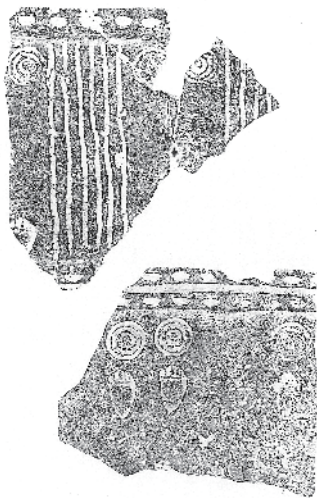
(5) 前稿では米村の報告のみを参照していたが、網走市立郷土博物館の目録に写真が掲載されていた。大きさ等については梅田広大氏にご教示いただいた。
 (6) この資料については、梅田広大氏にご教示いただいた。
 (7) 大場の1955年報告には該当する資料は見当たらないが、市立函館博物館所蔵の児玉コレクションに含まれていることが確認できる（市立函館博物館編1983：図版81）。
 (8) 三次元データは熊本俊朗氏の提供による。計測はScaniverseによるiPhone LiDAR Scanである。資料については網走市立郷土博物館の米村衛氏、梅田広大氏にご教示いただいた。
 (9) 『オホーツク文化—あなたの知らない古代』図録写真82-1を参照されたい。



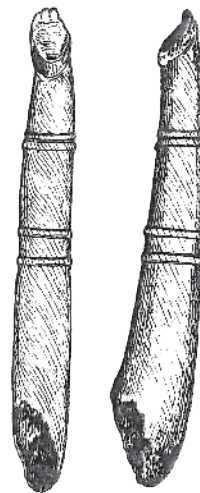
228



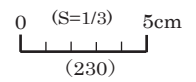
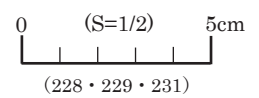
229



230



231



91

図 25 オホーツク文化の動物意匠遺物：補遺

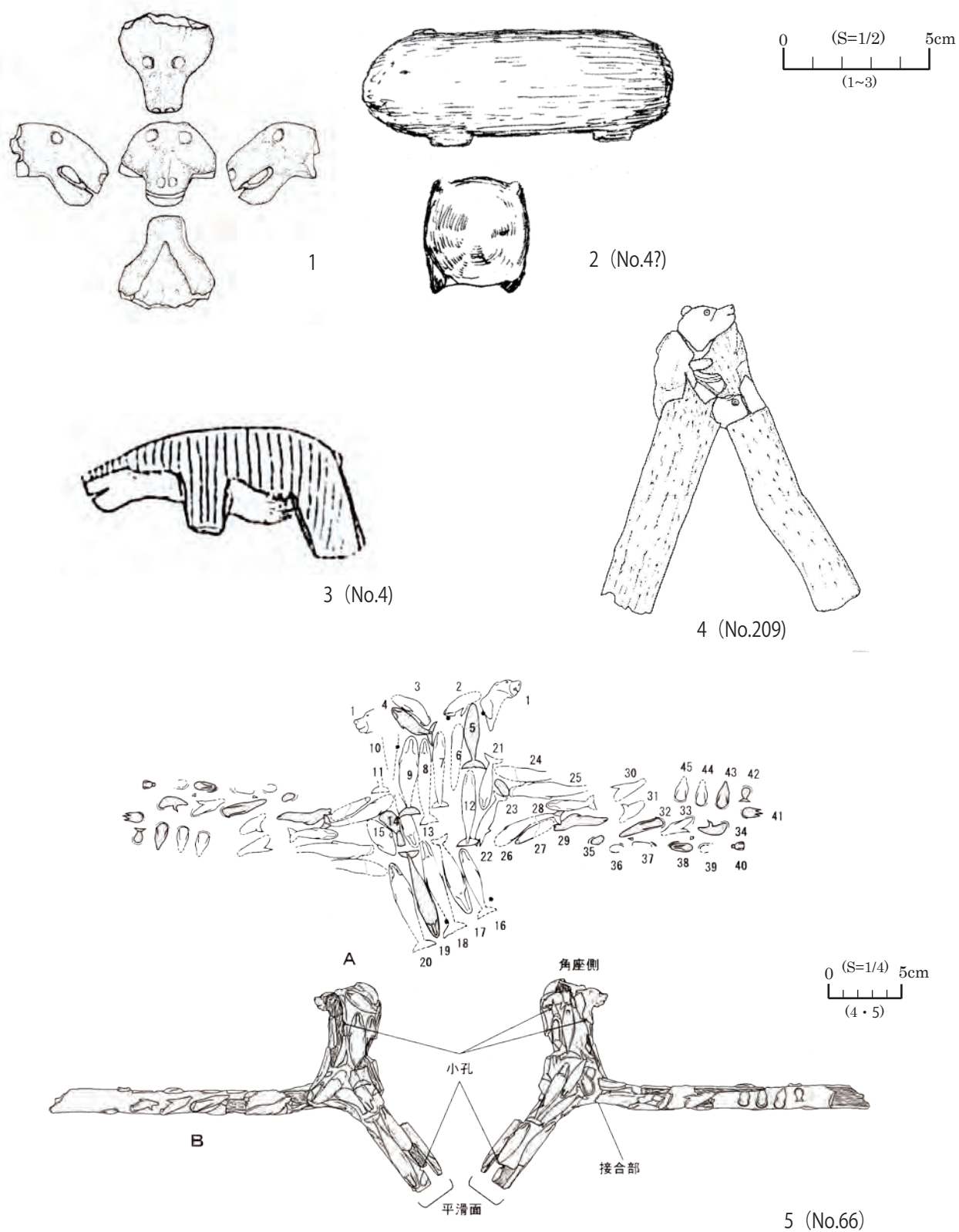


図 26 参考図



6a (縮尺不同)



s-182a

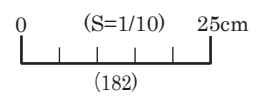


図 27 再掲載資料

八王子市郷土資料館井上コレクションの 千島出土骨角器

高橋 健*

八王子市郷土資料館の井上郷太郎コレクションから、千島出土の骨角器を報告する。今回報告する資料は、2021 年秋に横浜ユーラシア文化館で開催した特別展「オホーツク文化ーあなたの知らない古代」（主催：横浜ユーラシア文化館、東京大学人文社会系研究科、同附属北海文化研究常呂実習施設）の関連展示において借用・展示したものである。関東地方の博物館に所蔵されていることもあって公開される機会が少なく、オホーツク文化の研究者にはこれまであまり知られていなかった資料である。南千島出土の考古資料として重要であることから、本紀要において資料報告を行うことにした。

資料の来歴

資料の寄贈者である井上郷太郎氏（1918～2003）は八王子市出身の陶芸家であり、原始・古代資料のコレクターであった。そのコレクションは旧石器時代の石器から奈良平安時代の瓦まで幅広く、八王子市に寄贈された数は1700点余りに及んでいる。1962年にはこのうち約800点を掲載した『考古学資料図録 井上コレクション』が刊行された（井

上1962）。また、2005年に八王子市郷土資料館で開催された特別展に合わせて、縄文時代資料を対象を絞ったカラーの図録も刊行されている（八王子市郷土資料館2005）。

収集者の関心を反映してコレクションは古瓦・土器、さらに土偶や埴輪といった焼き物を中心としているが、石器や骨角器も含まれている。『考古学資料図録』に掲載された骨角器の出土遺跡をみると、東北では亀ヶ岡遺跡や宮戸島貝塚、関東では余山貝塚や椎塚貝塚といった著名な縄文遺跡からの出土品が中心である。この中に千島出土の骨角器5点が含まれている。『考古学資料図録』における記載内容は下記の通りである。

179 骨角銅器（銛・鏃） 右長10.0 骨・角・銅 オホーツク文化 千島択捉島留別村（右2点骨製 中2点角製 次1点銅製鏃 左角製鏃）

銅鏃を含めて6点の掲載資料のうち、今回は骨角器5点を報告する（表1・図1・図4）。

表1 井上コレクションの骨角器

資料名	図	器種	分類	素材	重(g)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
資料1	図1-1	銛頭	A群	海獣四肢骨	7.9	110	11	8
資料2	図1-2	銛頭	B群	海獣骨	5.3	76	12	8
資料3	図1-3	銛頭	雄形	鹿角	0.9	31	13	4
資料4	図1-4	掘り具		鯨骨	12.0	99	17	13
資料5	図1-5	掘り具		鯨骨	25.6	149	19	14

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

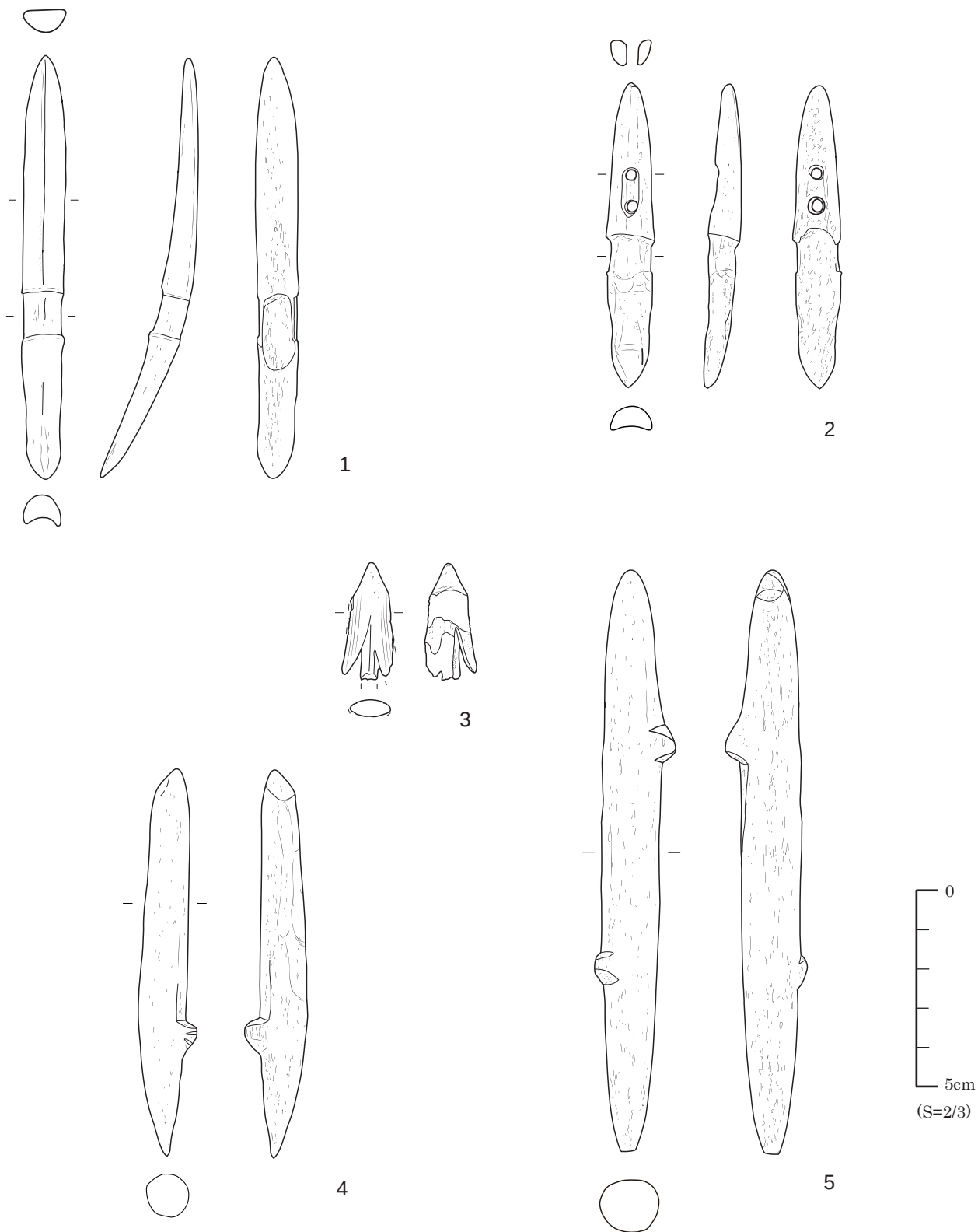


図1 井上コレクションの骨角器

出土地について

1933年に日本考古図録大成第15巻として刊行された八幡一郎『石器骨角器』に、今回報告する資料の一部が掲載されている（図2）。図版41に「北海道発見」として有孔円盤や垂飾、骨鏃、銚頭など骨角器17点の写真が掲載されたが、この中の11の銚頭が資料2にあたる。平面形だけの比較となるが、縦に並んだ2索孔と全体のプロポーション、ややくびれた尾部の形状などが一致する。なお佐藤達夫はこの図版から起こしたスケッチを示している（佐藤1953：図版10－5）。これに比べると決め手となる特徴が少ないが、八幡図版の8についても長さや突起の位置が一致することから資料4と同一だと考えていいだろう。

この図版41には「北海道発見」とのキャプションが付されている。解説では2点とも「骨銚」とされており、「礼文島発見のものに似る」とあるだけで、他の資料にみられるような出土地や所蔵者についての言及がない。択捉島も行政区画上は北海道に含まれるため、このキャプションは必ずしも択捉島出土であることと矛盾するものではない。本稿では『考古学資料図録』にもとづいて、「択捉島留別村」出土だと考えておきたい。

択捉島の北岸中央部に位置する留別は、同じ北岸で20km北東にある紗那に次いで人口の多い中心的な集落の一つだった。ただし『考古資料図録』には「留別村」とあり、必ずしも「留別」の集落に限定してはいない点に注意が必要である。留別村は択捉



（縮尺不同）

図2 八幡一郎1933『石器骨角器』掲載図版

島の南西側のほぼ半分を占めている。留別及び留別村における1930年代とそれ以前の考古学的調査について概観してみたい。

古くは1878年に千島を訪れたJ.ミルンによって、ルベツに堅穴のくぼみが残っていることが記録されている(Milne 1879)。1890年に択捉島の遺跡踏査を行った石川貞治は島内14カ所の地名を挙げたが、そのうちルベツ、トシモイ、タンネモイの3カ所が留別村の範囲であった(石川 1891)。いずれも堅穴があり、トシモイでは土器片も採集されている。鳥居龍蔵は1899年の千島調査で留別に寄港し、東南岸の単冠湾に面したトシモイ(年萌)で調査を行っている。鳥居による択捉島採集資料は地点が明らかでないものが多いが、オホーツク刻文系土器とトビニタイ土器を含む(熊本・高橋編 2010)。陸地測量部の稲田巳喜蔵は1909年に千島列島で遺物を採集し、後に東京帝国大学理学部人類学教室に寄贈した。この中に択捉島留別、羅臼、単冠湾の注記をもつオホーツク土器とトビニタイ土器が含まれている(同前)。いずれも留別村の範囲にある。

昭和に入って1930年に南千島択捉島・色丹島の調査を行った馬場脩は、「エトロフ島シャナ及びルベツ附近出土の石鏃」の写真を示した(馬場 1937)。馬場は骨角器に造詣が深かったが、留別からは特筆すべき骨角器は見つからなかったようである。同じ頃、谷敬一によって留別村の南東岸にある恩根別貝塚、植別貝塚、カンケカラウス貝塚などが調査された(谷 1931)。これらの貝塚では骨角器が多く出土しており、その内容も今回報告する資料と近いものがある。1932年には田中阿歌磨らの地理学者のチームによる南千島の調査が行われ、この時に採集された択捉島出土の遺物を斎藤忠が報告している(斎藤 1933)。留別出土遺物は土器のみであり、続縄文が多くオホーツクも含まれている。年萌出土遺物は石鏃3点だが、この他に採集品の大型有孔石錘が報告されており、貝塚があったという。1933年には犀川会による「北海道原始文化展覧会」

が道内各地で開催された。根室在住の佐竹溪谷と長尾又六が所蔵する択捉島留別の資料も出品されていたが、全て土器と石器であり、骨角器はみられない(犀川会 1933)。名取武光はこの展覧会の直後に南千島の発掘調査旅行に出かけ、留別の郵便局付近で続縄文の堅穴を発掘した(名取 1945)。

以上から留別の集落付近にもオホーツク文化の遺跡があったことは確かであるが骨角器は報告されておらず、少なくとも貝塚が地表から確認できるといった状況ではなかったらしい。1930年頃に知られていた遺跡の中から考えると、本資料は島の南東岸中央部の貝塚のいずれかから出土した可能性が高いといえる。

事実記載

資料1は前田分類のA群銚頭である(前田 1974)。構造は開窩兼用式、尖頭で尾部も分岐しないシンプルな形状である。尾部は将棋の駒状に鈍く尖っている。背面側の中央には明瞭な索溝が設けられる。腹面側の柄溝の先端はコの字状になっている。

資料2は前田分類のB群銚頭である。開窩分離式で索孔2つが縦位に並んでおり、背面側では導索溝でつながれている。背面側の中央に設けられた溝は、柄結縛溝(締着溝)の機能をもつ。柄結縛溝の上縁は浅いが明瞭な段をなすのに対して、下縁は不明瞭である。この部分に幅3mm程度のごく浅い削りの痕跡がみられることから、この部分を再加工した可能性も考えられるが、その意図は不明である。尾部にかけて一旦くびれた後にやや太くなり、端部は鈍く尖る。腹面側の柄溝の先端は丸みを帯びてアーチ状である。また、頭部の索孔より下の部分は腹面側が凹んでいるので、柄溝先端の段はごく浅い。

資料3は刃溝をもつ雄形銚頭の頭部破片である。薄手で先端は山形に尖る。片側は欠損しているが、幅の狭い刃溝を設けていたものである。逆鉤は左右互い違いだが、先端の1段だけが残っている。表側の側縁と平行に3本の細沈線が施されている。

資料4・5は掘り具である。棒状で端部が尖るタイプである。資料4は左右互い違いに着柄のための突起を持つ。両端ともに鈍頭でやや光沢を帯びる。断面形は、一部に平面をもつ略円形である。資料5は突起が一つだけで、一端が尖るのに対してもう一端は斜めの面になる。尖頭の端部はよく磨かれており、断面は扁平な形状である。もう一端は斜めの面以外は円形に近い断面形を持つ。ただし、中央部での断面形は不整であり、面取りされているようである。おそらく再加工の結果こうした形状になったものだろう。

考察

銚頭3点はいずれも異なるタイプである。資料1はA群銚頭として一般的な形態であるが、保存状態のよい完形品である。資料2はB群銚頭であるが、索孔が縦位に並んでいる点が特徴的である。資料3のように華奢で先端に刃溝をもつ雄形鉤引式は、道東部オホーツク文化のものと共通する。道東部のオホーツク文化後期の遺跡から出土する銚頭のセットは、A群が主でB群と雄形鉤引式が少数伴う構成が一般的である。この3点の資料から組成について論じることにはできないが、貼付文期の道東部の銚頭の組み合わせと比較して違和感はない。

開窩分離式のB群銚頭は道東部のオホーツク文化貼付文期前半に出現するが、索孔は横位に並ぶの

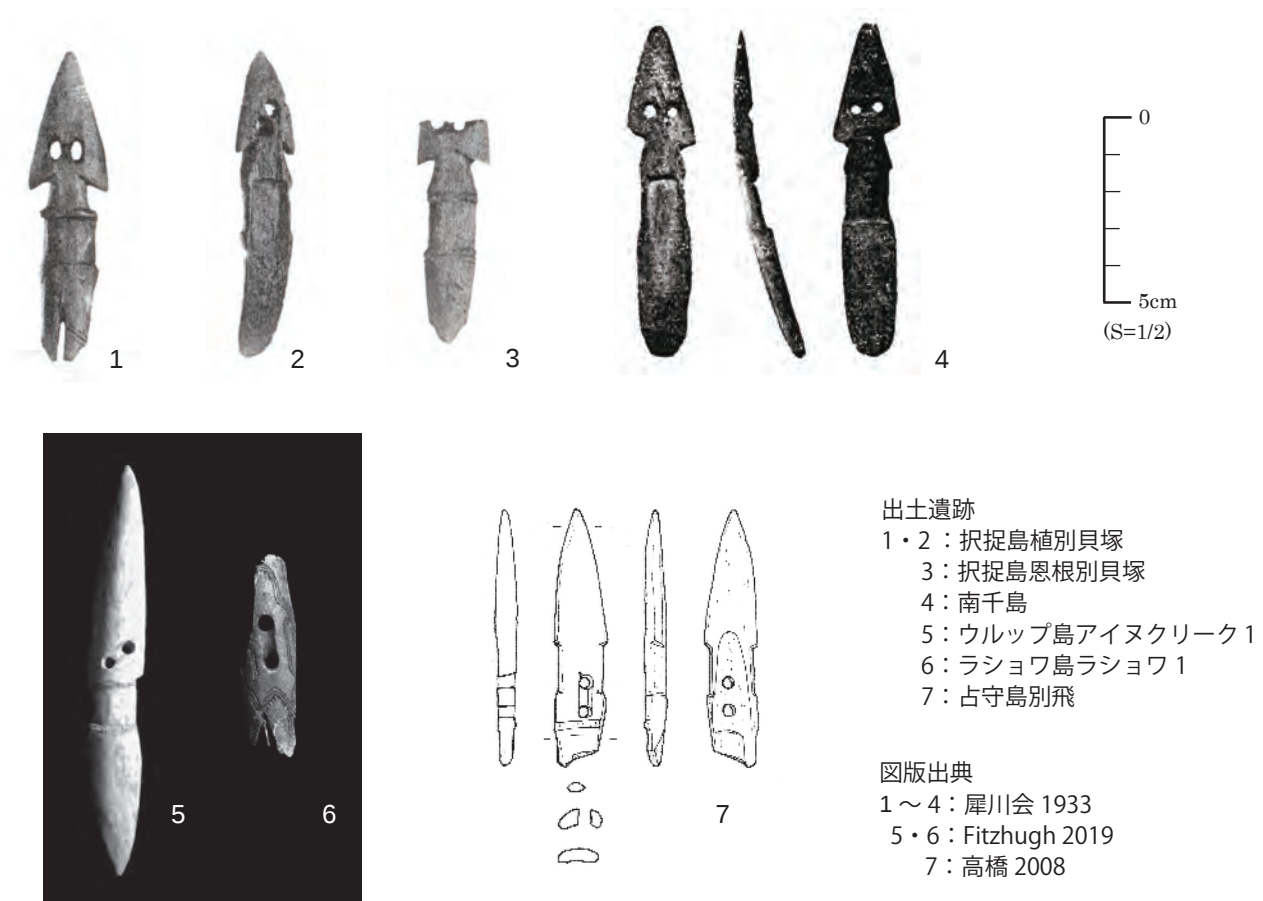


図3 関連資料：千島列島出土の開窩分離式銚頭

が通常である。器体の幅が比較的狭いB群銚頭では、横位に索孔を配置すると折れやすくなったと考えられ、索孔の部分で折損している例が非常に多い。しかし、それにも関わらず、北海道におけるB群銚頭は基本的に横索孔である点が特徴である。

一方、擦文文化の銚頭は銚縄を結び付ける索溝が柄の固定用の結縛溝を兼ねる開窩兼用式であった。擦文晩期になると、知床半島の羅臼町オタフク岩洞穴遺跡で、タイプⅢとされた縦位2索孔をもつ開窩分離式銚頭が出現する。このオタフク岩タイプⅢ銚頭は、開窩分離式という構造ではオホーツク文化のB群銚頭と共通するが、索孔の配置に加えソケットの幅が狭く断面がフラスコ状になる点が異なっている。その系譜は本州、北千島、サハリンの資料やオホーツク文化のB群銚頭などに求められてきた。筆者はオホーツク文化B群を有力な候補だとして上で、南千島との関連も視野に入れる必要があると指摘した（高橋 2008）。今回報告した資料2はまさに南千島出土のB群銚頭であり、北海道の銚頭の変遷を考える上でも興味深い資料である。

ここで千島列島出土のB群（開窩分離式）銚頭を概観してみたい。谷によって択捉島東岸出土資料3点が報告されている（谷同前）。図3-1・2は植別貝塚出土である。1は頭部に横位2索孔をもつ資料である。2は索孔の配置が斜位になっている。3は恩根別貝塚出土の例で、1とよく似た構造だが、索孔の部分で折れている。4は馬場によって示された資料である（馬場 1937）。出土地点は明記されていないが、南千島である。馬場は南千島ではエトロフ島と色丹島で調査したが、図示された骨角器の多くはエトロフ島シャナで採集されたものであるから、この資料もその可能性が高い。以上の南千島出土の4点は、いずれも頭部両側に逆鉤（カエシ）をもち、索孔の位置が頭部にある点が共通する。1は尾部中央に深い切り込みを入れて二又にしているが、他の3点は分岐しない。前述した八幡『石器骨角器』図版41には、縦位2索孔をもつB群銚頭が

もう1点写っている（図2-15）。先端から尾部の上半まで縦に真ん中から割れ、左側を欠損している。頭部には深い逆鉤をもち、尾部は両側に小さな距を設けている。この資料も出土地不明だが、やはり南千島出土の可能性はある。

近年のフィッツヒューらによる千島列島調査によっても、いくつかの銚頭が出土している（Fitzhugh 2019）。開窩分離式に絞ると、中部千島ウルップ島のアイヌ・クリーク1遺跡（Ainu Creek 1）から逆鉤をもたない斜位索孔の例が出土している（図3-5）。やはり中部千島ラショワ島のラショワ1遺跡（Rasshua 1）からは、縦位2索孔をもち尾部が三又に分岐する銚頭が出土している（同6）。背面に線刻による装飾を施しており、尾部の形状や背面の導索溝など、オタフク岩洞穴のタイプⅢと極めて類似性が強い。ただし、オタフク岩タイプⅢはソケットの側壁が内傾して断面がフラスコ状となり、ソケットの先端部に索孔を設ける点に特徴があるが、こうした点については写真からだけでは確認できない。7は北千島占守島別飛から出土した資料である。本来は縦位2索孔の開窩分離式銚頭だったが、折損して開窩兼用式（前田A群）に再加工されたとみられる資料である。

このように、千島列島では、B群銚頭の索孔の配置が斜位や縦位のものがみられ、さらにオタフク岩タイプⅢそのものも存在した可能性がある。オタフク岩タイプⅢは、千島列島における縦位2索孔のB群銚頭をベースに生み出されたのではないだろうか。今回報告する井上コレクションの銚頭は、南千島における縦位2索孔のB群（開窩分離式）銚頭の実例として、重要な資料だといえる。

資料4・5は掘り具であるが、板状ではなく棒状の器体をもつ。大場によるモヨロ貝塚出土資料の分類では、「骨製打突器」とされたものである（大場 1955）。こうした先端部の断面が円形になる棒状のタイプは道北部にはみられず、道東部、特に根室方面に多い。トーサムポロ遺跡ではアイスピックとし

て報告された（北構他 1953）。谷による択捉島東海岸の発掘でも多数出土している（谷同前）。

結論

わずか5点の資料ではあるが、今回報告した択捉島出土の骨角器は道東部、特に根室半島のオホーツク文化の遺跡から出土するものと基本的によく類似している。これは南千島のオホーツク文化が道東部と密接に関係していたことを示している。ただし、資料2にみられる縦位2索孔の開窩分離式銚頭の類例は北海道本島では知られておらず、千島列島独特のものである。オホーツク文化からトビニタイ文化にかけての銚頭の変化にはまだ不明確な部分があるが、その空隙を埋める可能性のある資料として注目したい。

謝辞

資料調査にあたっては、八王子市教育委員会の阿部香子氏、河津美穂子氏にお世話になった。末筆であるが記して感謝したい。

文献

- 石川貞治 1891「千島エトロフ島堅穴、古器物発見地」『東京人類学会雑誌』6(59):173-175
井上郷太郎 1962『考古学資料図録』、多摩考古学研究会
大場利夫 1955「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10:173-249
北構保男・須貝洋 1953「北海道根室半島トーサムボロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』24:31-48

- 熊本俊朗・高橋健 2010『千島列島先史文化の考古学的研究』、東京大学常呂実習施設研究報告7
犀川会編 1977（1933）『北海道原始文化要覧』、北海道出版企画センター
斎藤 忠 1933「千島択捉島出土の土器及び石器」『考古学雑誌』23(6):333-344
佐藤達夫 1983（1953）「我が国に於ける回転式銚頭について」『東アジアの先史古代文化と日本』、六興出版、pp.349-414
高橋 健 2008『日本列島における銚頭の考古学的研究』、北海道出版企画センター
谷 敬一 1931「択捉島東海岸発見の骨牙器」『史前学雑誌』3(4):15-25
名取武光 1945「南千島の発掘旅行記」『噴火湾アイヌの捕鯨』、北方文化出版社、pp.237-277
八王子市郷土資料館 2005『井上コレクション よみがえる縄文の美と技』
馬場 脩 1937「千島群島出土の狩猟具及び漁具」『民族学雑誌』3(2):295-337
前田 潮 1974「オホーツク文化とそれ以降の回転式銚頭の型式とその変遷」『東京教育大学文学部史学研究』96:1-35（再録：1987『北方狩猟民の考古学』同成社、65-114）
八幡一郎 1933『石器骨角器』日本考古図録大成 15、日東書院
Fitzhugh, B. 2019 Settlement History and Archaeology of the Kuril Islands in Regional Context. 第33回北方民族文化シンポジウム網走報告書『環北太平洋地域の伝統と文化 3 カムチャツカ半島・千島列島』pp.15-24
Milne, J. 1879. Notes on the Koro-pok-guru or pit-dwellers of Yezo and the Kuril Islands. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 10: 187-198.



図4 井上コレクションの骨角器（写真）

横浜ユーラシア文化館紀要 第11号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 11

2023年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

制作 アンクベル・ジャパン株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by ANQBELL JAPAN CO., LTD.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2023

ISSN 2758-6332

横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures